

時事放談 私にとっての宗教

永遠の片思い

えいごゆめおいびとたち

英語夢追い人たち

逐次刊行物

平成7年8月-3 号

国立婦人教育館

婦人教育センター



REPORT

読んで、書いてネットワークキング



遺伝子工学を駆使した新植物の登場。
高等動物を対象に進む生命工学。
バイオテクノロジーはわれわれの生活をどう変えるか。

バイオテクノロジーとヒューマンライフ

全3巻

鎌田博・堀秀隆編

四六判上製／平均240頁／各巻定価2060円

① 夢の植物を育てる

序文…原田宏／人工種子…鎌田博／近未来のイネ…藤村達人／野菜の改良…今村順／花—さらなる美を求めて…三位正洋／植物のウイルス病…日野稔彦／植物工場…高山真策

② 21世紀の動植物資源

豊かな海の魚資源…今田克／健康を支える海藻…川合正允／家畜と遺伝子工学…安江博・今井裕／先端医療の有力サポーター…赤池敏広／樹木からの恵み…海老沼宏安／植物組織培養と医薬成分…下村講一郎

③ 微生物との共栄

異常環境下の微生物…星野貴行／バイオの母コウボ…大内弘造／キノコの世界…柳園江／昆虫の利用…岩花秀典／生物農薬…堀秀隆／微生物による環境浄化…菅健一

日本経済評論社

〒101 東京都千代田区神田神保町3-2 (定価税込)
Tel. 03 (3230) 1661 Fax. 03 (3265) 2993

さまざまに戦後

〈全三集〉

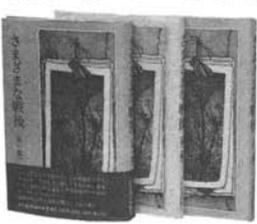
鎌内敬司・松本昌次編 各定価 三三六円

人々はどのような思いでこの戦後を生きてきたのか、越えてきたのか、未だ佇んでいるのか。戦後50年の真の意味を問う。

第一集 森崎和江・広渡常敏・木下昌明・高盛菊枝・林浩治・廣重聰・小原麗子・松下竜一

第二集 宮澤泰治・三木健・関千枝子・嵐山正治・鈴木地蔵・石田友三・羽馬卓也・伊藤ルイ

第三集 もろさわよこ・美馬達夫・松田政男・庄幸司郎・長谷川憲一・三浦輝雄・鈴木伸男・白鳥邦夫



東山書房

〒104 東京都中央区新川2-2-1
108 東京都右京区山ノ内大町5-3-708

TEL 03 (3) 535-8358
FAX 03 (3) 535-8358

性からだるこころ



悩みはポイ!

毎日中学生新聞連載

村瀬幸浩・堀口雅子著

悩むことはいいこと。人の苦しみ・悩みのわかることは大切。でも時には、1人で考え過ぎず、「助けて」と声を出すことも大事。みんなの悩み—性編、からだ男の子編、からだ女の子編、こころ編に2人が明快に答えます。(中学生に勧める本、主な思春期外来リスト付き)

四六判／定価1500円(税込)

“人間と性”を考える話題の総合情報誌

Human Sexuality

[ヒューマン・セクシュアリティ]

●編集長 ●村瀬幸浩 ●
●企画編集 ●“人間と性”教育研究協議会
●季刊 B5判・120頁・定価1600円(税込)

19号〈新刊〉〈特集〉障害者のセクシュアリティと性教育

〔特集座談会〕知的障害児・者をとりまくセクシュアリティ〈ゲスト〉河東田博+永野祐子+谷森優子+中野正一
〔同会〕采井敬行

〔特集論文〕障害者の「性」に関する歴史的経過と今日的課題—谷口明広

〔特集インタビュー〕障害を持つ立場から発言するインタビュー・堤愛子+市橋博+安積遊歩+山本良典
取材・三井富美代+草野いづみ+木谷美子+松原慶

●サブ特集=「引き裂かれた生と性」—戦後50年の現在◎

18号 育つものとしての「母性」そして「父性」

17号 家族—その将来の明暗を問う

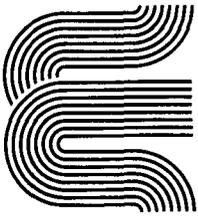
16号 エイズ—共生・共存の展望をひらく

15号 女性の性的欲求と性行動

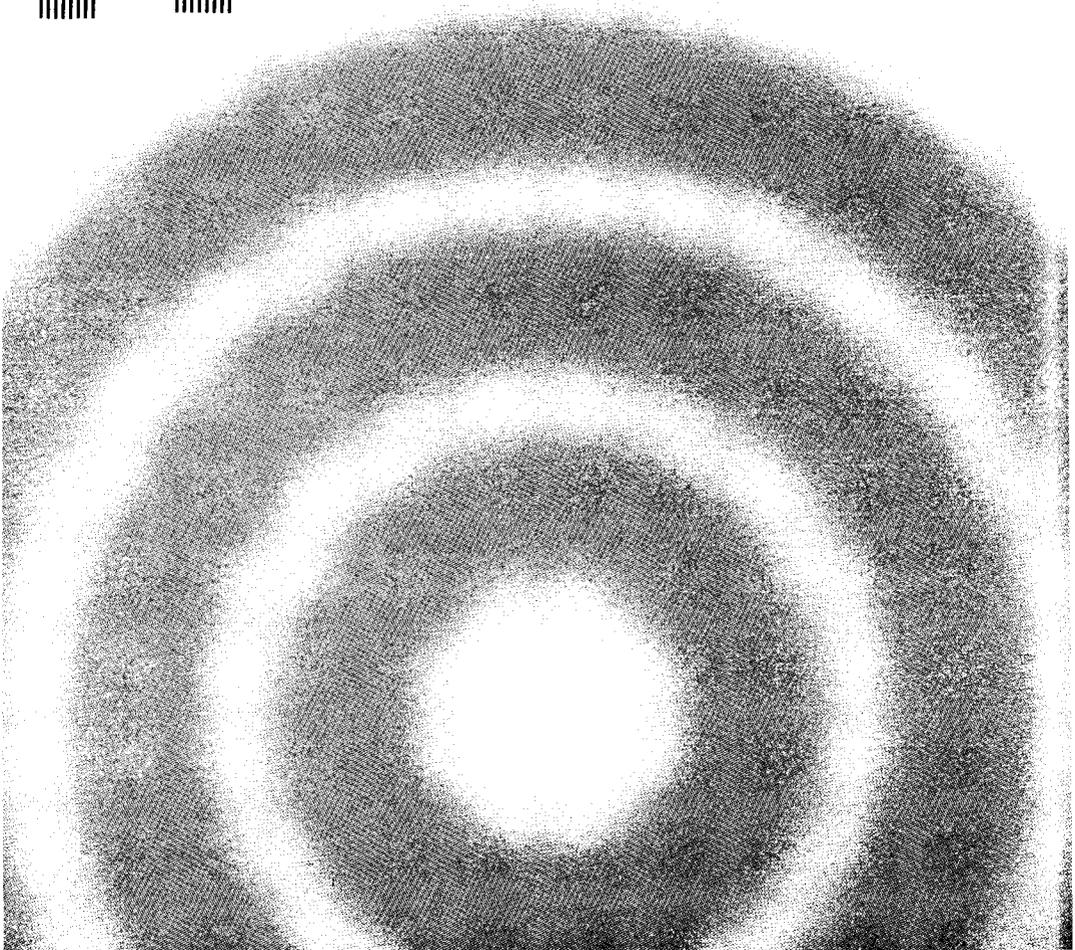
14号 10代の性と「純潔教育」を考える

13号 いま、あらためて人工妊娠中絶を問う

●直送定期購読者受付中 ●郵価 01040-1-1067 番
1年=6,400円/2年=12,800円(送料・税込みです)



●—— 読んで、書いて ネットワーキング



読んで、書いてネットワークキング わいふ二五五号

目次

4 ヴァラエティ・ライフ③

「スットンキョウに参加しませんか」
多彩な催し物の仕掛人 山本和子さん
写真提供／山本和子さん 文／原田静枝さん 撮影／佐々木恵子

10 特集 家事サービスを利用してみたら 掃除サービス顛末記 森 節子

16 エッセイスト・クラブ

高松恭子・中松ミナ子

21 スパリー言

金子あき・大沢陽子
十文字圭子・藤木由紗

29 ピンポイントニュース

高松恭子・荒木裕子

30 戦後50年記念連載 シベリアの青春③ 福井秀雄

41 おさない子を育てる

加藤泰子・朝倉美紀
鈴木美奈・林 直美

48 永遠の片想い 西尾裕子

60 大人になりかかった子供たち

十文字美恵

62 私の宗教観 松本とみよ

72 忘れ得ぬ人々

石川久代・宮崎貴子・橋本あゆみ

78 サーフレシーフ

林 直美・飯塚真里・匿名・香山なおみ
中野 薫・神戸利枝・岸田麗子
比嘉ユカリ・小林智枝・西尾ありか

90 戦後50年記念連載③
私と英語 酒井智恵子

98 ブック情報

102 時事放談④「私にとつての宗教」
神楽玲子・神谷紫津子・酒井智恵子
時尾松子・匿名・牟礼麻衣子

112 フリースペース

深田加奈・荒木裕子・さいたまゆみ
石井しのぶ・西尾ありか
早乙女光子・潮田京生子

124 おすすめの一冊

佐藤ゆかり

125 平成おつたまげーション②① 西田淑子

126 英語夢追い人たち① 竹谷セツ
語学喫茶物語

136 情報コーナー

137 お知らせ

138 コミック●痛快ノ一般人②⑧ 栗田笑

142 ファム・ポリテイク編集室より 田中喜美子

144 老人ホーム情報センター発

146 わいわいがやがや

浅田節子・一色京子・大石泰子

次号投稿募集 149 投稿規定 150
編集だより 152

自費出版はわいふへどこぞ 29
わいふ原稿整理方針 74 文章講座のおすすめ 80
バックナンバー 88 お友達にわいふを 89
添削希望の方へ 96

■表紙/レイアウト・工房はやし
■AD・林 佳恵

イラスト/梅村苺・奥島千恵子・小沢恵子
カステラネンコ・小林正子・小宅昌枝
佐藤瑞江子・田沼千恵・田村幹代・鳥居禎子
西宮さき・橋本美智子・山田京子



「スットンキョウに参加しませんか」多彩な催し物の仕掛人

山本和子さん



誕生以来、愛情をふり注いでくれた伯父夫婦が、日本映画の制作にかかわっていた影響もあったか、彼女は無類の映像好き。学業を終えると迷わず広告制作業界に入り、テレビ、ラジオ、雑誌などの広告文案家となった。まだコピーライターという横文字で呼ばれる以前の話である。

それから三十数年、「アンティ（おばさん）」なる会社を設立し、今もってこの道の現役だ。

その彼女との出会いは十余年前に遡る。働く女性向けの出版企画実現のために、「ライターがほしい」と「わいふ」に連絡があったとかで田中編集長と一緒に出かけた。会った瞬間、ピピッと我が胸に稲妻が走り、以来彼女の虜になってしまった。すこぶるチャームング、この種の女性にそれまで出会ったことがなかったし、今でも希有の人なのである。

長いキャリアは豊かな人脈を育む。彼女は「情報を受け取る面白さをご一緒に」と友人や知人に呼びかけ、各界の専門家を講師とする勉強会「三土会」を始めた。その後、自宅マンションの地下に「素っ頓(石)狂(響)なことをやるう」とホルル「石響(しゃっきよう)」を作ってしまった。ここでは「お席亭さん」の愛称で呼ばれ、サンバ、クラシックのコンサートから、講談、落語の寄席、油絵、書、写真の個展など、和洋何でもござれの活躍ぶり。これまでの人脈、それに遊びと仕事で得た知恵がベースだ。



▲剣は「切り開く」といって縁起がいいそうなの。石響オープンに剣を握った



▲姉、兄の結婚祝いと共に「尺璧」



▲お母の生誕パーティ



▲ブラジル人のアーティストを応援したら、ブラジルのTV局が取材に来た



▶92歳の父、姉弟が揃った。石響で弟の書展



▲若い企画員と商品開発打ち合せ



▲模型で住宅提案、お客様募集中！



▲家事が仕事か？
いまでも迷える小羊

その延長線上にあるのが、剣伎集団による「ちゃんばら」を見せ場にした「赤穂義士」公演。この三月、ケネディ・センター（ワシントンDC）主催のイベントに招かれたのである。和太鼓の演奏、大風の飾りも加えたこの企画はアメリカ人観客を圧倒し、感動の拍手が鳴り止まなかった。

一男二女の子育てと義父上の介護時は「家庭六分に仕事四分」。「やっとそれが逆転したわ」という今でも、一日一回、義母上とのお茶の時間を意識的に生み出す。そんな彼女の日々は、これまたマルチ人間と周囲が認める夫君と共に創ってきたファミリーの結束が基盤となっている。

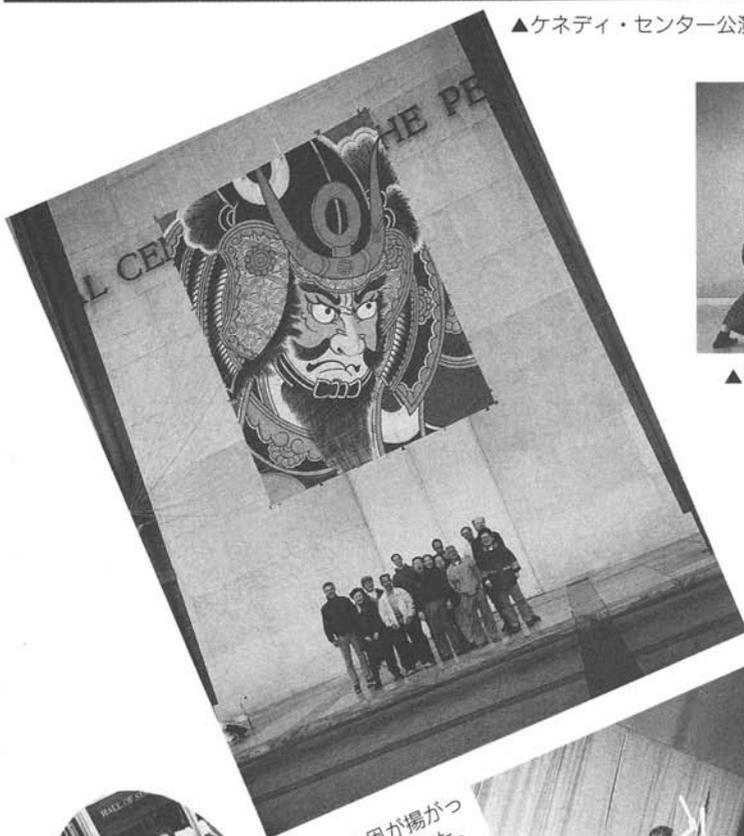
また、思いもよらない企画を次から次へと考える大胆ともいえる行動の裏には、「わいふ」の存続を願う意思表示よ」と購読料を三年分づつポンーと渡してくれる優しさもある。

最近ほ母子保健機関の「ダイアルQ？」編集にかかわり、思春期や更年期をテーマとした原稿書きに追われている。そんな彼女は私にとってまだまだ目の離せぬ人なのである。

原田静枝
（元わいふ編集委員・再就職アドバイザー）



▲ケネディ・センター公演。1年半かかった企画が実現



▲いすれ女性殺陣師？ まさか！



▲24畳の大凧が揚がった。太鼓も響いた。ただ裏方はきつかった。原田女史も大活躍。桜祭りに行ったのに、見物ゼロ。残一念ッ！

原田静枝さんと私



「石響」へのお問い合わせは

☎03-3355-5554へ

シリーズ 老後の暮らし ②

老人ホーム／お金と介護

定価 1,000円

入居一時金の性格

介護費は保険金だ！

いろんなタイプのホームを

年金受給者対象に増える一方の有料老人ホーム

思い遣いをなくすために

情報を集めて学ぶ

緩やかさのない人間はボケる

危険な段階

怖いのは行政やマスコミ

有料ホームの批判をして老人問題が解決するか

地域に密着した小さなホームを

介護の正体

特別養護老人ホームをつくるには……

有料老人ホームの選び方

ご注文は電話で

☎〇三―三三六〇―四七七―

「わいふ編集部」編



昭和三十八年から数えて、通算三十年。

私たちの生活は、大きな変化を遂げました。『わいふ』

に投稿された文章を時代を追って編集したこの作品は、

その移り変わりを描く現代の「絵巻物」といえるでしょう。

私たちの生活は何と変わったことか。そして何と変わ

らないことか。

何よりも変わったのは、仕事の場の広がり、性の解放

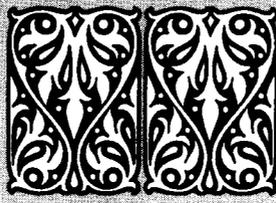
です。変わらないのは、では何か？

ぜひ、この一冊を読んでみてください。

四六判約三三五ページ・一五〇〇円（送料別 消費税込み）

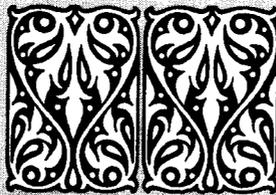
ご注文は電話で直接「グループわいふ」へどうぞ。

☎〇三―三三六〇―四七七―



特集

家事サービスを
利用してみたら



特集

家事サービスを利用してみたら

掃除サービス顛末記

静岡県三島市●森 節子（36歳）

掃除のサービスを頼んだ理由

毎年、十二月になると、ゆううつな気分になる。今年も大掃除の季節がやってきた。

網戸を洗って、窓ガラスをふいて、そして一番嫌なのは、台所だ。油でべとべとの換気扇やガス台。ふだんからまめに掃除をしていれば、こんなふう

にならないのは、重々わかっているが、小さいこともあるし、料理は好きだが掃除は大嫌いの私のこと、日ごろのつげが毎年この季節にやってくる。

そこで、去年の暮、思いきって業者に掃除をしてみようか、と思いついた。いつだったか、テレビで、「掃除のプロ」を養成するというのを見たことがある。彼らは、プロに徹して掃除のやり方を身に着ける、というような内容だった。「掃除のプロ」がどんな掃除をしてくれるのか見てみたい、という好奇心もあった。

苦手な台所だけでもやってみようか。でも、いくらぐらいかかるのか見当もつかないし、高いとばかばかしい

なあ、と思っているところに、いつもクリーニングを頼んでいるH社が「掃除のサービス」のチラシを持ってきた。ちよと掃除を頼もうか、と考えていた私は、そのチラシに心が動いた。

チラシによれば、台所だけで二万円、となっていた。範囲は、換気扇のフード、換気扇、ガスレンジまでとなっている。そして、今回のサービスとして、エアコンも含まれていた。やはり、高いなと思った。しかし、ちよちよするこどもを気にしつつ、いらいらしながら油まみれになって掃除をするこを思ったら、二万円出してもいいかなあ、という気がしてきた。

掃除も大変な労働だ。それにお金を

出してやってもらって、自分がやるよりいいのでそしてきれいになるのなら、やってもらおう。私は、「掃除のサービス」を頼むことにした。

頼むまでの不安

いつもクリーニングを頼んでいるH社の私の担当員に「掃除のサービス」を頼むむねを伝えると、「聞いてきます」と言う。彼自身このサービスを扱うのが二回目とかで、あまりよくわからないらしい。

H社はクリーニング専門で、こういった「掃除のサービス」は別の業者にやらせていて、直接かかわっているわけではないのだ。そのことに何となく不安を感じたが、日取りを決める運びとなった。

十二月は混み合うので、十一月の末にやってもらうことにした。その日は午前中に来るといっているので、十時ごろ来て、お昼までにはすむだろう、と思った。一応掃除がしやすいように、朝の



うちに、レンジの回りなどを簡単にかたづけておいた。

しかし、待てど暮せど業者はやってこない。十一時を過ぎると、さすがにイライラしてきた。十二時になれば、こどもたちにお昼ご飯を食べさせなくてはならないし、とにかく早く来てもらいたいと思い、H社の営業所に催促の電話をした。すると、しばらくして業者の方から電話があった。

最初に電話で話した人は、女性だったので道順を教えた。場所を納得すると、今度は、男性が電話にでた。その人の話によると、今やっているところに手間どったので、遅くなった。これからこちらをかたづけて、私の家に向かうというのだ。

これからって、お昼になってしまっじゃないの。台所の掃除をしているのは食事は作れない。それに、私の家の場所がわからないっていうのは、どうしたことだろう。しょっちゅう移動して仕事をしているはずの業者がこのあた

りの地理に疎いなんて、何か変だ。私は、不安が募った。

あとからわかったことだが、このとき初めに電話で話した女性は、何と私の前に掃除してもらっていた「お客さん」だったのだ。この業者は「お客さん」に電話をかけさせて、私の家の場所を確かめていた。このいい加減さにはあきれてしまった。

ずさんな仕事

とりあえず、こどもたちにはラーメンでも作って、早くお昼ご飯を済ませてしまうことにした。

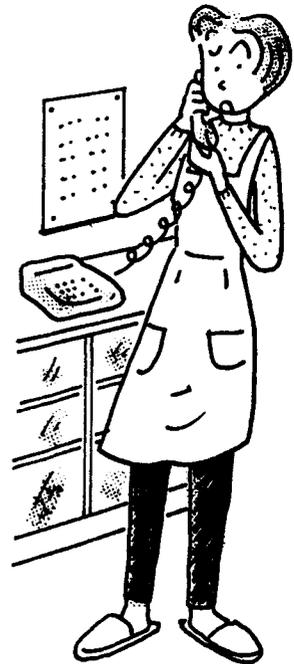
はたして、ラーメンを食べていると、業者がやってきた。出ていくと、専門家らしい男性が一人と、明らかに素人とわかるオバサンが二人いる。「この人たちに任せて、大丈夫なのか」とますます不安になる。

私たちの食事が済むまで外で待ってもらって、いよいよ掃除が始まると、私の不安は的中した。オバサンたち二

人は、全くの素人だった。最初に、換気扇の油受けをはずしたとき、下に新聞紙も何も敷かずにとったので、中にたまっていた油が床に飛び散った。私はそれを見ていて「ぎゃっ」と叫びそうになった。

リーダーの男性が主立ったところをやり、あとの二人は助手というところだが、見ていると、掃除に関して何も知らない人がリーダーの言いなりになってやっているという感じだ。

はっきり言って、その二人のオバサ



ンのやり方は、とても見ていられなかったので、私はこどもたちと一緒に二階が上がって、掃除が済むまで待つことにした。知らんぷりを決めこんで上で待っていても、やはり下は気になる。様子を見に下に降りていくと、新聞紙をくれたの用事を申しつけられる。とんでもない業者が来た、と最初は腹が立ったが、掃除が進むにつれ、あきらめの境地になり「つつがなく終わってくれればいい」と思うのみだった。

半分ほど済んだころだろうか、H社の営業所の責任者が、掃除の様子を見に来た。私は、業者が来るのが遅かったこと、専門家は一人であとの二人が全くの素人だということ、やり方が正しいでないことなど、思いつく限り



「たまには掃除しよー」

の苦情をぶちまけた。幸い、この責任者は、慣れているのか、私の言い分をよく聞いてくれて、「きれいに掃除するように言っておくから」ということで帰って行った。

やり始めて二時間ほどたつと、ようやく掃除も終わりがけてきた。頑固な油污れになっている換気扇の後ろの吹き出し口を掃除しながら、この業者は言った。

「ひどく汚れてるなあ。奥さん、たまには掃除してくださいよ」

換気扇の後ろ側なんて、今まで掃除したことなんてない。私が掃除できないからあなたたちをよんでお金を払ってやってもらっているのだ。何てことを言う人だろう。

オバサンたち二人は、レンジの横の壁にくっついて固まってしまっている油污れに奮闘中だ。私はたまりかねて言った。

「油污れには、米ぬか石けんがよく落ちますよ」

何で私が掃除に来た人に掃除のアド

バイスをしなくてはならないのだ。そう思いながらふと見ると、壁とステンレスの流し台の隙間を埋めていたゴムのようなものが溶けてべとべとになっているのに気がついた。

「ここがべとべとになってしまっている」と私が指摘すると業者は、「ああ、洗剤が強かったのかねえ。あとでやり直しますから」と言っていて聞き流している。

後悔といら立ち

それからそそくさと後片付けをして業者は帰っていった。

私はいつも換気扇を洗った後、換気扇にコーティングをしている。それは「掃除」のうちには入らないらしく、やってもらえなかった。チラシにはガス台、と書いてあったので吹きこぼれたりしたとき汚れるゴトクの下の部分も、やってもらえなかったのに、そこは範囲になかったのか、掃除してもらえなかった。そこは、私にとって換

気扇の次に掃除しにくいところだったので、ぜひともやってもらいたかったのに。

それと、べとべとになってしまった壁と流し台の隙間はどうしてくれるのか。もう一つ、後になって見つかった傷があった。流し台の下の物入れの扉の表側が、ところどころ紙やすりで削られてしまっている。きつと汚れが落ちなかったのだ。

私は、ひどいことになってしまったと思った。こんなことになるなら、頼まなければよかった、と後悔した。しかし、落ち込んでばかりもいられない。べとべとになったところと、削られて傷になっているところを何とかしてもらわなくてはならない。

すぐにH社の担当員にこのことを伝えた。彼は、べとべとになってしまったところを見て、すぐに直しますと言ってくれた。担当員の対応は親切で、何しろ今までの付き合いもあるし、きれいに直してくれるならこれ以上文句を言うこともできない。

何だかやりきれない気持ちでいっぱいだった。日が経つにつれて、このいい加減な業者に対して怒りが募ってきた。信用もあり、クリーニング業界では最大手であるH社も、なぜこんな業者に掃除のサービスをやらせているのだろうか。

私は、消費者の苦情を聞き入れてくれるところはないかと思い、少しおかしどちがいかと思つたが、沼津の弁護士会に電話を試してみた。聞いてみると、県や市などの公的機関にそういったところがあるという。そこで、電話帳を見て探したら、県の機関で「東部県行政センター」に、商品苦情センターというのがあった。私は、そこに電話を試してみることにした。

トラブルの後しまつ

私が、ことの顛末を話すと、最近そういうサービスが増えていて、トラブルも多いとのことだった。ただ、トラブルがあった場合、怒って感情的にな

り、業者にくってかかると後の処理がうまくいかないので、トラブルについては、処理できるのならやってもらわなくてはならないから、穏便に話を進めたほうがいいという。このアドバイスは、とかく感情的になりやすい私にとって、聞いておいてよかった。

具体的に、今回のべとべとになってしまったところと、削られて傷になったところについては、掃除をする前にどういう状態であったかが問題になると言われた。つまり、掃除をする前にべとべとではなく、傷もなくて、掃除をしたことによってべとべとになり、傷がついた、ということが証明できなくてはならないというのだ。掃除をしてもう前の写真を撮ったわけでもないのに、そんなことは証明できない。私は絶望的になった。とにかく「直してくれ」と言ってくれたH社の言葉を信用するよりしかたがなかった。

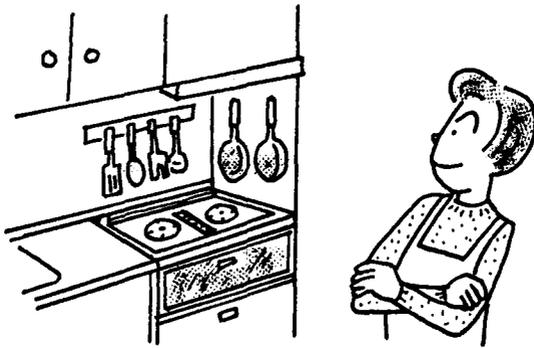
数日後、掃除の当日見に来てくれたH社の人が、例のべとべとになったところを確認しに来た。彼は、以前私の

担当をしていたこともあり、今の私の担当員の上司であった。彼が言うには、今回私の掃除をやった業者は、他でもトラブルがあつて、もうやめてもらうとのことだった。そして、ていねいに謝り、彼自らべとべとになつてしまったところをきれいに直してくれた。あまりに仕事がていねいなので聞いてみると、今まで換気扇の掃除から何から、すべてやったことがあるという。あの掃除の業者より彼のほうが「プロ」であつた。ただ、扉の傷については「直しようがない」ということで、そのままだった。傷といつてもそう目立つものではないので、私も我慢することにした。

掃除のサービスを頼んで 思ったこと

今回のことに関してH社はとても気を遣ってくれて、そのあと、クリーニング代をサービスしてくれたり、誠意を見せてくれたので、私の気持ちも収まった。

でも、あのいい加減な業者については、とても腹が立っている。お金をとって掃除するのだから、プロに徹し



てもらいたい。「掃除のサービス」で商売をしているにしろは、本当にいい

加減だ。信用できない。

近所の奥さんにこの話をしたら、D社の「掃除のサービス」はとてもよかったと言っていた。やはり、もっとよく調べてから頼むべきだったとつくづく思った。H社のように言わば「下請け」にやらせているのではなく、D社は掃除専門の会社なので、きっとそこには私がテレビで見たような「掃除のプロ」がいるのだろう。

決して安くはないお金を払ってやつてもらふのだから、信用のある業者に頼んで、納得のいくサービスを受けたい。そのためには、私たちも業者をよく調べて、かかる費用やサービスの内容を前もって調べたほうがいい。もう二度と、今回のようなひどいめに遭いたくないので、もし次回に頼むとしたら、じっくり検討して頼みたいと思つている。

でも、掃除は自分でやったほうが気が楽でいい。今年はまだひどく汚れないように、少しはまめに掃除をしている私である。

ワイルドストロベリーの思い出

奈良県生駒郡

高松恭子

陶器で有名なイギリス・ウェッジウッド社のワイルドストロベリーというシリーズの食器をご存じだろうか。

白磁にみずみずしい野苺が描かれたデザインで、落ち着いた色合いに高級感が漂っている。中学生のころ、デパートの輸入品売場で私はこの食器に初めて出会った。

「きれいなね！でもこの値段見て、ゼロが一つ多いわ」と、母が言った。ティーカップ一客が、国産のいいのを六客買ってまだおつりがくるほどの価格だった。

はるばると海を越えてイギリスからやってきた器を、いったいどんな人が買うのだろうと思いつつ眺めたものである。

それから何年の間、憧れを持って私はこの食器を

眺め続けたことであろう。あるときは一人で、またあるときは母と、私はデパートへ足を運ぶたびにこの食器の前に佇んだ。

いつかきつと買おう。買えない額ではない。しかし値段を見ると決心が怯んだ。

ところがある日、衝動的にこの食器を買う気になったのである。その日、病気で入院中の母が私にそっとお小遣いをくれた。

「何でもほしいもの買いなさい」

私の脳裏にふとあのワイルドストロベリーが浮かんだ。そうだ、あれを買おう。今日こそあれを買おう。私はその足で大阪へ出て、ティーカップとケーキ皿を二客ずつ買った。

どんな人が買うのだろうと思っていた食器をついに私が買ったのである。あときから二十数年が経っていた。

このとき私は母の命が長くはないことを知っていたのでこれを母の形見として大切にしようと思った。帰りの電車の中で、そのいとおしい食器を抱きかかえると不意に涙がこぼれた。それから間もなく、これらは本当に母の形見となってしまった。

その後、このワイルドストロベリーを生み出したジョサイア・ウェッジウッドの数奇な清貧の生涯を知った。その生き方に魅せられた私は、少しずつこ



の高級な食器を買いそろえた。使うたびに心が華や
いだ。私は、長年どれほどこの食器が欲しかったか
をしみじみと感じた。

それほど大切なワイルドストロベリーが、ある日
の夕方、外出から戻ると玄関の土間に無造作に置か
れていたのだ。

私は危うく蹴飛ばすところだった。逆上しそうに
なるのを押さえて先に帰宅していた夫に、いったい
どういふつもりなのかと叫んだ。

私は置き捨てられていた皿とカップをかかえ情け
なくて半泣きの顔で、それらがいくらだったか知っ
ているのと問いただした。

「ああ、知ってるよ。うちで一番上等の食器やろ」
夫はこともなげに言うではないか。

なんでも、家に帰ると左官屋さんが頼んだ壁の修
理をしていたらしい。それは出先に夫から電話が
あったので知っていた。私は、おやつを出してあげ
てと、夫に頼んだのだ。

留守にしている……と恐縮する夫に、左官屋さん
は、外の仕事なので勝手に入らしてもらいましたよ
と、愛想のよい笑顔を返したそうだ。夫は、

「遅くまでもくもくと仕事してはるから気の毒に
なって、お前がいつも一番上等やと言うてるあのへ
びいちこの皿とカップで出してあげたんや」と、

言った。

へびいちご？ へびいちご！ あのワイルドストロベリーをへびいちごだと！

私の顔は半泣きから、泣き笑いになってしまった。

さて、へびいちごで出されたおやつに左官屋さん
が満足してくれたかどうかは知らないが、とてもいい
仕事をしてくれたのは確かだった。

思い出深いワイルドストロベリーは今も私の心を
とらえて離さない。

ジョサイア・ウェッジウッドの真摯な魂が、とき
を越えて私の心に語りかけているのだろう。

掃除ぎらいの旅館

和歌山県日高郡

中松ミナ子

家業のすし店にとって三十余年の馴染み客である
Nさんの家も、一月の阪神大震災で半壊した。老夫
婦だけの古い建物であったが、今後の住いについて
は第三者に解らない「問題」を抱えていたようであ

る。

ようやく末娘一家との二世帯住宅に建て替えるとい
う結論がでたが、八十歳の夫人は地震以来、体調
をくずし足腰が痛むそうだ。新居完成までの約四カ
月を風光明媚な温泉地で、湯治を兼ねて気ままな暮
らしを希望。

折しも新聞で南紀白浜温泉の「きくや」なる旅館
を知ったN氏は、電話で一泊二食付き二人で一万一
千円の格安料金で長期滞在の契約を結んだという。

夫人は思う存分温泉につかって足腰を治し、好き
な編み物を楽しむのだと大いに張り切っていたので
ある。ところが、ふと見知らぬ土地で知る人も無い
という現実気付くと次第に不安感が心をしめつけ
はじめた。そんな時、心易いすし屋の先代夫婦(私
たちのこと)が大阪と和歌山を往復していることを
思い出し、ひょこひょここと店へやって来た。「和歌
山のおんたことと近所になるから頼むわなァ」と
すっかり隣組の気分らしい。

そして五月十二日、N夫妻が白浜到着の日、私た
ちはJR白浜駅でひそかに二人を待った。

ホームを心細げに歩いてきた夫妻に改札口で派手
に手を振って合図すると、一瞬目を丸くして驚き、
涙ぐみでの感激ぶりであった。

一度下見に来たというN氏の記憶を頼りとした

が、その“きくや”はうっかり見落すほど前後左右に高層ホテルが聳える狭間に、大人二人や々と並んで歩ける露地とその奥にながーい石段（五十八段あった）が続いた。

足の悪い夫人を庇って夫が手を取りゆっくり登っていくと、“ウワンッ！ ワン！”と子牛ほどもあろう茶色の犬が吠え立てる。その後から人懐こい笑顔のおかみさんが出迎えた。

N夫妻と挨拶を交わす間、私の足元でしきりに動くモノあり……、シヤムの子猫がじゃれていたのだ。どうやらこれがこの旅館の歓迎レセプションらしい。

大正時代に建てたままでと誇らしげにおかみさんが説明しながら、今日からN夫妻が四カ月間自室とする二階の客室へと案内された。

だが客の到着日にも関わらず廊下に積もった白いホコリ、座敷の畳は歩くたびにビヨビヨミシミシ。時代劇に見るいわくありげな旅籠のように煤けた床の間……、塗りがとどころ剝げたテーブルの上にポットと茶器。私は老夫妻にお茶を入れたが、二つ用意されている湯呑みの一つが欠けていて（どうなってるの？ ここ大丈夫なのかナ）と私は心配になったが長居は無用と帰途につく。

だがこの程度で驚いては、N夫妻は到底四カ

月間も耐えられないという実態があった。
三日後のことである。

大阪の嫁から慌ただしく電話があった。N家の娘



さんが急用で電話を掛けるが不通で困っているというのだ。急ぎダイヤルを回した私の耳にも、「お客様のお掛けになった電話はお客様都合でおつなぎ

できません」とテープはくり返すばかり。

やむを得ず駆けつけた平日の温泉街の日暮れどきは、化粧を落とした薄汚ない街でしかなかった。それでもぼうっと灯の入った「きくや」の看板を目にした時は妙にホッとして、例の石段をかけ上がった。

ケロリとした顔で出てきたおかみさんに電話が掛からず大阪の娘さんが困っている、と伝えると「ギャハハハ……」と小柄な体をよじらせて笑いこるげる。

ブラウスがウエストから半分はみ出し、髪はボサボサ——（一体いつ髪を梳いたのか?）。

どう見ても一応名の通った白浜の温泉地で旅館を生業としそこのおかみとは信じ難いでたちだ。

さて彼女の話によると、確かに今日電話局へ料金の支払いに出かけたが、買物をするうち肝心の用件を忘れて帰宅した、と言ひ、またしても笑いだした。

どこかの待ち合い室のような食堂では、N夫妻の食後の小鉢に向って大きなハエが旋回していた。今どき電話料金を自動振込みにもせず、食堂にハエが飛ぶ旅館が存在するなんて。思わず夫と顔を見合わせて大きいため息。

十日余り過ぎたある日、岩礁と青い海が織りなす

枯木灘の見事な景観を楽しもうとN夫妻を誘ってドライブに出かけた。

久しぶりに逢った夫人は大はしゃぎで堰を切ったように話す。「折角新鮮な魚の味付けがもうひとつやねん。ゆうべもお皿の魚みてびっくりしたわ。頭が右側にあるねんよ」とか「あの人なア家付き娘さんやてエ、お嬢さんがそのまま取らはったんやなア。洗濯場にシャツが山のように積んであるもの、あれいつ洗うのやら……」

N氏が「あのおかみは掃除洗濯が嫌いらしいよ。僕は掃除機を借りて自分たちの部屋掃除してんだよ。アハハ……」

「私も、もうちょっと腰が治ったらトイレをブリーチで磨こうと思ってるのヨ」

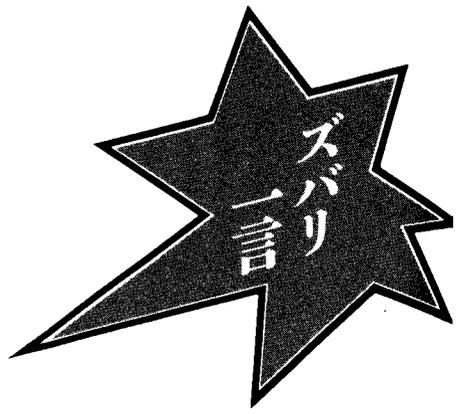
これにはとうとう夫と私は腹を抱えて笑ってしまつた。

温泉でゆっくりしたいと願った夫人が旅館のトイレ掃除だなんて。

「まあ当分は我われだけの貸し切りだからネ気楽でいいよ」

と別段気にする風でないおおらかなN氏。

ともあれN夫妻の滞在はまだ始まつたばかりである。



五十年目の悪夢

東京都渋谷区●金子子あき

「わいふ」二五四号の田中編集長の記「オウム真理教は国家のミニ版」を読み、「国家という組織それ自身がオウム教に似ている」という指摘は、まさにその通りであると思った。「国のため」という大義名分で、五十

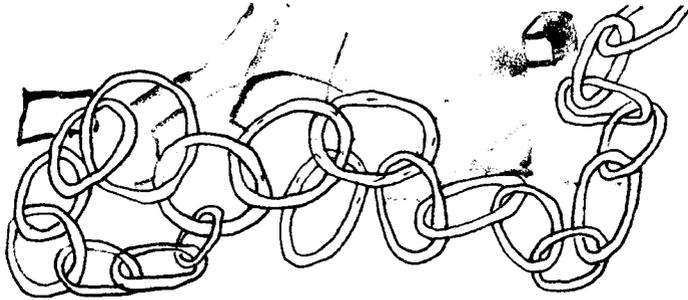
年前、私は化学工場に動員され毒ガスを作っていたのだ。

南に北に戦火が拡大された昭和十九年三月、全国の女子学生に発令された学徒動員令。

私たちはそこで何をしたか：飛行機や弾丸を作る工場と違い、そこは化学兵器を製造する日本海軍の一大毒ガス工場であった。

神奈川県高座郡二の宮町にあり名称は、「相模海軍工廠」といった。当時の金子吉忠工廠長が未だ存命であるならば私はぜひ、聞いてみたいと思う。

「化学兵器の研究及び生産の経過」という新聞記事の切抜きを私は持っているが、それによると、海軍における化学兵器研究は欧州大戦のころより始まったそうだ。大正十一年、ドイツ人メツナーを招き陸軍と合同、技術を研究した。大正十二年、海軍技術研究所、化学研究部、



化学兵器研究室が築地に開設されたという。その室長が、金子造兵大尉とある。この金子造兵大尉と、金子吉忠工廠長と同一人物なのだろうか？ もしそうであるならば金子吉忠工廠長こそが、日本海軍の毒ガス研究の第一人者であるはずである。ぜひ確かめてみたいものだ。

その発祥地は東京の築地であったのだ。まさに「お国のため」という大義名分によりなされた化学兵器の製造であった。上海事変のころに神奈川県平塚に化学技術研究所が出来た。

一号特薬クロルASETフェーン
(催涙ガス)

二号特薬チフェニル青化砒素
(くしゃみガス)

三号特薬(甲)イペリット
(糜烂性ガス)

三号特薬(乙)ルイサイト
(三号特薬)

四号特薬青酸

(致死剤)

以上の特薬ガスは大東亞戦に入り、ますます重要視され、相模海軍工廠で製造され始めた。戦争が続行されていたならば私達はセッセと毒ガスを作りつけ、実験室では「悪魔の飽食」に狂走したかも知れない。そう考えるとあの昭和二十年八月十五日の陛下のお声は天声であった。

相模海軍工廠は第一化工と第二化工にわかれていた。私の配属された第二化工化学実験室は防御兵器製造で、防毒面や防毒衣の耐久時間の実験が主であった。毒ガス(主にイペリット)は常時ボンベから、シングルベッド大のガラスのケースの中を流通し、防毒面の活性炭を通して耐久時間の測定が私の仕事であった。初めのうちはフラスコやビーカー、ピペットの洗浄であったが馴れてくると、三方

コックを回し器具の加止動をした。運動神経の鈍い私は三方コックをよくふかして、塩素ガ

皮膚についた時は、急いで漂白剤で中和させないと水疱が出来皮膚が糜爛してしまう。二十四時



スや、濃硫酸を逆流させ大騒ぎをした。その時の強烈な臭煙は忘れられない。イペリットが皮

間以内に処置することである。当時、朝鮮から動員された少年工が私達と同じころ入廠し

た。新品の作業衣で隊列を組み工廠へ行進してきた。私達も「お早よう」など挨拶していた。昭和二十年五月ごろになると彼等の人員が減り、顔も赤黒く、塩素ヤケし作業衣は漂白されロボロに変色していた。咳もひどく目は充血し、黒目鏡をかける人もいた。日本人の工員も同じ症状であった。おそらく第一化工のイペリットの製造に当たっていたと思われた。日本の工員はそのまま戦場に行った人も何人か私は知っている。

終戦当時、陸軍の化学兵器使用の実例は、相模陸軍兵器廠の文書に記録されていたそうだ。文書を押収した米軍は、戦犯に問わないという交換条件を提示してそのデータを手に入れたという。森村誠一氏の「悪魔の飽食」に書かれ一時問題になった。また、児童文学者の武田英子氏に「地図から消された島」とい

う著書がある。「舟でも作るのか」と思いのんびり出かけた青年工、業務内容も知らされず、作業場に「鳥カゴ」を置き、小鳥が動かなくなったら窓を開け換気するという工場、そこが瀬戸内海に浮かぶ大久野島であった。武田氏の取材に対し、「イペリット」「ルイサイト」「青酸ガス」などの運搬で即死した同僚の死を鮮明に覚えている元工員が、「今でも島で働いたことを後悔しない」という。後遺症に苦しむ人を尋ねると「何でむしかえす」と門前払いを喰わせる。なぜなのか？

「私達は今大久野島に毒ガス資料館を作る計画をしているが、地元はここを観光地にする計画なので毒ガスの記念碑が立つイメージが悪くなる、と反対運動さえある……」

と武田英子氏は言う。
私は今までこの毒ガス工場の

体験を人に語りたくなかった。戦後四十年の折（今から十年前）に、戦時中のしこりの重さを意識しながら緘黙を破り当時の証言を始めた。武田英子氏の取材を受けた時のことである。その当時、ある新聞紙上に「防衛庁陸上自衛隊の中期防衛力整備計画」なる記事があった。化学防護隊設置、毒ガス最近化学兵器に対処すべく北海道旭川と千歳に化学防護隊を配備する。ソ連が製造貯蔵する神経ガス、糜爛ガス、ホスゲンに対処するためとある。

その後自分史を書いた中で、「これからの戦争は国と国との戦争布告などなくなり、どこからかミサイルが飛んで来る。その中には神経ガス（サリン、ソマン）、ホスゲン、などであったら人類滅亡……」などと杞憂論を記した私であった。

それから十年たった。今年は戦後五十年である。語りたくなくとも語らねばならない昨今の現状である。

「オウム」のテロがこんなに身近に繰り返されるとは思ってもないことだ。サリン事件で防毒衣、防毒面をつけた姿を見た時の驚き、しかもその隊列がつづく富士の裾野、ああ……かわいそうなカナリヤさえ連れてきている……。

私はまだ五十年前の悪夢からのがれられない。

国というもの

東京都武蔵村山市 ● 大沢陽子

NHKテレビドキュメンタリー「シベリア抑留の画家・香

月泰男」を見た。極寒の地、食べる物はほんの少しのコーリヤン粥、そして重労働。その中で人はどんどん死んでいった。兵士たちをシベリアに抑留しておいていいといったのは日本軍だぞうだ。なんということを。みんなどんなに帰りたいか。

私の叔父は硫黄島で死んだ。あとで聞けば餓死だったそう。うむをいわせず戦場に狩りだされ、食料の補給も無く、兵士たちは死んでいった。叔父には四歳をかしらに三人の子がいた。小さい子どもたちのことがどんなに気がかりだったことか。

戦時中のいろんなことを見ると、国家というものを怖いと思う。だから選挙のときはいつもいつも権力を握っていないものの側を私は応援する。反対する力がしっかり育っていないと国の暴走を止められない。

シベリアに抑留され死んで

いった人たちの望郷の思いをひしひしと感じながら、ひどい指導者に支配されている集団の人たちの不幸を思った。

オウムの人たちはかわいそうだ。麻原という人に出会ったばかりにみんな不幸になってしまった。麻原容疑者が捕まったとき、「信者のみなさん、国民のみなさんに迷惑をかけたことをお詫びします。私の言ったことはインチキです。自分の野望のためにみんなを利用しました。私が計画し命じたのです。悪いのは私です。ほかの者は私の命令によって動いただけです」というようなことを言ってほしいと思った。

悪者とわかればマインドコントロールも解け易いだろうし、今まで自分の手足になって働いてきた人たちへのせめてもの償いにもなると思った。そうしてほしい。そうするのが人として



当然のことだ、と。

でも、そうではなかった。自分には知らなかったという。お金を持って隠れていて、ひまじりだされたという。やっぱり詐欺師なのだ。人のことなんかどうなってもかまわない詐欺師だったのだ。こんな人に操られた人たちが気の毒だ。出会わなければ、別の人生があったのに。

集団にも国にも、反対する力がちゃんと育っていないか、育っていないのだ。ユダヤ人を根絶やしにしようとしたヒトラーや反対派を消そうと五百万人もの人を粛正したスターリンのような、狂気の人に政權が握られてしまっても、反対する力が育っていれば歯止めがかけられる。

今までの国のやり方、兵を集め、戦線に送って、食料を送らなかつたり、慰安婦を集めたり、謝罪しなかつたりというもろもろのを見てきて、用心

しなければと思う。

田中編集長が「実は深いところで『国家という組織それ自体がオウム教に似ている』というのが真実に近いのでは」とおっしゃっていた。戦争を始め、戦争をおしすすめることのできる国というものをほんとうに怖いと思う。軍隊や警察を持っている国が、みんなの幸せのために機能し続けるようにするために、ひとりひとりがよほどしっかりしなくてはいけないと思う。

虐待の連鎖現象

横浜市磯子区●十文字圭子(32歳)

最近の私の読書のテーマは、「幼児虐待」。以前、「わいふ」で紹介された伊藤比呂美氏の

「コドモよりの親が大事」の中で、「本格的な子いじめ」について興味を持った。

食べてしまいたくなるような可愛さ、胸が痛くなるような切なさ、そして全身が凍りつくような恐怖。自分の中に常に同居する、そんな感情に振り回されるのは、確かに子どもを産んでみての、初体験だった。だから、人ごとではなく思える。

目を背けたくなるものの、つい気になって仕方がない。怖いもの見たさ以外の何物でもないのだけれど、どうしようもない。

時には死に至るような、または後々精神的にも重大な傷を残してしまふような、「虐待」。

虐待された子どもたちは、その後どうなっていくのか。なぜ、親たちはそうせずにはいられないのか。「虐待の連鎖現象」はどうすれば断ち切ることが出来るのか。

そんなことを思いながら、次々にいくつかの本を手にとってみた。その中で、印象に残ったものを紹介してみたい。

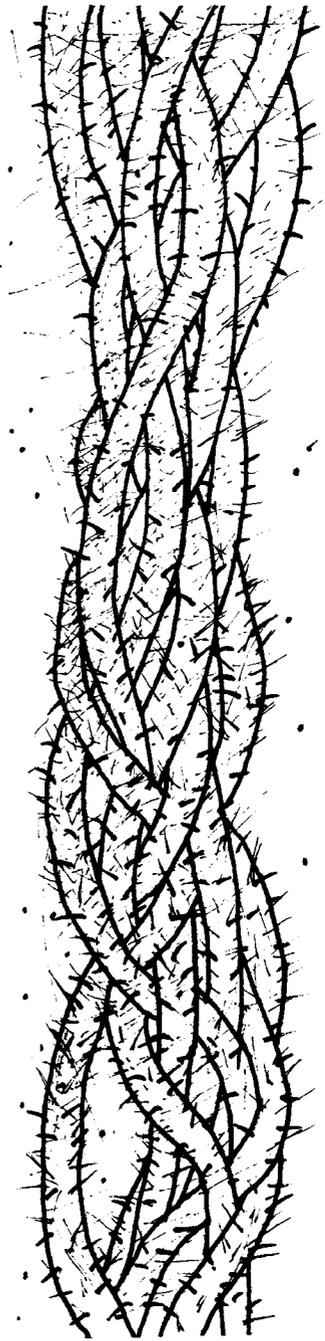
ジッタ・セレニイ著

「マリー・ベル事件」評論社

まだ大人になりきれない、十代の母親から私生児として生まれるながらも、愛情豊かな祖母がおり、親戚にも恵まれていたマリー。が、やはり精神の不安定な母親に、何度も殺されそうになるという経験は、彼女に決定的な傷を残していたに違いない。それが、わずか十一歳にして幼児子どもたち(幼児男の子二人)を殺す、という行為に結びついていったのではと思わせる。

彼女の不幸は、現在もまだなお獄に繋がれている、ということである。

二十年以上も前に、イギリスで実際に起こった事件であるが、彼の国では「存じの通り、



日本の少年法のように寛大な措置はない。数年前にやはり二人のローティーンの少年が幼児を殺した事件でも、嚴罰が科されたことは、記憶に新しい。

この著書を読むと、改めて少

年法についても考えさせられてしまう。無条件で信頼出来る、最後の砦であるはずの母親から殺されそうになるといふ恐怖は、計り知れないものがあり、そのような背景を何も考慮に入

れずに、只、殺人という罪だけを裁いたことは、やはり片手落ちと言わざるを得ないのでないか。

マリールと共謀し、共に行動したもう一人の少女は釈放になる。

マリールは成人するまで少年院に入れられるが、いつか家に帰されることを信じつつ、やがて刑務所に移され、そして現在は精神を病んでいるらしい。

殺された幼子達はもちろん、

その両親も哀れである。けれど、十一歳の少女の人生は、いったい、誰のせいでも、何の権利を持ってして、摘み取られてしまったのか。

リチャード・ダンプロジオ著
「ローラ、叫んでごらん」サイマル出版

アル中の両親によって一歳半の時に大型フライパンで焼かれ、重症を負わせられるローラ。想像しただけで、震えが来てしまうほどのおぞましさ。懸命の治療により、一命は取り留めるものの、その後三年間に渡り、ベッドの上で過ごす。斜視、背骨の湾曲、顔の火傷、痛みを伴う脚の静脈瘤、という後遺症が残ったが、彼女にとって幸運だったのは、両親の元には引き取られなかったことである。

カトリックの修道女たちは、他の恵まれない子どもたちと同じように彼女を世話し、たとえ

反応がなくとも、十年間、語りかけ続けた。そして、著者である医師との出会い。

知能が遅れていると思われた少女は、やがて心を開き、進んで手術を受け、最後には自分で進むべき道を見つめる。もちろん、そこに至るまでの道のりは、決して平坦ではない。が、

だからこそ、最後に白い看護婦の制服に身をつつんだローラの姿がより一層、印象に残った。

この二つの作品は、両方とも同じころ、実際に起こった事件をもとに書かれている。同じように、親から疎まれた少女。ひとりは目に見えない心の傷を持って幼い子どもを殺し、人生を棒に振った。そしてひとり口では言えないほどの体の傷を負わせられたが、未来を信じて生きていこうとしている。

のだろうか。
肉体的にも精神的にも、虐待は許されていいはずがない。しかしながら、虐待は実際に起こり、それによって心の傷は必ず残る。この「心」の問題が一番厄介であるのは、間違いないと思う。

そこで「わいふ」にも登場した「性的虐待」は避けて通れない問題だと思った。これについては、また次の機会に書かせて頂きたいと思っている。

専業主婦だって、怒ることもある

東京都板橋区●藤木由紗

近々極めて個人的な謝罪の意味を含めて、韓国への一人旅の準備に追われている最中。

折しも国会では、「戦後決議声明文」に、謝罪と不戦をもちこむか否かで、おおもめ。六月四日には、保守側の某氏の発言には、同じ日本人でありながら、正直驚いてしまった。

翌月曜日の韓国の新聞は、いずれもトップ掲載で抗議表明していると言う。私に韓国の血が交じっているわけでも、また政治的なバックもない。ただ、親の時代が戦争の世代。その子供として、良識的に見ても、史実を歪曲することは、許される行為ではないと思っている。

そんな六月の五日。某テレビ局が夕方のニュースで、前土曜日、日曜日にかけて千人を対象にした独自の電話アンケートの結果報告のニュースを、放映したのだ。

時期も時期だけに、極めてタイムリーで好企画と、注目して見ていた。

アンケート項目

1 国会決議文に「謝罪」

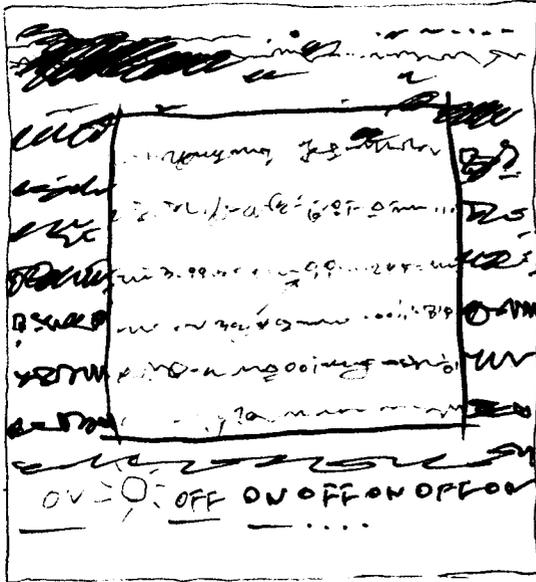
不戦を明記すること
に

賛成

反対

解からない

2 先の大戦を侵略と考えるか。解放戦と考える



のか。

一応その数値をメモしていたが、非常に興味深い数値が出てきた。この時点での日本人の大戦に対するおおまかな意識を知る上で、貴重な数値のような気がする。

夕飯の準備中の折でもあり、メモとして残した数値に間違い

があるかも知れない。

加えてアンケートの場合、問いのニュアンスで、イエス、ノーが、微妙に変わることがしばしばあるので、アンケートの表記も尋ねることが可能なのか、番組制作部に問い合わせを試みた。

合計三回、手順を踏まえ、こちらの趣旨を明確にし、誤解を招かないように丁寧に説明したつもりだが、

「どこの所属の方ですか」

——現在は、専業主婦です。

「なんのために必要なのですか」

——ただ興味ぶかい数値の確認です。

「然るべき御方が、それなりの手順を踏まえていただかない限り、担当者へ電話を回すことは、私の判断ではつきかねます」

——然るべき方と言うのは、専業主婦は該当しないのでしょうか。

「ですから何度も申し上げていきますように……」

二度二日にわたって、同人物と思われるその若い女性と、馬鹿げた会話を繰り返している。

以前は彼女のいわんとする

「然るべき仕事」と称される類

の仕事に就いていた時期もある。

一般の方の問い合わせと、「然るべき方」からのものでは、

画然の差があるのを、身にしみ

て知っているのだ。

しかし現在は、無職の専業主婦。好んでいただいた肩書きで

もないつもりだが、この肩書き

では、何をするにも限界がある

と言うことなのだろうか。

私が興味を持った数値を、ここで残念ながら表記することはできない。その番組制作者に承諾をえようにも、一介の専業主婦には、その資格（承服しかねるが）、なによりその手立ても

ないからこの上。



ピンポイントニュース



アレルギー対策は フローリングで

奈良県生駒郡 ● 高松恭子

季節の変わり目にいつも悩まされてきた喘息が、昨年の一二月を境にピタリと治まっている。ふと思いだたるのは、長年敷きっぱなしだった絨毯をはがしてフローリングにしたことだ。フローリングの欠点は埃が非

常に目立つことだが、実はこれが幸いしている。濃い色にしたわが家ではとにかくよく目立ち、一日たりとも掃除を手抜きできなくなったのだ。

医者によるとやはりハウスダストはアレルギーの大きな原因の一つだそうだ。治療の一環だと思っただけで掃除はこまめにして下さいと、言われた。

ちなみにわが家では、毛布、玄関マットやバスマットのような毛羽立ったものも一切使っていない。掃除しやすくするため余計な物も置かないことにしている。家の中もすっきりして一石二鳥である。

しょうがを楽に おろすコツ

千葉県市川市 ● 荒木裕子

「わーいすこい大発見」と騒いでいるのは私だけかなあ。そんなことづくに知ってるわよと言われそうだけれど、ちょっと聞いて下さいな。

NHKの「今日の料理」で教わったのです、しょうがのおろし方。しょうがとかにんにくをおろすのってとても面倒だと思いませんか？ ほんのわずかの量

必要だから、おろし金をよこらしよと出してきておろすんだけど、おろし金にこびりついたしょうがをこそげとるのが一苦労だったり、使ったおろし金の掃除がまた面倒くさかったり。ところがアルミホイールをおろし金に敷いておろせばすべて解決。しょうがは無駄なくこそげとれるし掃除もらくらく。こんな簡単なこと、どうして今まで気づかなかったのかととうん年間の主婦生活を悔やんでしまいましたよ。知らなかったという方はぜひお試しあれ。

自分史、回想録、旅行記、童話、詩集、歌集、同人雑誌、絵本、コミックまで、何でも作れます。費用はモノによりいろいろ違ってきますが、市価よりは確実に安いです。ご希望があれば書店に出して市販する方法もとれます。ご事情を伺いご相談に応じますので、ぜひお問い合わせください。人生の記念にご計画になっ

自費出版は

“わいふ”へどうぞ！

“わいふ”編集部では自費出版の製作をしています。本をお出しになりたい方はぜひご利用ください。

自分史、回想録、旅行記、童話、詩集、歌集、同人雑誌、絵本、コミックまで、何でも作れます。

費用はモノによりいろいろ違ってきますが、市価よりは確実に安いです。

ご希望があれば書店に出して市販する方法もとれます。ご事情を伺いご相談に応じますので、ぜひお問い合わせください。

人生の記念にご計画になっ

シベリアの青春 3

大阪市住吉区

福井 秀雄

さて、いよいよ収容所暮らしが始まった。ここでの軽い労働というのは、駅で貨車の積み降ろしをするのが主な作業であり、他に農場や工場などの雑役があるらしい。

一日として遊ばせてはくれない。十数名、あるいは数十名のグループで作業に出ることになった。

私は作業に出るたびに、一体、ここはシベリアのどの辺りなのかと、気になっていった。現場で会うソ連人に身振り手振りで町の名を尋ねてみた。それは、私の耳に「クイブシェフカ」と聞

こえた。その記憶をもとに後に地図を調べてみたが、その名は見当らなかつた。

だが、国境の町ブラゴベシチェンスクを北へ行ったシベリア鉄道沿線に「クイブシェラカ」という町があった。私の想像する位置から考えるとここだったに違いないと思うのだが……。

この町で働きだして早々から、私たちには考えられない意外なことに直面して驚くことが多かった。例えば次のようなことがある。私たちが作業に出る際には数名のカンボイが同行するこ

とになっていた。この場合、衛門の出入りには彼等による人員のチェックが行なわれる。

これは捕虜収容所であるから当然だとしても、私たちが意外に思ったのはこれらのカンボイのなかに計算に弱い者が大勢居ることである。少人数では問題ないが、数十名ともなると延々と手間取る。四列に並んだ列は特に数えにくい。たまりかねたわがほうの指揮官が、「五列に並べ」と号令する。

これだと数えやすいはず、だが掛け算がまったくできない。行きはまだい

い、しかし帰りは私たちは空腹でいら
ついている。

「早くしろ！」

と、つい罵声がとぶ、益々あせるカン
ポイが衝門の柱で筆算を始める、とい
う具合だった。

この広いシベリアでは、教育が行き
届かぬのも無理からぬことか、とも
思った。そして、少年の面影を残すカ
ンポイの紅潮した顔を見てみると、私
は怒る気にはなれなかった。これは、
せまい日本と異なり、広大な領土を有
するソ連の教育体制に問題があるのだ
と思ったからである。

このほか、ラーゲリ内の生活でも私
たちがとまどうことが幾つもあった。
そのうちの一つが便所だった。その内
部は仕切り壁がまったくなくて床に丸
い穴がずらり並んで開けてあるだけな
のだ。小ならばともかく、こんな所で
しゃがみ込むなど、私たち日本人の習
慣からして到底できなかった。

シベリアの草原で野宿した時は、草
むらで用を足したものの草で身を隠せ



ただけましというものだった。とてもがまんならず、ソ連側に苦情を申し込んだため、間もなく日本人大工の手によって板張りの日本式便所が作られた。そして、私たちの唯一の楽しみである食生活も、まったく変わったものになった。

食糧はすべて収容所側から支給される。これを別棟にある炊事場で、われわれの中から選ばれた十数名の炊事係が調理することになった。当然ソ連側の指導によるものだから、その食事はソ連風のものに変わってしまったのである。

一日のうち二食はカーシヤ(ロシア風粥)と称するものだった。それは高粱や麦などの雑穀を使ったもので、肉や野菜が少量入っていると聞いたが薄い粥の中にそれらしきものは見当らなかった。他に副食物はまったくない。そしてもう一食は、いよいよこの国の主食黒パンの登場であった。穀物の皮が混った酸っぱいパンはせいぜい厚切りトースト半分くらい。これにキヤ

ベツの切端が浮かぶ塩味のスープという貧しいものだったのである。

このように、私たちの口になじまない、しかも量、質ともにまったく足りない食事のため、唯一の食べる楽しみさえも奪われて、体力もさることながら気力までもが次第に弱っていくのであった。

捕虜といえ、貧しい食事に重労働は先刻周知のことなのだが、「軽い労働をしろらう」というソ連側の言葉を真に受けて、この程度の労働ならば、と、私たちが思っていたのがそもそも甘いというものだった。

ラーゲリ生活が本格化するにつれて、軽い労働は次第に重労働そのものへと変わっていった。私たちの主なる作業である駅の仕事は、昼夜を問わず入ってくる貨車の積み降ろしだった。

シベリア鉄道沿線にあるこの駅には厳寒期を前にして、数十両からなる石炭や薪を積んだ貨車が頻繁に入ってくる。それも早朝からならまだしも、夜

中といえども作業集合の鐘が鳴る。有無を言わず駅に連行されて、作業は朝方まで続く。ようやく終わり疲れ果てて帰るが、この日は休日とはならない。午後には何らかの作業に駆り出されるのである。

このような苛酷な労働が続くようになり、早くも老兵たちのうちでは体調を崩して落伍する者が出始めていた。

このように、ラーゲリ生活はまだ始まったばかりだというのに、まったく先が思いやられるほどの厳しいものであった。だが、私の場合、これに似通った生活を満州ですでに体験していたからまだしもであった。

そんな中で、私たちがもっとも恐れていたシベリアの厳寒期が目前に迫っていたのである。

そしてその冬を、ここで過ごすのだと思い込んでいた私たちに、突然移動命令が出た。しかも、それはわが第一中隊のみであった。

これは捕虜になって感じたことだが、ソ連という国は何事においても事前に



大平原の中の民家（平成6年6月筆者撮影）

知らされることは極めて少い。突然の命令で、しかも夜間の移動が多い。それは無計画なのかそれとも秘密保持のためなのか？ 私たちはソ連は「秘密の国」だと教えられていたのだが、やはりそんな国なのだという思いを深めた。

すでに酷寒期が目前というこの時期、一体どこへ連行されるのだろうか。

幕舎の冬將軍

行軍の末に私たちが到着したのは、草原の中、小さな町のはずれであった。その町の様子については、はっきり憶えていないが、雑多な建物が殺風景に建ち並んでいたようである。ここまでの歩いた距離から見ても、先のラーゲリからさして遠くはないようだが、その位置はどの辺りになるのかさっぱり見当もつかなかった。

私たちが佇む場所のすぐ近くに宿舎が用意されていた。実はここに到着したときから草原の中に大きなテント数張りか柵に囲まれて建っているのが見

えてはいた。しかしこの寒い時期にそれが宿舎だなど思ってもみなかったのである。

まさか、の思いでそこに入ったが、テントそのものは屋根がわりであって、住いはその下を二メートル余り、土を掘り下げて作られていた。しかし、壁も床も土が露出したままである。両側には木の寝台が二段に作られ、通路にはドラム缶に穴を開けたストーブが二基横たわっていた。

地下へ掘り下げたということは、一応防寒を配慮したつもりなのだろう。私たちはこのちゃん幕舎をつくづく眺めていた。ソ連人さえ「マローズ」と言っただけ、酷寒期のピークには、零下四十度前後に下がる日が珍しくないという冬がもうすぐやってくる。果たしてこんな所で過ごせるのだろうか。私の心は不安で一杯になった。

ともかくこのような幕舎は三棟あり、二百数十名の者がここで生活しながら、二メートルばかり離れた工場に通うことになったのである。

さて、私たちの仕事は工場拡張のための基礎工事が主であった。コンクリートを流し込むための穴掘りや、煉瓦積みなど、そのほとんどは屋外の作業だった。

その日によっては、二、三人のグループでソ連人労働者の仕事を手伝われることがあった。その仕事が煉瓦積みの場合、それを積むソ連人職人の手元へ、私たちは煉瓦やモルタル（セメントの練ったもの）などの材料運搬をやらされるのである。

シベリアでは煉瓦積みの建物も多いせいか、建築現場ではこの手の技術者がはばをきかせていた。したがって、われわれにも偉そうな口をきく。仕事中は言葉の通じないこともあってか、「ヴストレダワイ（早くしろ）」を連発してやたら怒鳴り散らすのだ。

気温が低いせいで、煉瓦の上に乗せたモルタルは瞬時に凍りつくため、彼等のあせる気持はわかる。しかし私たちが材料を運ぶ一輪車（ネコ車）は、その操作がなかなか大変だったのだ。

空き腹で腰が定まらず、ときにはよろめきながら転倒して、モルタルを一面にぶちまけてしまふ。

途端にソ連人から罵声がとび口汚なく罵られる。こんなことが度重なる私たちも負けてはいなかった。どうせ日本語はわかりっこない、とばかり思い切り言い返してやった。

「このくそロスケめ！ ろくなものも喰わせずにこんな仕事ができるか」これを聞いて通訳があわてて駆け寄って来た。

「日本語のわかるソ連人が居たらまずいから」

と、たしなめられた。そして、

「ロスケなどと言っちゃ駄目だ」とも言った。

「奴等だって俺たちをヤポンスケと言うじゃないか、どこが悪い」と私たち。

「いや、あれはヤポンスケじゃなくて、ヤポンスキーだ」

と通訳には冗談も通じない。

「それくらいわかっている。お前も日

本人だろ、ちょっとは奴等にも何とか言ったらどうなんだ」

とあげくは通訳に喰ってかかる。

だが、そうこうするうちに、私たちも都合のよい言葉を覚えた。それは、

「ヤー、パロスキーニポニマイ（私はロシア語がわかりません）」

というロシア語である。彼等の言うことは、身振りでおおよそ理解できるのだが、都合の悪い時はこれを使って知らぬ顔を決め込むのだ。

しかし今度はこんな私たちに對し、彼等は真赤になって罵ったり、今にも握み掛からんばかりの形相になったりする。けれども滅多に撲ったりはしない。彼等同士でもしないと聞いた。ピントは日本人独特のものだったのだらうか？

このように、われこそ技術者だと偉そうに振るまっていたソ連人であったのだが、それはそう長くは続かなかつた。なぜなら、そのころはまだ片鱗も見せていなかったものの、本当はわれわれの中にもあらゆる分野での技術者

が大勢居たからだ。

やがてソ連人たちは、これら日本人の高度な技術とその器用さを認めて、脱帽する時がくるのである。

ソ連人と共に働くようになって、今一つ不思議に思ったのは、私たちのことを捕虜とは言わず大抵の場合「ソルダート（兵隊）」と呼んだことだ。ただしこれについては別段深い意味が無いことは後にわかった。彼等にとつては軍隊組織のままのほうが統率上好都合だっただけなのである。

日を追うごとに、耐え難いほどの飢えと寒さに苛まれる地獄のラーゲリ生活が、いよいよ本格化してきたのである。

そして肝心の食べ物についても、暖い時期ならまだしも、凍てついて雪に覆われた草原には食べられる野草もない。作業の帰りに、たまたま凍ったじゃがいもと思ひ拾ったら、それは馬糞だったという笑うに笑えない話もあった。罪なことにまったくよく似ていたのである。

こうして食べ物を採す日本人を、ソ連人の中には、

「ヤポンスキー、サバーキ（日本人は犬だ）」

と笑う奴も居た。

そんな中、私たちの作業現場へソ連人女性が時折姿を現わすようになった。夕闇の迫るころ、シューバ（防寒外套）に身を包み、ネッカチーフで顔を覆ったソ連のおばさんが近寄ってくる。

小さな声で、

「ムイラ、イエス（石鹼ある）」

と耳元でささやく、何事かと振り向く私たちに、

「フレーバ、フレーバ（パン、パン）」とパンがほしくないので、と言わんばかりに、シューバの内側から黒パンをちらつかせる。見ると、石鹼一個と交換するにはあまりにも小さいパンだ。「もっと大きなパンでなくちゃ駄目だ」と身振りで言っている。

だが、彼女たちはわれわれが空腹であることをよく知っているから強気なのだ。

「二エット(ない)」

これしかないとばかりに首を横に振る。

一旦無視はしてみたものの、鼻先にちらつくパンの誘惑に負けて、ついに雑袋から石鹼を出す羽目になってしまふのである。

こうして手に入れた小さなパンは、宿舎に帰り着くまでたまらない楽しみを与えてくれた。夜、寝静まるのを待って、毛布の中で音を立てないようこっそり食べた。

一本の煙草も分けて吸い、という战友士の美談を戦中に聞いたことがあるが、そのころには友に分け与えるなど、他人を思いやる心の余裕はすっかり失せてしまっていたのである。

アムール川を渡って僅か二カ月余りというのに、苛酷なラーゲリ生活は私たちの心をすっかり変えてしまった。

食べることにのみ執着するというまったくおぞましい人間になってしまっていたのである。

こんな状態であったから、当然身辺

のことなど構う余裕もなく、その生活は不潔極まりないものであった。ここに至ってソ連当局も漸く気づいたのか、シベリア入り以来初めての入浴が行なわれた。

私たちは熱い風呂にどっぷり浸りたい、という願望を持っていた。だが、それは期待はずれもいとこだった。

共同浴場とおぼしきそこには、シャ



ワーはついていたものの使わせてはくれず、一人当り洗面器二、三杯のお湯が与えられただけであった。入浴というより体を拭くだけというものだったのである。

入浴と同時に、高温の消毒室に衣類をつるしてシラミ退治も行なわれたが、それはまったくの一時しのぎにすぎず、シラミは簡単に絶えるものではなかつ

た。ソ連人は南京虫よりもシラミを極度に嫌った。他のラーゲリはシラミ予防の処置として、体毛を剃刀でそり落とされたらしい。私たちの場合はそこまではされなかったが。

この入浴を機にソ連軍軍医が頻繁にやって来て、

「清潔にしなさい」

と、一回入浴させたぐらいで、恩きせがましく言うようになった。

清潔にしると、ことさら言われなくても、日本人はもともと清潔好きな民族なのだ。だが、このラーゲリ生活では、洗濯する水さえ満足にないし、石鹸はすでにパンになってしまった。その上気力もない。どだい清潔など無理な要求なのだ。

そんな私たちを、ソ連人は不潔だ、不潔だ、と軽蔑の眼差しで見えていたが、私たちから見ると彼等とて決して清潔だとは思えなかった。

将校や兵士はもとより女性までも、所構わず手鼻をかむ。現場監督というかなり偉そうな男が、ヒマワリの種を

口の中でポリポリ噛みながら、「ペツ、ペツ」とあたり構わずその皮を吐き散らす様は、とても清潔には見えなかった。

また、ソ連では便所で紙を使わないと聞いた。紙がなかったのか、それとも出る物の質が違うのか？ 私たちから考えると、汚い、としか思えない。とにかくシベリアで見た限り、こんなことを取上げたらきりが無いほどである。

とは言っても、正直言って私たちも、禪の中を格好の住みかにして、体じゅうをもぞもぞと這い回るシラミにはほとほと参っていたのである。

異国の丘

厳しい寒さと、飢えに耐えながらの暮舎生活は、衰弱した体には殊更に辛い。そしてそんな中で病院へ送られる者が続出するようになっていた。

もっとも健康な者といえども、やせ衰えて鬚茫茫、まるで半病人の如き有様となっていた。汚い衣服をまとい足

を引き摺りながら作業に行き来する姿からは、日本人の誇りなどすっかり消え失せ、それはあたかも乞食の行列を見るようであった。

ソ連側の病気に對する感覚は、日本人とは格段に違っていた。発熱三十八度以上でなければ病氣と認めないし、腹痛など安易に認めてはくれなかった。とりわけ神経痛や痔で悩む老兵たちは氣の毒であった。また病院といっても、果して設備の整ったものがあつたのだろうか。見たわけではないから明言はできないが、おそらく診療所程度のものしかなかったのではなからうか。

ある朝、火の氣のなくなったストーブの側で、座ったまま息絶えている者が居た。それは極度の栄養失調からであった。平時の一般社会では、人の死は重大視され周辺にかなりの混乱をきたすものである。しかるに、ここでは一人としてあわてふためく者もなく、ただじっと見詰めるだけであった。その様は、まるで感情なき動物の集団のように見えた。





その夜、粗末な棺に納められた遺体は、すでに空家となった幕舎に安置された。そして私たち初年兵が一時間交替で霊前哨に立つことになった。これは死者に対する軍の慣例であるらしく、いわば通夜のようなものである。

霊前には米のご飯に箸が一本立てられて供養されていた。耐えられない寒さと闇の中で、いずれ俺もこうなるんじゃないかと死の恐怖に襲われた。

こうした死者に対する扱いは最初のころだけだった。以後そのほとんどが事前に病院へ送られて行くようになり幕舎で死者はでなかった。だが、いつの間にか、三戸の幕舎はすでに一戸が空家となっていたのである。

二月の下旬のことだった。今日は工場ではなくて別の作業だと言われて十数名で宿舎を出た。連れて行かれたのは工場とは逆方向へ数百メートル行っただころにある丘の上である。雑木がまばらに生えた丘は枯草と雪に覆われて地表は石の如く凍っていた。ここで私たちに先の尖った長い鉄棒と、ス

コップが渡された。

年若いたッ連人が、地表に長さ二メートル幅八〇センチ余りの長方形のしるしを二メートル間隔に画いて、深さ一メートルに掘れと指示した。その数二十個余りであった。

シベリアの凍土は深さ一メートル以上はあり、鉄棒で土を碎かなければ掘れない。穴掘りは基礎工事で慣れてはいるものの、ここでは一人一個ずつだからそれぞれの仕事の進み具合がどうしても目立ってしまう。カンボイと共に焚火をしながら監視している老人が、時々傍へ見に来る。そして、「ダワイ、ダワイ、ヴィストレラボータ（早く仕事をしろ）」とわめくのだ。

一体何のための穴だ。建物の基礎穴とは違う。疑問を持ちながらも、体を動かさないと寒くてたまらない。掘り続けている時、突然、「オイ、これ墓穴とちがうか」と大声を上げた者がいた。

私も薄々そう感じていた。だが、ま

さか、の思いだったのだ。

「俺が聞いてくる」と一人が老人の側に行き問い詰めたが、「ダワイ、ダワイ、ラボータ（仕事をしろ）」

とどなるだけで相手にしなかった。しかし、私たちの執拗な追求に老人は、「ダー（そうだ）」

と一言、一瞬気の毒そうな表情でうなずいた。

やはりそうだったのだ。この作業は翌日も続いた。それから数日後、運ばれて来た幾体もの亡骸がここに埋められたと聞いた。その亡骸は衣服が脱がされ裸同然の姿でいずれも凍っていたという。しかも死者の着ていたものは洗濯されて再び使用されたとも聞いている。

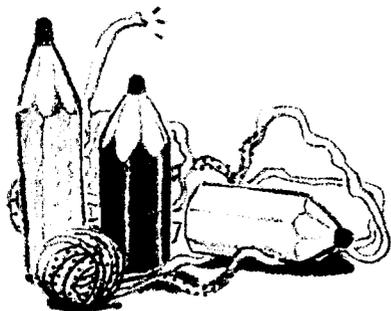
埋葬された盛土の上には番号を記入した小さな木の墓標が立てられた。それは墓標というより杭と呼んだほうがよいようなほどの粗末なものであった。

— つづく —

(写真提供・筆者)

(エ・佐藤瑞江子)

おさない子を育てる



母親という名の迷路

東京都武蔵野市
加藤泰子

夢の実現という言葉にわくわくして私は、子育てと平行して自分の生涯学習に力を注いできた。今年で十一年の結婚生活を過ごして私は、ずっと野心的だったし、今もそれは変わっていないつもりだ。けれども最近では、目を輝かせていたころの、かつての心情は失せてきている。夢を実現させるために努力し続けてきたつもりだが、先が見えない。夢に向かう確かな手ごたえがつかめない。というより、本音は毎日の生活に疲れて思うように学習が進まない。もしかすると気持ちだけが夢への野心に燃えていて、盛気楼のように、いつまでも夢にたどりつけないのかも知れないと弱気になる。

私は結局、中途半端なのだ。やっぱり子どもを第一の視野に入れなくてはならない。立ち止まり細切れにならなから学習するしかない。それどころか経験から何となく分かってきたのは、よき母親であることは、何もしないでいるような時間が必要だということだ。子どもの遊びを見つめる時間。子

どもと一緒にテレビを見て笑う時間。ただゆったりとイスに座っている時間。私は自分の時間を確保するために育児や家事の時間とそれとを生活の中で色分けしようと考えた。そうしようと努めていた。科学者の竹内均氏が「忙しい忙しいと言わないで五分でも十分でも空いた時間ができたら活用することだ」と、ある本に書いていた。私は五分でも十分でも手が空いたら学習を始めようと思気込んだ。しかし結局それは父性の思考であることが分かってきた。

母親には水仕事が終わってやれやれと座っていると、さっと絵本を持って寄ってくる子どもたちがいる。テレビを見て一緒に笑っていると、それに喜ぶ子どもたちがいる。洗たくやそうじや台所の仕事は育児ではない。それを終えて自分たちのほうを向いてくれるのを待っている子どもたちがいる限り、ほとんど自分の時間なんて言っていない。

子どもを寝かせ、やっと学習に取り

かかると、それに力が入る前に体力が
つき果てて私もまた眠くなる。これが
現実だ。そして思うようにならない自
分にイライラしてくる。時には
「ちょっとぐらいいママの自由にさせて
よ！」などと子どもにどなってしま
うこともある。

育児を悔いのないようにやり終えて
から次のステップに進むのだと私は、
そう理想に描いていた。しかし上の子
を産んでから九年。三人の子を持った
私の育児は、まだ終わっていない。三
人育てることが理想だったし子ども
は、もちろん可愛い。日々見せてくれ
る、あどけなさや愛らしさや、けなげ
さが、たまらずいとしく思える。けれ
ども自分のための行動が片隅に押しや
られていく時間の、あまりの長さに私
は、参ってしまった。

自分の時間を無理に持つとすると、
「どうして子育てだけで満足できない
の？ こんなにかわいい子たちがいる
のに。子どもが母親を必要としている
時期なんて、ふり返ってみれば短い



よ。子どもにもっともっと目を向けな
きゃ」もう一人の私が脅迫するかのよ
うにささやく。現実の私は、それだけ
で満足できずにいら立っている。ちょ
っとしたことでも子どもを叱ってしま
う。「そんな言い方をしなくてもいいのに」
「こんなことで叱らなくてもいいのに」
などと、叱りながらも自責の念にさい
なまれるような感情的な怒りをぶつけ
てしまう。叱っておいて謝ったりする。
自分の人格の貧困さを、鏡に映されて
見せつけられているような感じだ。

私は一体何をやっているのだろう。
自分がこんなに客観的に映っているの
に、どう扱っていいのか、分からない
でいる。ゆとりがない。子育て中のス
トレスだろうか。誰かに認めてもら
いたがっている、私のプライドの叫びだ
ろうか。子育てという途方もなく重い
責任を背負っている不安感と、自分の
青春へのこだわり。これとどう向き
合っていけばいいのだろうか。現在の私
は、心の振幅を、こんな具合に持て余
している。

小学校受験

東京都江戸川区
朝倉美紀



「天才児を創る！」
「名門小学校への母親塾」

最近、新聞の読書紙面でこういう見出しの英才教育の本の紹介を頻繁に目にする。

私にとって子供の「お受験」などというのとは全く別の世界のような。

まず私立はお金がかかる。付き合いが違う。なんでも子供同士の誕生日のプレゼントの金額が一人五千円が相場……といううわさも聞く。

ある程度マスコミが騒がしていると、いうこともあるが、「公立よりはるかにお金が必要」なことだけは間違いない。小学校は公立で充分。騒いでいるのはマスコミだけで、ほとんどの親がそう感じている……と、つい最近まで私は思っていた(と、いっても興味はあった)。

ところが、娘の通っている幼稚園に私立小学校受験をするという母親が何組かいる、という話を聞いた。

そのひと組であるYちゃんママ。とてもおしゃれで、幼稚園の送り迎え

でも目立つ存在。うわさでは小学校から大学までS学園とのこと。いつも「きれいな」服装でYちゃんを送ってきて、にこやかな微笑みをうかべている。「早く!!」と娘を鬼のようにせかす私とは大違いだ。

幼稚園に娘を送った後、Yちゃんママに声をかけてみた。

「お受験するんだって?」

「うん。二歳の時からそのために塾に通わせてるんだ。朝倉さんとこはどこに通っているの?」

「うちは何も。連れていくのが面倒くさいでしょ? 本人が習いたいっていわないし。Yちゃんはどこの塾に通ってるの?」

彼女は、一瞬信じられないという顔をした後、色々教えてくれた。

Yちゃんが通っているS会という塾は都内で一番古い幼児教室で、入会金八万五千円、三歳児クラスで週に一回、一時間で三万円。週二クラスというのもあってこちらは、月に五万円。

サラリーマン家庭にとって痛い金額

ではある。が、無理すればいけない……か。習い事も二つ三つ習わせれば軽くこれを超える金額だ。まして子供が二人ともなればこれ以上かかるかも、と変に納得する。

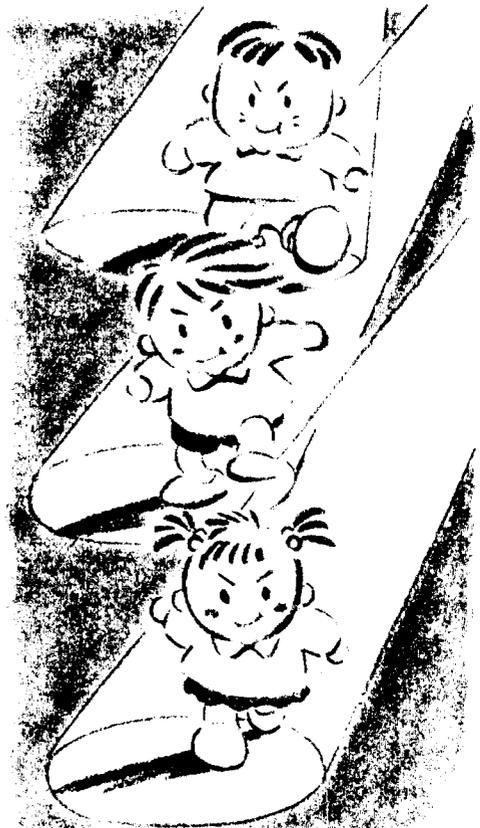
「うちもいかせてみようかな？」と、浅はかな考えが頭をよぎった。

Yちゃんママは、私の浅はかな考えを見抜いたように、「今はまだ、S会だけでいいけど、年長になったらスイミングにいかせようと思ってるの。塾の先生も『スイミングはやったほうがいい』っていってるし」

えっ、スイミング？ するとまた月謝がかかるじゃない。三万プラススイミング七千円……。うーん、やっぱり大変だ。

「受験の一年前は市販のテキストだけじゃ足りなくて、母親がドリル作りをしたくないと間に合わないらしいの。公開模擬テストがあって、この時にそれをやった子とやってない子ってはっきりわかるらしいわ」

ちなみにこの模擬テスト代が、一回



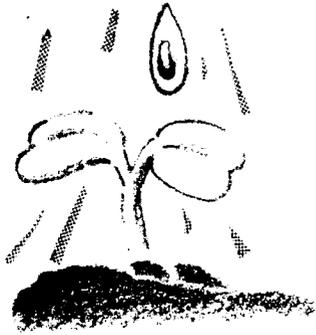
八千円。やっぱりお金がかかるんだ、お受験って。

やっぱり無理だよ。うちはどうやって食費を浮かそうか、どこが安いか、とって安いもの求めて自転車で走り回っているというのに。彼女たちを含め、お受験をする親というのは子供のために湯水のようにお金を使う。いったいどこからそんなお金が出てくるの？ とひがみたくもなる。

「親と子の安心料のため、大事な子供

を大切に教育してくれることを考えたら、私立の学費は全然高くないわ」と当たり前のように言ったYちゃんママ。

入学金二十〜三十万、一年間の授業料、寄附金を入れて百万以上は必要だといわれる私立小学校。公立と私立では民間とお役所ほどの違いがあるといわれている教育内容。でもやっぱりなんか納得いかない……。お金さえ出せばいいっていう問題じゃない。割り切れない思いでYちゃんママと別れた。



三歳児神話についての調査レポート

静岡県清水市
鈴木美奈 (31歳)

三歳児神話についてどうしても気になったので、子供が幼稚園に入ったのを幸い、図書館で調べてみた。

女性学などで多く見られる反対意見は「三歳児神話などが女性の自立を妨げている。これは何の根拠もないもので……」といった内容である。ところが肝心の、根拠がないとする根拠（やこしいな）は、すべて自分の体験談である。それすらない本もあった。

この体験がクセモノで、例えば、近所の人のお子さんは三人とも生後十カ月で歩いたそうだが、私の子が十一カ月の時「まだ歩かないの？」遅いわねえ」と言われた。一歳までに歩く子は約半数である。自分の体験だけで判断するのがいかに間違いやすいか、本のみによる知識でもないよりマシだということ、理解してもらえらるだろうか。つまり体験に基づく分析はその人にとって正しくとも、すべての場合にあてはめるには少々無理がある、と私は（根が理数系なので）考えている。

数人のヘビースモーカーの女性が安

産したところで、「妊娠中の喫煙は悪影響などない」と断言できないわけだ。また、失礼ながら人格形成上の歪みがもしあれば、思春期以降あるいは自身が親になった時に現れることが多いそうなので、十二歳やそこらでは大丈夫というにはほど遠く思われる。

ところで、育児、精神医学、児童及び犯罪心理学、大脳生理学、サル学の本まで二十冊くらい読んだところ、きっちり三歳までというものこそないが、乳幼児期の周囲の人（特に母親）とのふれあいが人格形成上非常に重要であるという内容は共通していた。

それぞれの専門家が何百千という事例を検討した結果であり、各分野からみたその理由及び実例なども「こういう場合は何パーセント」という具合に明記されている。また、それぞれの文献は横のつながりはほとんどないのに同じような結論が出ている。何人かが自分の子供のみ見て出した結論よりも信頼性が高いとの判断に無理があるのだろうか。

私は妊娠中に入院や安静を繰り返して、周囲から「今の人は大げさ。昔は出産ぎりぎりまで働いて……」などと言われたが、「だから昔のほうが流産とか多かったし死亡率も高かったじゃない」と反論した。これで言い返されたことはない。

これら文献は決してこうならば、こうと断定してはいない。私もそこまで考えない。三歳児神話とて、一瞬たりとも子供と離れてはならないとは言っていないと思う。できるわけがないし、私も長期入院の経験がある。三歳児神話はあくまで「このほうがより安心」といういわば基本で、それぞれ事情や才覚で応用がきくものと考えている。

しかし、否定するからにはそれなりの理論的根拠が必要だと思ふし、よく見かける否定意見は前記の理由から根拠が薄いと思うため、私は受け入れられないわけだ。

また、人は他の動物より未熟な状態で生まれ、狼が育てれば狼になってしまうほど未熟であること、社会性が芽

生えるのは三歳ぐらいであること（三歳の根拠はこれか？）、昔と今とでは社会のしくみも仕事の内容も親の意識も違うこと、母性本能というのは実は本能ではなく経験と学習が必要なこと、誕生直後から人に飼育された動物は自分の子を育てられないこと、子供に比べて視野が狭くなるのは親自身の間性の問題だと思ふこと、を付記する。

私はもともと、異常性格者の犯罪や少年非行、ストレス性疾患などに興味があり、そこから乳幼児期の母子関係の重要性を考えるようになった。育児と関係ないところで出された説も信じていないのは自由だが、私には逆に、自分たちにとって都合が悪いから信じないと取れるのだ。これでは水掛け論だ。本当に根拠のある否定意見をご存じの方ぜひ教えていただきたい。納得できればすぐにでも宗豆変えするつもりだ。

ただ、自分の優柔不断を三歳児神話のせいにして家にいる人より、そんなのウソよと言いついて働く人のほうが、私は好きである。



話は変わるが、偶然面白いことを知った。福井県の女性は働くという話だが、ここはもともと嫁さんの稼ぎをアテにするお国柄だったそうだ。農家の嫁さんが無償の労働力とみなされていたのとまったく同じである。

稼ぎのない嫁なんてと言われ、自分でわが子を育てるといふ選択ができない、女性の自立どころかむしろ屈辱的な環境ではなかったか（と書かれていた）。私の友人は農村出身で、少し前まで嫁さんは働き子供は祖母がみるのが当たり前、幼稚園の遠足にも祖母が行ったそうだ。そのお母さんは「子供をおばあさんとられた」と悲しそうだった。東京とどちらが遅れているのか、どちらが本当に幸せなのか、わかりはしない。

腹が立つ、 でもかわいい

東京都新宿区
林 直美



二五四号の「おこってる場合じゃないね」を、とても興味深く読ませてもらった。

私にも息子がいる。が、先日ようやく三歳になったばかりで、私はまだまだ育児の大変さを味わっている。現在は（何でも）かあちゃんはだめ」に手こずっていて、私は本当に何もできないでいる。新聞も本も読ませてくれず、テレビも自分が気にならないと、だめっと消されてしまう。トイレにも行かせてもらえないことがあって、閉口している毎日だ。

しかし、かわいい。このやろうと思っても、やっぱりかわいいのだ。私は短気なのですぐに頭に血がのぼる。でも冷めてしまえば、うちの子が世界一のバカ親になる。息子が生まれてから、今が一番かわいいです。こしてきて。いつもいつも思うのだが、子供っていつまでかわいいのだろう。何歳がきたら、どれくらい大きくなったら、今が一番のかわいさがなくなるのだろう。息子が風邪をひいて、要求があれ

ば鼻水を吸ってやることもまだできる。だが、もう息子のうんちを素手では触れない。息子がかんで吐き出したものも食べられなくなった。そうして、私はどんどん息子にしかできないことを失ってしまう。かわいいが、私とは別個の人間で、息子の人格がある。今でも腹立つことはたくさんある。息子の寝顔や小さな手足を見て、かわいいと思えなくなるのは、どういう時なのだろう。

息子自身でできることもかなり増えて、私は次第に楽になった。しかし、見える発達と同じだけ、内面も成長してきたのがよくわかる。自己主張がより明確で強くなった。表情もとても豊かになった。何も言わなくても顔つきでわかる。

親としては、叱ったり怒ったりする前に、息子の心情を考えなくてはいけない。精神的フォローが必要になって、私はまた新しい育児の悩みをかかえつつある。

（エ・西宮さき）

永遠の片想い

名古屋市天白区
西尾 裕子

学校から帰ると、私はざっと風呂に入り、ビールを飲みます。ユーミンの「DANDAN」なんかがかかっています。私は、よっこいしょと、剃刀を持ってきて手首を切ります。

きのうもおととも切っているので、脈の場所は大体分かります。キッと短いヒステリーのような痛みがはしると、そこからツツと血が流れます。それは手首から肘まで、ゆるやかなカーブを描いていきます。

私は何度も何度もその動作を繰り返しました。切るときは痛いので苦々しい思いがするのですが、流れる血を見て、つらいなあと思うのは好きでした。死ぬ気はありませんでした。一人暮らしのアパートで際限のない自由な時間を、こんな自殺ごっこで、私は毎晩うめています。

テープはユーミンの「冷たい雨」に変わっています。

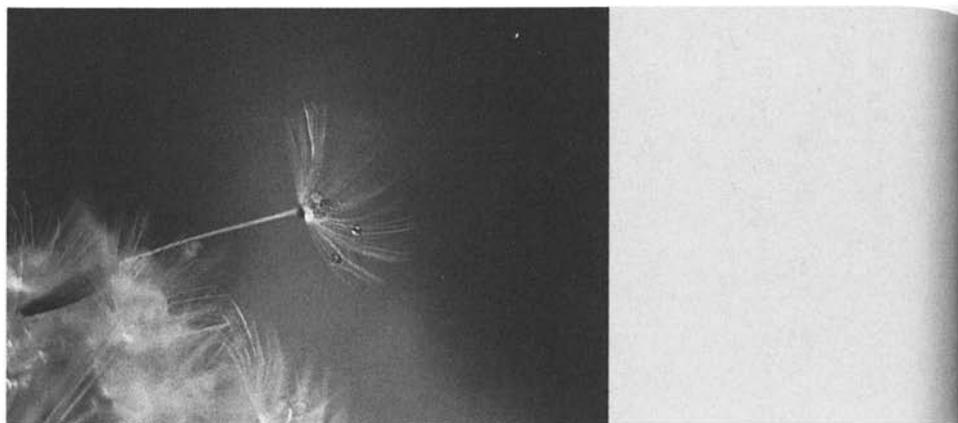
*

その人に初めて会ったのは、新任教員の研修でした。私の一目惚れです。

研修最後の夜、電話を掛けたのは私のほうからでした。そして翌日、彼らの電話で、「今度の日曜日、あいてる？」と言われた時は、私は嬉しきではじけとびそうでした。海を見て帰ってくるだけのデートでしたが、私は満ち足りた気持ちで一杯でした。それから、一日おきに電話がかかってきて、夜遅くまで話すのが日課になりました。

次のデートの帰りに車の中でキスをされてから、私は大きな玉が坂を転がっていくのを感じていました。

からだは宙を舞っているようでした。次に会える日までの間が、長く長く感じました。会えない日々は、全く無意味な時間でした。早く約束の日になれば、そればかりでした。授業をしなくてはならない身でありながら、気持ちからはからだを離れて、あちこちに飛んでいました。生徒とランニングをしなから、私は暗い車の中で、彼が顔を寄せてきた瞬間を何回となく反芻していました。



うきうきしていました。うきうきして、廊下を歩いていても、このまま廊下に倒れ込んでそこに溶けてしまいたいと思いました。

そんな状態でしたから、なぜ彼が土曜の夜しか会おうとしなかったのか、私は考えてもみませんでした。私を「好きだ」と言ったことばは、本心だったと信じています。ただそれが、非常に苦しうだったこと、一度だけ電話で「バイクで走っていると、このままガードレールにぶつかってしまいたいと感じる」と言っていたこと、この人、どうしてそんなことを言うのだろうかとは思ったのですが、それが何を意味するのか深く考えてもみませんでした。

何度かデートを重ねていくうちに、彼は私をホテルに誘うようになりました。私は男の人とお付き合いをした経験がほとんどなく、ただ「結婚まではダメなのだ」という気持ちだけで、「いかんよ」「いかんよ」を繰り返していました。しかし、どこまで拒み切れ

るか、自分でも自信がありませんでした。私は彼が好きで好きでたまりませんでしたから。

彼はしかし、いつも踏みとどまってくれました。後日談を聞けば、誰でも当たり前と思うかも知れませんが、私にはそれが、彼の精一杯の優しさだったと思えるのです。彼はよく、笑って「最後までいかなかったのは、裕ちゃんだけだ」と言っていました。

会うようになって、二カ月たちました。彼は車のなかで私を抱きしめ、「裕ちゃんが好きだ。本当に好きだ」と何度も言いました。私は幸せの中で揺れていました。胸のところが、ホーっとしていました。彼の腕に力が入るのを、私はからだ全体で感じていました。

そんなある日、学校から帰宅し、食事を終え、布団の中でうつらうつらしているところへ電話が入りました。

「あ、裕ちゃん？」

彼からでした。私はいつもの電話だと思ひ、

「このあいだはどうも……」

と話し出しました。しかしその声をさえぎって、

「仕事で遅くなつて……。今、公衆電話からなんだ」

彼の声は、いつになく聞き取りにくく感じました。

「オレ、裕ちゃんが好きだ。だけど、いつまでも……。オレ……」

「ん？ 何？」

声聞き取りにくいのは、公衆電話だからだと思っていました。しかし、小さい声は確実に、こう告げました。

「結婚が決まってるんだ」

「……」

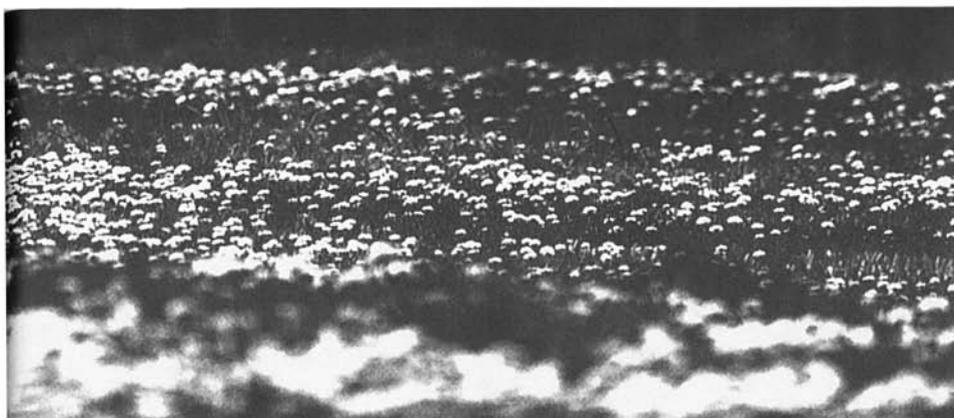
何？ 結婚が決まっているって。結婚って……。

「日どりも、決まったんだ」

「そう……」

私は、小さく言うのがやっとでした。彼のことは続きましたが、私はその時彼が何と言ったのか、記憶がありません。

泣きも叫びもしませんでした。静か



に彼のことは聞き、

「じゃあ」

のことは、

「うん」

と言って、受話器を置きました。

いったい何が起こったのか、判断がつかかねていました。ただ心臓だけがツーンツーンと動いていました。

私の中からとてつもなく大きなものが、スパーンとなくなつてしまつた。なくなつてしまつた。もう、なにもない。

私は泣きました。大声で泣きました。泣けー、泣けー！と自分が言っていました。涙を流すことだけを考えました。ほかのことは何も考えられませんでした。何時間も何時間も、私は布団の中で泣いていました。

何時寝たのか、朝はいつもと同じように訪れ、私がどんなに打ちのめされていようが授業はいつも通りにありました。

学校はいつもと同じようにそこにあり、運動場はいつもと同じように砂埃

聞こえました。

「はい、竹平ですけど」

「あ、あの、A校の、伊藤ですけど」

彼でした。彼からの電話でした。私
はただ、ただ、嬉しきで一杯になって
いました。彼に婚約者がいたというこ
とを友達に話すと、友達たちは皆一様
に非常に怒り、「何ていう人だ！ 何

という奴だ！ 裕子、かわいそうに」
と言いました。しかし私は確かに自分
はかわいそうだとは思っていましたが、
彼を憎んだり、恨んだり、そういう気
持ちには全くなれませんでした。私は
彼に婚約者がいようが、彼が結婚しよ
うが、彼が大好きでした。

どんな話をしたのか、私たちはまた
土曜日に会う約束をしていました。

その夜、私たちは西尾市の高台に上
り、西尾の夜景を見ました。展望台に
吹く風は冷たく、

「寒い」

と言った私を、彼は抱きすくめ、長い
長いキスをしました。

帰り道、また彼は「ホテル」と言い

出しました。しかしそれは明らかに軽
いジョークでした。強引に誘えばつい
てきたろうことは、彼も分かっている
ようでした。あいさつがわりの
「ちょっと、よってかない？」は私た
ちの会話のほんのアクセントになりま
した。

これで最後だとも、また会おうとも
言わない別れをして、私は一人のア
パートに帰っていきました。事態はな
にひとつ変わることなく、私は学校で
は授業に追われ、家に帰ると泣きなが
らユーミンの曲を聴いていました。

そんな中で迎えたクリスマスの夜、
私はまた彼と一緒にいました。彼と別
れようとも思いませんでしたし、彼女
と別れてほしいとも思いませんでし
た。彼をなじることもなく、問い詰め
ることもなく、ただ静かに、でも強く
彼が好きでした。

「本当に、ずっとあっちとは会ってい
なかつたんだ」

「……裕ちゃんの事を話したら、それ
でもいいって……」

「……むこうの両親をうらぎれない……」

とぎれとぎれに彼は話しました。そんなことどうでもいいのに。こうやって会ってただけでいいのに。私はずっと黙っていました。

*

年の瀬も迫ってきたある日、思いがけない電話がありました。

「竹平さん？ わし」

昨年ベアを組んで担任をしていた平田先生でした。私と同じ年の、やはり体育教師だった平田先生は、毎日一緒に生徒のことで悩み、話し合い、気心の知れた同僚でした。

「久しぶりだね。元気？」

私は、「ふられた」と、白状してしまいました。

ほどなく、また電話がかかり、「飲もう。そいつのことを忘れさせてやる」

と言われました。飲みながら平田先生は、

「ゴシゴシゴシ。今、けしごむで消し

た。もう忘れた」

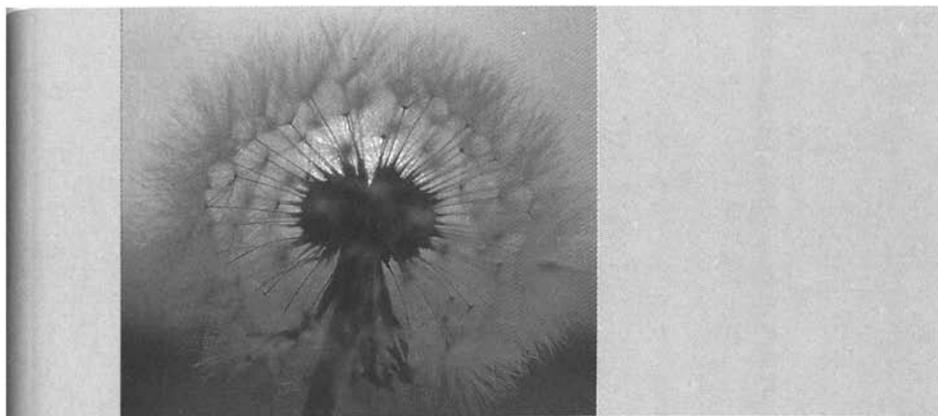
と言ってくれました。こうしていれば忘れられるのか。私は平田先生のキスを受けながら、こうしていれば忘れられるのかと繰り返ししていました。

*

年が明け、ツーリングと称して、あの人がやってきました。二月には、蒲郡の夜景を見に、数時間かけてドライブをしました。彼の結婚式は、三月に迫っていました。私とは違う世界の事だと思っていました。私たちは、結婚式まで後何日と、秒読みをしながら会っていました。私は彼が好きでした。心の底から好きでした。

しかし、心は空しかったのだと思います。私は一方で、平田先生と電話で話したり、飲んだりするようになっていました。忘れられるなら、あの人を忘れたいと、その一心でした。私の心は殺伐としていました。私には平田先生が好きだという感情は、全くありませんでした。ポツカリあいた心の穴を、平田先生と会うことで、一生懸命埋め





ようとしていました。平田先生はいつも優しく、私を支えてくれました。私はそれに甘えていました。

平田先生が私の部屋に来るようになり、布団に、赤い赤い血液がついた夜、それでも私は、平田先生に愛情を感じてはいなかったのです。私が処女だったと知った平田先生は、結婚を強く意識したようでした。

三月。あの人の結婚式を、風邪をひいて寝込んで過ごした私に、「どうして今日があいつの結婚式だと言わなかった」と平田先生は責めました。そして、「電話では言いたくなかったんだけど、竹平さんとの結婚を考えている」とも。

私は冷めた心でその声を聞きました。どうしてそんなことを言うの、と思っていました。

私は何がなんだか分からなくなっていました。部屋に平田先生がいても、「私、この人、好きじゃない」と思ったり、「こうしてこの人と結婚するの

かしら」と思ったりしました。

平田先生、ごめんなさい。

電話が鳴っても出なかったり、遠くへ一人旅に出ているいたり、私はあなたを苦しめて、そして一方的に別れを切り出しました。

平田先生の受けた傷を思う、人間として当たり前の優しささえ、私は持ち合わせていませんでした。裕子は、最低の人間。

別れを告げた夜、苦い時間から逃げるように、私はアパートに戻りました。アパートでは、電話が鳴っていました。その半年後に結婚式を挙げた今の夫、西尾さんからの電話でした。

*

私たちの学校には、年二回、大きな体育大会があります。県下の学校が集まって、夏は陸上、冬はバスケットの試合をします。結婚してしまったあの人も、大会では顔を合わせることになるのです。

私は、自分の結婚を十月に控えた夏の大会でさえも、あの人に会えること

で胸が一杯になっていました。私は、どうしてもあの人を忘れられなかったのです。

十二月の冬の大会で、私の大会役員の名札は、「竹平」から「西尾」に変わっていました。

「ふうん、結婚したんだ」

彼は言いました。

「私はあなたに会いたかった。会えて嬉しい」

私は心の中で言いました。

ゆっくりと年月は過ぎていきました。私も彼も、母となり父となりました。私の長女は、彼の誕生日と同じ日に産まれるというおまけ付きで。

妊娠八カ月の夏の大会は大きなおなかを抱えて、翌年の夏の大会は子どもをベビーカーにころがして、私はあの人に会いたい一心で会場に足を運びました。そして、会えた時の胸のときめきはとうすることでもできませんでした。

九月に育休を終え、私は仕事に復帰しました。ほどなく学校で研究会が開かれ、その参加者名簿に彼の名前を見

つけました。研究会の随分前から、私はまた落ち着かなくなりました。会えると思うと、嬉しさではじけ飛びそうでした。

しかし当日、彼は研究会に来ませんでした。その夜、私は何年ぶりかで彼に電話をしました。

奥さんが出るかと思いましたが、電話に出たのは彼でした。体調が思わしくなく、病休をとっていると、電話の向こうの彼の声は沈んでいました。

奥さんの声も赤ちゃんの声も聞こえませんでした。今考えると、彼のマンションには、もう奥さんは居なかったのだと思います。

それでもバスケットの監督の任は降りられなかったようで、冬の大会では生徒を引き連れてやってきました。彼は私に会うと、

「離婚することにしたんだ」と言いました。

「離婚するくらいなら、なぜあの時……」と、私の心は、決して言葉に出せない声で一杯でした。私は何も言え

ず、目を丸くしているだけででしたが。

*

年月は過ぎていきました。私たちは別々の人生を、それなりに歩いていました。

私はほどなく、第二子を授かり、産休、出産、育休を経て、一年後、再び仕事に復帰しました。彼は、離婚届を出すのに時間がかかっている中で、一人の女性と恋に落ちていたそうです。

私たちはその後、夏の大会、冬の大会を三回ずつ繰り返しました。

わたしはずっと彼のが好きでした。大会の数カ月前から、あと何カ月で会える、あと何週間、あと何日と秒読みをしていました。当日は震えるような胸を押さえて会場へ行き、会って話をすると、その後数日は泣けてしまうような日々でした。

もう、新任のころから七年が過ぎていました。私は三十二歳、彼は三十一歳になっていました。

その夏の大会は、雨天のため中止となりました。大会が中止になったの

は、私が教員になって初めてでした。

「裕子、雨で中止だよ。伊藤さんに会えないよ。さみしくないかい」

私は自分に語りかけました。

「あれ、だいじょうぶだね。私、だいじょうぶだね」

私の中で、ひとつの大きなものが段々遠くなっていくのを感じていました。このまま忘れていくのだろうか、私は他人のこのように静かに感じていました。

冬の大会も、一言も話せませんでした。私はその年で退職を決めていましたが、校長以外だれにも話していませんでした。あの人に最初に話そうと決めていたからです、それもかなわぬまま大会が終わりました。

もう一生会えない。さようなら。さようなら。遠ざかるA校のバスに、私は何度も叫び続けました。

*

新聞の教員人事の退職者の欄に、彼の名前を見つけたのは、三月も終わろうとしていたころでした。私たちは、

もうずっと遠くにいましたので、私は名前を告げても忘れられているのではないかと思いつながら、彼に電話をせずにはいられませんでした。

「あの一、B校の西尾ですけど……」

「ああ、裕ちゃん！」

彼の声は私のからだじゅうに響きました。そして私たちは、会う約束をしたのです。

彼は、西尾市に釣りとおウトドアの店を始めると言いました。離婚は二年前に成立しており、再婚を考えた女性とも別れた。子どもとは時々会っているとも。私たちは、この何年か分のお喋りをしました。彼は変わっていませんでした。

「おじさん、エッチなこと考えちゃった」

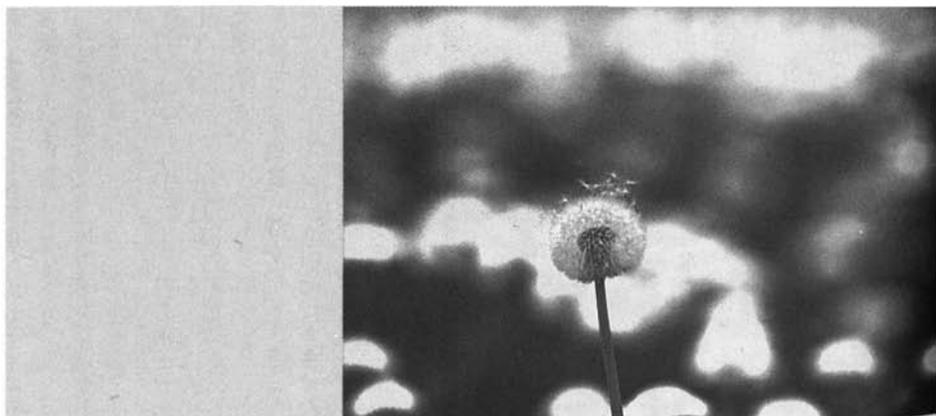
「だめ、だめ」

「ちょっと、寄っていきょう」

「だめ、だめ」

私たちは笑えるくらい、九年前と同じ会話をしていました。

彼のキスのキャビンの香りも、九年



前と同じものでした。

五月に彼の店はオープンしました。

私は、大好きな黄色いガーベラを一杯のカスミ草と一緒に持って行きました。

それからは、一カ月に一度、彼の店にいくことが私の唯一の楽しみにになりました。私の頭は彼のことで一杯でした。

朝食の用意をして、夫と子どもを起こし、彼を想いました。洗濯をして、掃除をして、彼を想いました。子どもを保育園に送り出し、彼を想い、一人でコーヒーを飲んで、彼を想い、子どもと遊んで、彼を想い、夫に抱かれていますときさえ、彼を想っていました。

この年になって、こんな想いに苦しむとは思いませんでした。私はその数カ月で、一〇キロやせてしまいました。食欲が全くありませんでした。彼を思うと泣けてしまって、何も食べなくなってしまうました。夜も眠れませんでした。

店に行けば、彼はとても喜んで迎えてくれました。キス以上のものを求め

られもしましたが、私も、愛情とセックスは別のものということくらい分かっています。好きでもない奴にこんなことはしないと、彼は言うでしょう。でも。

セックスするかしないかが、不倫かどうかの分かれ道なら、私たちは不倫ではありませんでした。ほんのあそこにあれを入れるか、入れないかだけのことなのに。そんな、些細なことなのに。言葉というものは不思議です。私たちは何もなかったと言ってしまうから不思議です。

危ない橋を渡りながら、いつしか季節は、秋になっていました。

店に行った私に、彼は少し真顔で言いました。

「僕はおまえと、最後までいかなくてよかったですと思っている。」

……裕子は幸せな家庭を築いている。僕は、それを壊すことはできない」

あるいは彼の中で、少しずつ私が消えようとしていたのかも知れません。彼は何時でもできそうな仕事を次々と

引っ張り出してきては、忙しそうに立ち働いていました。

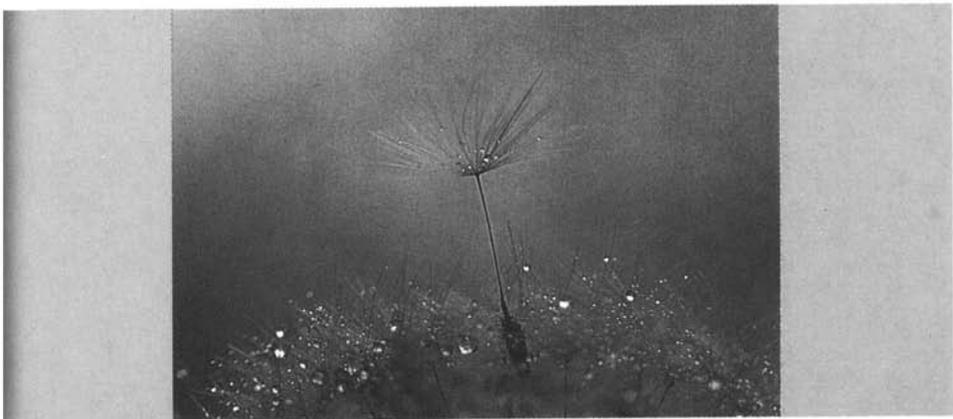
「あなたの中から、私が消えていく……」

打ち消そうとしても、打ち消そうとしても、その予感私に覆いかぶさってきました。

寒い冬が過ぎ、春がやってきました。私は半年、彼に会いに行きませんでした。

でも、会いたかった。

私は、「伊藤〇〇」という看板を見ては、彼を思い出し、かりあげで眼鏡をかけたジーパンの人を見ては、彼かと思い、ハイラックスサーフを見ては、彼の乗っている車だと思い、釣りをしているのを見れば、彼の得意だったことを思い出し、水曜日になれば、今日は店が休みだったと思い、日曜になれば、今日は釣りに行っているかと思いい、晴天を見上げ、お店のオープンの日はこんなに晴天だったと思えました。そしてそのつど涙が出ました。



四月、私はせめてひとこと声が聞きたい一心で、電話をかけました。彼はいつもの声で、

「時々、思い出していたんだ」と言いました。

そんなひとことで、私は天にも昇る気持ちでした。私は、五月の彼の店の一周年に、赤飯を炊く用意をして出かけていきました。

どこがどうというわけではありません。彼は「もう来ないほうがいい」とは言いません。

ただ、私は彼の中で小さくなっていくんだという感じが、どうしても伝わってきてしまうのです。あるいは、私は彼の中から消えつつあるんだなという、そんな感じが。

その日は、キスもしないまま帰りました。からだじゅうがスースーしていました。

六月になりました。私は、三十五歳の誕生日を迎えます。

初めてあの人にあって、もう十年になります。

もう、会うこともないのかもしれない。せん。

*

今回、私はこの文章を書くに当たって、時期が少し早すぎたのを感じています。私にとって彼は、今だ過去にはなり得ていなかったのです。

私はこの文を書きながら、まだ自分は彼の中にいると思いたがっていました。今も、今、この瞬間も、「電話をしたい。声が聞きたい。会いたい」と思っている自分があります。そしてまた、泣いてしまっています。

彼は西尾市に住んでいます。そして、裕二と言う名前です。西尾裕子というペンネームは、そこからもらいました。文章を書き続ける限り、私はこのペンネームでいこうと思っています。

もう一生会わなくても、彼は私の中にこんな形で残りました。

左手首の切り口は妙にテカテカして、そのまわりの皮膚は、引きつったように波を作っています。

私は、永遠に彼が好きです。

本当のざわさわして何ですが

川崎市宮前区 十文字美恵

みゆきさんこんばんは レポート用紙で失礼します。

先日のことです。久しぶりにテスト勉強でもしようと思い、図書館に行くとバスに乗った時のことです。いつものごとく、バスは人の立つ場所もないくらい学校帰りの高校生でいっぱいでした。僕も仕方なくその混んでいるバスに乗りました。前のステップの所に立っているのがやっとの状態です。二つ三つバス停が過ぎると、その混んでいるバスに妊娠して、小さな子供をつれたおばさんが乗ってきました。勿論バスには立っている所もないほど、高校生でいっぱいです。次のバス停で、

大人になりかかった子供たち

そのおばさんは降りるためプザーを押しバスは止まりました。バス停一つくらい歩けない距離でもありませんが、何しろ大きなお腹をして小さな子供の手を引いてでは苦しかったのでしょつ。そのおばさんは、「すみません、前から降りしてください」と頼みました。すると運転手は、「出口はあっちだよ、後だよ」と冷たく言いました。

その混んでいるバスの中を前のステップからわざわざ後へ、小さな子供の手を引いて行くのは大変なことです。それで僕は「こんなに混んでいるんだから前から降りしてやれよ」と言うと、今度はバスの運転手と口論になりました。そして運転手に「お前、終点

まで乗ってる！」と言われ、いささか頭にきた僕は終点まで乗ってやりました。

終点まで来ると運転手はバスを止め、僕の胸ぐらをつかんで「てめえ、なんて言った」と怒鳴りました。体力では少し自信があったので、そんなの突き飛ばしてやりました。

そしたら何のことはない警察介入です。派出所の中で僕は「あんなに混んでいたんだから、妊娠しているんだからちょっと前を開けてやればいいことじゃないか、それがあんたの本当のや



さしさだるう！」と言つと、

「もし、前から降ろして事故でも起きたら全部俺が責任取るんだぞ！ 事故でもあったらお前が責任とってくれるのか！」と言われ、僕は何も言えませんでした。

みゆきさん。大人の仕事に小さなやさしさは必要ないのでしょか。

誰でも大人になるとこんなに心がすたれてしまうのでしょうか。

何だか大人になっていく自信がなくなりました。

本当のやさしさとは何ですか。

十八才 学生

息子の部屋を掃除していたらベッドのマットの下からこんな手紙が出てきました。「みゆきさん」というのはラジオの深夜番組のディスクジョッキーに出演していた歌手の中島みゆきさんのことと思われます。

十年も前のこの事件は息子から聞いて知っていましたが、あの時はやたらと腹をたてて、あの運転手野郎とか、

お巡りの奴らもクソの役にもたたねえ、とか興奮していた息子でした。その時、私が息子にどんな対応をしたかと言えば、運転手を怒らせないような言い方をするべきだったという意味のことを話したように思います。今思えば何と云うすべらで、傲慢で、言葉には出ない息子の心の奥にまで思いの行かなかったことに胸を突かれます。

息子は誰にも解ってもらえないイライラと悶々とする気持ちを、こういう形でこういう人に投げ掛けていたのです。

親の言うのは親の言い分、正しいとは限らないというのが息子の主張で、一言いえば三言返ってくる具合で、私は激しい言葉の暴力に泣いていた時期でした。激しい言葉とは裏腹の今にも破れそうな表現しようのない内面を今ごろになって知らされた思いです。

「だれでも大人になるとこんなに心がすたれてしまうのでしょうか」

息子の目には、私も心のすたれた大人として映っていたに違いないのです。

(元・小林正子)

● 大人になりかかった子供たち

私の宗教観

熊本県天草郡 松本とみよ

突然、何を思ったのか、

「お前も、神や仏にちゃんとおまいりするようにしなよ」と夫が言った。

私が、家の神棚や仏壇におまいりをしないというのである。

こんな指示めたことは、めったに言わない人だ。このところ糖尿を宣告されて気が弱くなったせいで神仏にすがりたくなっただのであろうか。

夫の言葉に対して、

「神仏なんかくそくそええだわ」と曰ころのうつぶんをはき出した私である。

もちろん私も、毎朝神仏にお茶やご飯を供える

のだが、どうも心の底からおまいりする気持ちがないのをみすかされたようだ。

「私だってね、心の中で祈ってる時もあるわよ、神棚や仏壇に頭を下げてないからって、祈ってないことにはならんでしょうが。第一ただの木で作った位はいや紙のお札に、何の意味があるのかよくわかんないわ。私は宗教なんて持ってないの。先祖に対して祈る気持ちはあるし、超自然現象も信じている。だけど偶像崇拜する気なんかないわね。偶像崇拜を禁じた宗教あったわね。我が意を得たりよ」

夫はため息をついて、



「ああ、わかったよ。決して「バイ」とは言わないだから」

他人のことは
わかる姑なのに

姑に神仏のことをいわれると心中しかめっ面をする私。第一、朝の忙しい時に、なんでお茶を三つ、水を二つ、ご飯四つ供えねばならんのか。それも、ご飯は、小さな碗にこんもりと盛りあげねばならぬ。供えたと思えばすぐに下げる。結構な手間である。

最近、姑が霊能者に聞いて来たとかで、台所に荒神様とやらもおまつりすることになった。交通事故にあわぬためだそう。もうひとつお供えの箇所が増えたわけだ。全

く、やりたきや自分だけでやってくれと思つ。

「宗教は自由なんですから、強制してほしくないわね」と言いたくて、うずうずするのだが、それを言っちゃおしまいだよ」と言う声がして気を静めるのである。

「この間、テレビを見ていたら、色々と悩み多い夫婦がいてね。霊能者が相談にのってただけで、その人達、大黒様をとつてもたくさん集めるの。これだけたくさん集めるのは異常だって言ってたわ。神や仏に頼りすぎる心が問題なんだって!!」と姑に対して、遠まわしに皮肉ったつもりだったのだが、一向にわかってもらえなかつた。

自分の姑

姑の実母も、自分の姑とはおりあいがよくなかったらしく、神仏におまいりする夫の母に対して、

「鬼の心でおまいりして何になるの」と陰で言っていたらしい。その逸話を聞いただけで、姑の実母に親近感がわいたものだ。

姑は、勧誘に来た○○○会の人に対して、

「あんた達が、今現在幸せなら、言われなくても入りますけどね」と皮肉った。

その人達は、夫に逃げられたり、病人をかかえて苦労してたりして、信心してたから災いがこの程度ですんだなどと言って、姑の冷笑をかけたのだ。

姑の一言は、見事なまでに、宗教のある側面を言いあてていると感心したものだ。

しかし、同じことを姑に言いたい私である。神仏を熱心に信仰するかにみえる姑が不幸で、なんでもよいと思っている私のほうが幸せなの？

姑は、今病気がちである。結婚したとたん息子が冷たくなった。農業がきつい。息子夫婦が農作業を手伝ってくれない、とぐちの言い通し。

私達一家は農業で生活しているわけではない。年に十万にもならぬ農業なんかやめちまえと言っているのに、草がはえたら近所の笑い者になるなど、自分の裁量ひとつで、どうにでもなることを何もしないでぐちる。

他人や神仏だのみにしてないで、自分の幸せは自分でつかめと言いたい。

自分の生きたいように生きていないことを姑はぐちるが、金もひまもあって、したいようにしていいのにはないのである。

他人のことはいくらでも真実を見通す力のある

姑が、自分のこととなると、まるで見えていない。同じ轍をふんでいるのに気づかない。

姑の言う通り、今現在不幸な状況にある人が、信心しなさいよと言っても説得力に欠ける。信心したって幸せじゃないんだ……の見本ではないか。

幸せは自分でつかめ

宗教って不思議。

何らかの不幸な状況にある人が、宗教宗教にのめりこみ、また他の不幸な人を勧誘する。

だが、その人達が宗教のおかげで幸せになり大成功してって話は聞いたこともない。

宗教をやっても決して幸せにはしない。少なくとも現世での成功とは関係がないのは確かだ。

来世の幸せのためにやっているというのなら、ご勝手にどうぞだ。

幸せの絶頂にある人は、決して宗教にかまけているひまはない。自分のやりたいことがわかかっていて、それに向かって努力している人が実は一番幸せなのではと私は思うが、そういう人は忙しくて、とても神仏にうつつをぬかしているひまはないのだ。

かく言う私も宗教に首をつっこんだことがあった。高校三年の時だった。別に悩みがあったわけではない。外語クラブで一緒だった同級生に、「私、聖書の研究をしてるんだけど、あなたもやってみない」と誘われたのだ。てっきり歴史の勉強だと思っただけなのに、それは、〇〇〇の証人」という宗教団体の聖書研究であった。交通事故にあつたわが子に対する輸血を、両親が信仰を理由に拒否したため、その子が死亡するという事件があり、一時話題になった。

〇〇〇の証人の主張することは、「この宇宙や人間はエホバに創られたものである。しかし、は





はるまげどん



じめの人間エバが、エホバのいつけに背いたために、人間は不完全な存在になった。病気や不幸や死がおきるのはそのせいである。近い未来にハルマゲドンが起こり、人類は滅亡する。だが、エホバを信じている人々は、エホバの慈悲により永遠の命が与えられる。新しい世界で、病気も不幸も死もなく平和に暮らすことができる。そのために、エホバの存在をできるだけ多くの人々に知ら

せなさい。もう時間は残り少ないのですよ」というものであった。

この宇宙、隅から隅まで計算しつくされたような精巧さ。地球上では、死んだものは土にかえり、また再び新たな命に生まれかわる。食物連鎖の見事さ。むだな物は何ひとつとしてない。

物は放っておいたらこわれはしても、新しく何ができるなんてことはない。こんな精巧な宇宙

の仕組みが偶然にできたなんて考えられない。神の意志というものが存在したのではないか——と私もその点は心を動かされるものがあった。

パンフレットや小冊子には、家族が仲よく暮らすことの重要性などが書いてあり、なるほどというものばかり。

例えば、嫁姑問題に対しては、親というものは、子供が結婚してからは、あれこれと口出しすることはひかえない。アドバイス程度にとどめなければ平和に暮らすことなどできませんと論じているところなど、大いにそうだとすなわすいたものだ。

しかし、他人を人信させねばならぬというところがどうも私には不向きであった。だいたい私は個人主義。他の人にも干渉しないかわりに私も放っておいてというタイプ。自分がいくらその考えに傾倒しようが、他人まで説得して同じ考えにさせようという人間ではない。その上、以前から宗教にはまりこんでる人って何かへんという感じをもっていったせいもあって、のめりこむことはなかった。へえ、こんな考えもあるんだな。そうかもしれないと考える程度。

歴史が証明しているが、平和を唱えながら宗教の名で戦争をする。宗教にはまりこんでる人っ

て、はたからみると明らかにへんなのに、当人は全然気づいていない。不気味。矛盾。

永遠の命というものも、どこか絵空事のように思えた。永遠の命ってそんなに魅力的なものだろうか。永遠というからには、千年や万年どころじゃなく、ずっとずっと生き続けるわけである。そんな世での幸せや達成感なんであるのかしら？むしろ体が寒くなるのである。

何かへんな宗教をやっているらしいと察した父に叱られたのをシオに、やめることにした。

私がもう全然する気がないのだとわかると、

「エホバは、その気になれば、あなたの家だけを消すことだってできるんですよ」とある信者からいわれた。

「へエーッ。愛の神というエホバがそんなことをするの!!」と私の選択がまちがっていなかったと確信を持った。

勧誘する際の注意として、相手がいやがったら気長に待つ。相手も幸せな時ばかりじゃないのだからと言われると相手の不幸を待つのかといやな気がしたものだ。

今から二十年前の話である。その当時、私を勧誘した女の子は、

「ハルマゲドンは、今生きてる老人が生きてる間

には起こる」と言っていた。そのころの老人はもう死んでしまった人も多い。もし本当だとしても残り時間は少ないのである。はたして、彼女のいうことは本当なのか、私は意地悪くようすをみているというところである。

ノストラダムスの一九九九年七の日という予言もあるのだ、ちょっと気にはなるのだが。万が一彼女の言うことが本当でもちっとも後悔していない。私は、この世を誰にも束はくされずに自由に生きて、けっこう幸せだから。

彼女は、○○○の証人になったがために結婚していない。今では、彼女の母親までが入っている。と伯母にあたる人が私に嘆いた、彼女はあまり幸せそうに見えない。もしもハルマゲドンが来なかったら、失った人生をどうするのだろうか。聞いてみたいものだ。

妹がつかまった宗教

次に宗教問題にぶつかったのは、結婚後まもなくのことであった。妹が○○○会に入ったのだ。

多感な高一のころに父を亡くした妹は、はかりしれぬ衝撃を受けていた。父がまだ救われていないなどといわれてその気になったようだ。

「ナンミヨウホウレンゲキヨウ」と唱えて何が幸

せになるのかよくわからなかったが、自分で自分のことに責任がもてるのなら別に何を信じようが本人の勝手である。

それが、日蓮が説いた日蓮正宗というものだ。聞いた時は、とにかくへんな新興宗教でなくてよかったと少しは安心したものだ。

でもその○○○会は、こちらの地方ではとにかく評判が悪い。金集め主義。だまされてるんだといううわさ。

私としても、困ったことになったと思うが、いざ反対するといっても、何も知らないものを反対はできない。教義を研究してみようとも思うが、出産もない時期、仕事もしていたのでそんなひまなんてない。うわさとは違うという妹を信じるしかなかった。

妹だけならまだよかったのだが、妹が母まで勧誘しているらしいと聞き、これにはよわった。婚家に知られたら都合が悪い。薄氷を踏む思いで、妹と夫が会う時などハラハラのしどろしどろ。

それなのに、私の気も知らないで、妹は堂々と○○○会の寺へ行きたいから送ってほしいと夫にたのんだのであった。夫はピンときたという。

実家では、母が妹かわいさを押しきられて入信。やさしくて自分というものを持たぬ母であ

る。神棚をとっばらい、仏壇の位はいは隔へおしやられ、ご本尊様とやらがまつられた。集会にも顔を出すようになった。

地区では、正月に神主を迎えて行事があるのだが、母はこれにも欠席。父の友人からは、お母さんを説得して行事に参加させてほしいといってくる。

私も里で一人暮らしの母が、地区から孤立するのだけは避けたかった。

夫は、母の所へ行つて、

「老後のめんどうをみてくれと言っておきながら、勝手に宗教をかえるとはどういうことなんだ」と責めたという。

母は何も言わず、ただうなだれているだけだったらしい。さぞ辛かったろう。私が嫁ぎ、母は妹だけを頼みにしていたようだ。

私も婚家に、将来母の老後をみてもらうという約束をしているので、ただでさえ肩身の狭い思いをしているのに、後ろ指をさされるようなことをしてかした妹に困りはててしまった。

しかし、身内だから妹はかわいい。姑や夫からあじぎまに言われると腹が立つのである。

妹に婚家と実家をもめごにまきこんでもらつては困ると言つと、

「私が母のめんどうをみればいいんでしよう」と言う。

また未婚で学生の妹が、簡単に母の老後をみると言う。

この一件以来、婚家と実家はぎくしゃくするようになった。

気持ちの上で溝が出来てしまつて、

「たまには実家に帰つてあげたら」とすすめていた姑が、実家という嫌な顔をするようになり、よく一緒に遊びに行つてた夫までが、

「お前のお母さんは嫌いだ」と足が遠のくようになった。

そのひとことを聞かされた時は、胸にグサリと短刀をつきさされた気持ちであつた。

しかし、不思議と夫への憎しみはわいてこず、私はただただわが身を反省した。私の母に対する態度がまちがっていたのだと気づかされたのだ。

実の娘が困っているような母を夫が好きになるわけがない。私がお母さんと母を大事に思う気持ちがあつたら、夫もこんなことはいわなかったはずであつた。

いつもならすぐに口答えする私が、ただだまつて考え込んでしまったので、夫は、

「言つてはならぬひとことだつた。すまない」

と口にした。

伯母（父の姉）が、夢を見たと言ってきた。夢の中に父が出て来て、

「おれの行く場所が、どこにもなくなったからおいてもらえないか」と言ったという。それを聞いて、偶然とは思いつつも動揺する私だった。

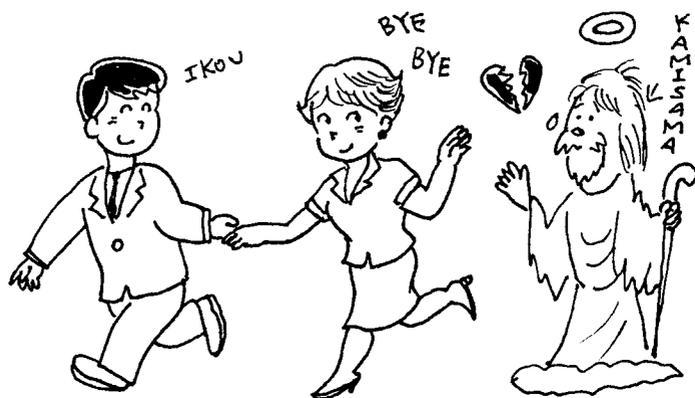
やがて、就職した妹は、あっさり○○○○会をやめると言い出した。何でもつきあいはじめた恋人の家というのが、元○○○会であったが、今は晚会しているというのだ。なんか軽薄な理由のようでアホらしい。現実の幸せのほうが宗教よりもまさっていたということだろう。家族が説得できなかったことを恋人は、いともかんたんにやってのけたのだ。

さて、どうやってやめるかということになり、私は、

「あんたが始めたことだから、あんたが責任もって元に戻してよ」と言った。

いただいたご本尊様を寺へ返さねばということになり、私は母と妹を車に乗せて寺の前までやって来た。

母と妹は、顔を見合わせてなかなか行こうとしない。結局、らちがあかないので、私が行くはめになった。



母が、わずかな金額ではあったが、いくばくかの金を封筒に入れた。

それと一緒に理由を話して、ご本尊様をお返しした。

特にトラブルようなこともなく、あっさりと受け取ってもらえて肩の荷をおろした気持ちだった。

その足で神棚に置く小さなお社を買に行き、からっぽだった棚の上にのせた。すると母が、やっぱり神様はいいなあと言っ

「何言ってるんだ」という気持ち。もともと母は教義なんてどうでもよかったのだ。妹をつなぎとめておきたい一心でしていたのだ。

貧しい人が大金をつぎこむ

現在私は、仕事の関係で、〇〇〇会員が本部宛に送金するのをよく目にする立場にある。一万、二万は、まだ許せるとして、時には百万という大金を送金する人もいるのである。

なんでも、たくさん寄付すると位が上がるのだとか。身なりも決して上等といえない、生活に苦しんでいるような人である。

「あなた達、だまされているんじゃないありませんか？ そのお金をもっと自分自身のために使いな

さい。ずっと幸せになれるですよ」とのどまで出かけているのだが言うわけにはいかない。

ああ、妹がやめていてくれてよかったと思う。

今では妹も、一人暮らしの女からまで金をとるのはまちがってると思う。あの当時は、よかれと思っただけで結局、それがなくても生活に全然支障がないしね」と言っている。

今、大問題のオウム真理教は、あまりにも私の理解を超えていて言葉もない。が、出家信者の子供の身長が、二年間で二センチしか伸びてなかつたりするものがないわけなからう。

自分自身では、いくら信心しようとかまわぬが、団体つくって他人を誘うような宗教はうさんくさい。まして金を集めるようなものは、何か他の魂胆があるに決まっている。

神や仏が金を必要とするわけがないではないか。必要としているのは、教祖とその回りの一部のとりまき連中なのである。純粹に信心し、幸せを求める人々をたぶらかす、こういうやつらが地獄に落ちずに、誰が地獄へ落ちるというのだからう。

宗教とは、どうも団体をつくるとおかしな方向へと行ってしまうものらしい。

(元・小宅昌枝)



忘れ得ぬ人々



バイバイチエリー

千葉市中央区 石川久代 (33歳)

「ヒサヨ見て、これすごいでしょ。ディスカウントじゃないよ!」

成田に向かう車の中で、にわか運転手の私の前にチエリーがひらひらさせる航空券には輝くJALの文字……。なにー、ディスカウントじゃない? 我がダンナがチエリーにチケットを用意したのは知っていたが、ここまでつけあがらせることはないじゃないサ!

「アンタってほんとに憎たらしいね!」

私のとどめの嫌味も根っからのポジティブ・チエリーには通じやしない。フフンと鼻唄まじりでJALの文字にキスをする。

ああ、もうこの運転手役を最後に、チエリーに関わりたくない。フィリピーナなんて二度とご免だあ……。血圧が上がるのと比例してスピードまで上がる私の心境は「トホホー」なのだ。

我がダンナの友人である、アブナイ自由業の男と連れ立って買い物をしてきたチエリーに会ったのは半年ほど前のこと。以前フィリピンパブを経営していたその男は、会う度違うフィリピーナを連れていたので、私は「またいつもの」くらいにしか思わず、簡単な挨拶だけで別れようとした。ところが執拗に私を引き止め、連れていた

我が子にお土産まで持たせる始末。ウラがあるなど読んだ私の予感は見事に的中して、まもなくその男はドロソ。

後に残ったチエリーがアブナイ人間関係の糸をたぐって、我がダンナにヘルプを求めてきてしまったからさあ大変。やっぱりアブナイ自由業の我がダンナだが、根は小心者だから私に隠し通せるはずもなく、このとんでもない尻ぬぐいのお鉢が良妻賢母(??)のこしらにまわってきてしまった。

テレビや小説に出てくるフィリピーナは明るく家族のために健気に働く……なんてバージョンが多いが、ひとくちにフィリピーナといったって千差万別。みんながみんな、かわいい訳じゃない。

チエリーは確かに妬ましいいくらいの

キュッとしたヒップに、抜群のダンスセンスを持っていただけ、お世辞にも綺麗とは言えなかった。けれど、こういう隙のある顔のほうが、男心をそそのめるのだろうか。うっかりダンナに「チェリーってポカンとした顔してるね」と言ったら「純粋な子だぞ」と逆襲され、ギャフンとしてしまったこともある。まあモノは言いようだが、それにしたってチェリーのど肝を抜くほどの開きなおりに、何度も啞然とさせられた。

自分の作った借金は、関係した男達に払ってもらってハッピー。衣食住の手配から国際電話の料金まで、みんな男、男、オトコ……。

しかもその関係とやらが肉体関係ならいざ知らず、友達の友達のみな友達のノリなのだから、私のジョーシキなんかじゃ考えられない。けれど「優しくしてお人好しで、ワイフがこわい日本のダーリン(チェリーのせいふ)」達はホイホイとしかもこっそりとチェリーの世話をしていた、というのだからあきれかえる。小さな国際親善のつもりか、はたまた座敷ブタ女房へのあてつけか、いやドラマのヒーローいで

もなかったつもりなのか。

我がダンナは、その昔ホステスをしてきた理解ある(?)女房の私に「同業、あい助け合う」の精神でも期待したのか、「成田まで送ってやってよ」ときたもんだ。ここで一発ダンナに貸しを作ってとこずるく考えたバチが当たったのか、最後まで



チェリーの憎たらしさに振り回される羽目になってしまった。

「ヒサヨのごはん、一番おいしかった。また食べたいよ」

空港のレストランでミートソースに砂糖

をかけながらチェリーが最後のお愛想を言う。お世辞とわかっていても悪い気はしない。どうだ、十年女房の腕を思い知ったか、サマアミロ。

だけどにっこりチェリーは伝票を持たずに席を立った。はいはい、やっぱり私が払うのね。それにミートソースに砂糖をかけるチェリーの味覚なんて……。バイバイ、チェリー。二度と日本に來ないでよ!

赤ん坊思いのおばあさん

大阪市旭区 宮崎貴子(32歳)

「あのおばあさん、死なはってんで」

帰るなり夫が言った。

「うそ!」

私は思わずそう叫び、その後言葉が出なかった。

「かわいそうに……」

ようやくぼつりとつぶやいた私に夫は、

「しばらく見いひんうちになあ」と、しみじみ言った。

私たちはその老女の名前を知らない。

「あのおばあさん」は、私たちの間ではつまり彼女のことなのだ。

彼女と初めて会ったのは、今から二年半前の冬の終わりのことだった。彼女は背中の赤ん坊をあやししながら、にこにこ笑って歩いていった。私は当時一歳過ぎの息子をベビーカーに乗せていたので、何の気なしに彼女の背中の赤ん坊に目がいった。

「え……」

私はわが目を疑った。何度も目をぼくらくりしてみたけど、どう見たって……お人形だ。私はちょっと不気味になって、そくさとそのおばあさんを追い抜いて、家に向かった。

それから何度も私はそのおばあさんを見かけたが、やっぱりいつも背中に人形を背負っていた。だんだん暖かくなり桜の花が膨らみ始めるころ、おばあさんはねんねこを脱ぎ、人形もセーターからブラウスに衣替えしていた。

「よしよし、いい子だねえ」

そうあやすおばあさんに近所の人とおぼしき女性が声を掛けている。とても自然な感じで、

「どこに行くの？」

と。嬉しそうにおばあさんは答えている。

「今からお風呂行くんよ」

えっ？ 私は最初会った時と同じくらい驚いた。人形とお風呂行くの？信じられない。

「そう、それはいいねえ。ゆっくり温もっておいでね」

人形の頭をなでながらにこにこ笑っている女性の台詞にも、私はぶったまげた。おばあさんといそその女性といい、一体何なんだろう。

しかし何度もそのおばあさんと会ううちに、いつしか最初のような不気味さは私の中からすっかり消えていた。いつも柔和な微笑みを絶やさず、愛情一杯の仕草で背中の人形をあやしているおばあさんに、妙に親しみのようなものを感じ始めた。夫も何度かそのおばあさんを見かけていたらしく、最初は気味悪がっていたが、だんだん私と同じような気持ちになってきたという。

わいふ原稿整理方針

◆投稿誌であるので、「原稿尊重」の方針で整理しています。

◆常用漢字表にない漢字または読みであっても、間違いない限り、原則としてそのまま載せています。ただし次のような語はかな書きに直しています。

又↓また 程↓ほど 位↓くらい 為↓ため 頃↓ころ 丈↓だけ 方↓ほう 様↓よう 御↓ご 迄↓まで 良い↓よい 沢山↓たくさん 中々↓なかなか 答↓はず 更に↓さらに 但し↓ただし 何故↓なぜ e t c.

◆送りがなについては、一応次のような方向で統一しています。

例 変る↓変わる 浮ぶ↓浮かぶ 話合う↓話し合う 気持↓気持ち 行う↓行なう 表す↓表わす

◆用字用語の原則は三省堂発行「用字用語辞典」に準拠しています。



「もしかして戦争かなにかで子供が死んでしまったんかなあ」

「あの人形のこと、本当の赤ん坊と誤るんやろなあ」

私たちは、そんな風に言っていた。

人形は夏になると浴衣、秋になると真っ赤な可愛いトレーナーを着せてもらっていた

た。どうやら以前見た女性だけでなく、近所の人は誰もが本物の赤ん坊を見るように、顔をのぞき込んで、

「あらあら、ごきげんね」

などと話しかけているようだった。私は知らないが、きっとその子にはきちんと名前もあつたことだろう。私の心の中でお

ばあさんは、いつしか赤ん坊思いの可愛いおばあさんになっていた。

たまたま夫の友人が近くに住んでいて、そのおばあさんがアパートで一人暮らしをしていることや、ずっと昔から人形を背負っていることを聞いた。その話を聞き、何だか急に私はそのおばあさんが不憫にさえ思えてきた。あのおばあさんのことを優しい気持ちで見詰められるようになり、好きになっていく自分がいた。

「私も一回あのおばあさんに声かけてみようかなあ」

そう夫に話していた矢先、私たちは隣の区に引っ越しをすることになり、そのおばあさんとも会わなくなってしまった。しかし時々思いだし、何となく気になっていたのだ。

「一人ぼっちで死なはったんかなあ」

そう言った私に夫が、

「二人というか、人形が一緒やったからな。僕らが思うより案外寂しくなかったんかもしれんで」

と言った。夫の言うとおりがかもしれない。きっと、あのおばあさんは一人ぼっちで寂

しく亡くなったんじゃない。最期まで可愛い赤ん坊と一緒にだったんだから。そう思うと少しほっとしたような、それでも私の心の中にはいいような切なきが残った。

今時の若いもんは……

大阪府東大阪市 橋本あゆみ

十五年ほど前、私は父から「今時の若いもんはいったい何を考えとんや……」と言われたことがある。まさか十五年後に、自分自身がその言葉をつぶやくようになるとは思ってもよらなかった。

私は週に二日、眼科医院の受付の仕事をしている。パートとして雇われて三年になる。院長先生の見立てがよいのは評判で、とくに午前中の診察時間にはおおよそ百五十人の患者さん達でこったがえす。受付の仕事はもう一人のパートの人とこなすのだが、カルテの作成、投薬、診察後の精算

と、忙しきでほとんどパニック状態である。

そこへ、四月から高校卒業したてのギャルが正社員として就職してきたのだ。そのギャルは私を恐怖のどん底に陥れた。

まず彼女は自分のことを「マリなあ〜」という。忙しいと患者さんからの質問を無視してしまう。遅刻はする。休憩時間は倍ほど平気でとる。山のように処理しなければならぬカルテがたまっても、ひたすら枝毛のカットに余念がない。

とにかく自分のしたい時にしたいことをする。おまけに面と向かって「マリはがまんするのが大きらい！」ときた。私は胸もとのにぎりこぶしを必死で押さえながらつぶやいた、「今時の若いもんは……」。

けれども彼女が正社員である以上、そして私がこの医院に勤めている限り、ぜったいに彼女と仕事をすることを避けることはできない。このままでは私は彼女を大きいにいなくなってしまふ。そこで私は彼女に、仕事に関してははっきりしてもらいたいこととは言うことにした。

「マリちゃん、このカルテ出して」、「マリちゃん、先生から診察の終わったカルテが

回って来てるよ。処理して」、「マリちゃん、今忙しいから、枝毛のケアは後にして」等々。はじめはキョトンとしていたマリちゃんだが、言われたことは意外と素直に「ハイイ」（この返事も気に入らないが）と言ってやってくれるようになった。私も



まだ仕事に慣れないマリちゃんを、できるだけフォローするように心がけた。それでもこぶしは出そうになるのだが、少しずつ二人の仕事のリズムができてきたように思う。



そういえばこの間、埼玉県の大学病院で口腔外科医をしている義弟が、やっぱり後輩のことを嘆いていた。

「近ごろのインタン生は自分の仕事を勝手に決める。僕はインタンの時、癌とか、めったにない病気の患者さんには頭を下げて診察させてもらった。

それが実際に医者として患者を診る時に、どれほど役に立つか、ひいては人を救えるかわからないと思っただからだ。だけど今のインタン生はそんな病気の患者、診たくありませんと言う。それもはっきり言う。そして五時になったら、どんなに患者が苦しんでも時間ですからと帰ってしまう。僕は彼らが医者という職業をどう理解しているのかわからない」と。

その話を聞いた時、ほんとうに背筋がゾツとするくらい恐かった。人の命を預かる医者になろうという若者が、そんな価値観ではとても医者にかかろうとは思えない。

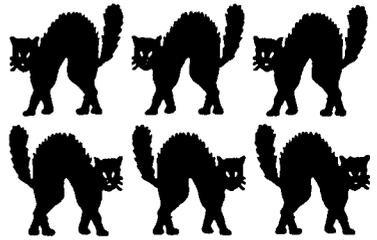
どうしてこういう若者が増えたのだろう。自分のことしか考えない。周りの人達を人間として認めて協力し合うことができない。自分の仕事に対して逃げずに前向き

に立ち向かっていく姿勢がない。私には、やっぱり彼らの親達に問題があったのだと思う。が、そんな子供しか育てられなかった親を作った社会にも責任がないとはいえない。そしてもっと恐いのは、そんな人間が親となり、子供を育てることだ。彼らは自分のことしか考えられない子供を作っていくだろう。

マリちゃんの仕事が始めて二カ月。「うるさいおばはん」と思われているだろうが、少しずつ関係がよくなってきているように思える。それでも時々「カチン」とくるが、マリちゃんもかなりしんぼうしてくれているだろう。仕事以外のことは、私の常識の範囲で絶対に許せないこと以外は何も言わないことにしている。

これから共に働くなかで、私はマリちゃんに少しでも人と協力することや、前向きに仕事をしていくことをわかってほしい。そうなればマリちゃんは、きっとまたちがった人生の喜びやおもしろさに気づいてくれると思う。そして、マリちゃんが、だんだんと魅力的な女性になっていくのを私は楽しみにしている。

サーブ



レシーブ

“わいふ”への 言いたい放題

東京都新宿区 林 直美

私にとって最近の“わいふ”はどうでも
いい存在になっている。これは「新生わい
ふ」が私の期待するところと少しずれてき
ているからだと思う。

私が“わいふ”を知ったのは、NHKの
「すくすく赤ちゃん」という番組だった。
子育てのストレスを何とかしたい、ただそ

れだけの思いで、即電話をかけた。一冊目
を取りよせ、初めのは届くのを待って
読みふけた。書くこともしなかったので
その時の思いを文にして投稿もした。自分
の原稿の可否ももちろんだったが、何より
私と同じように育児に悩む投稿を読んで、
救われたことが多かった。育児関係でなく
とも、本音をつづった投稿文はおもしろ
かったし、また自分自身の勉強にもなった。
現在の私も、相変わらず子育てが一番に
なる。しかし、最近の“わいふ”は、性の
問題や戦後記念、震災特集など、“わいふ”
の中で世界が広がっていると感ずる。それ

はそれでいいことだとは思うのだ。多くの
読者それぞれの要望もあるだろう。ただ、
私としてはそれらはどこでも読めるもの
で、“わいふ”においては不満に思っ
てしまふ。

私の投稿文は思う以上に採用されて、結
構喜んでいた。だが、読み続けていくうち
に、これはたまたま私の文が、編集部的好
みにあったからだという気がしてならない。
文章のうまくならない私に、やつあたりさ
れる編集部もたまったものではないが、私
も意識してしまふのだ。「私の投稿文は息
子への思いが強く出た文でないと採用され

ない」というジンクスが自分の中にできてしまった。ネタ切れもあって私は焦っている。焦るといいものが書けるはずがない。このところ、ボツになっている大きな理由である。

かつて、夫がまるで長男のようであると、誰にも言えない夫への不満を投稿したことがある。ボツになった。このボツだけは本当にがっかりしたのだ。私はうまく書けたと思っただけ。しかし、夫を馬鹿にしていると見られたかもしれない。やはり建前が



あるんだなとちらっと思った。採用されるためには、「わいふ」傾向と対策」が必要だという気がした。

何となく腐った気分でするずる読むのは、編集部に対して申し訳ない気がして、今の気持ちをすっきりさせたかった。それだけだ。私には私の考えがある。「わいふ」には「わいふ」の考えや方針がある。考えはきっかけがあれば、どんどん変わっていくはずである。今後の「わいふ」に期待している。

ところで「わいふ」に一つ質問があります。長編もすべて投稿文なのでしょうか。依頼して書いてもらったというような文はないのでしょうか。内容や文章の上手下手は別にして、私には長編の登場がどこかできずきた気がして、気にいらななのです。

編集部より

長編はしばしば持ち込まれます。投稿規定にある「特別寄稿」です。

連載中の「シベリアの青春」は、自費出版希望のものでしたが、大変よかったです。お願いして載せさせていただきました。

これまで長編を依頼したことはありませんでした。が、短いものの場合、何かの機会にご本人のお話を聞き、おもしろそうだから書いてみてくださいということ、投稿していただいたものがときどきありました(書いてもらったのにボツになったものもある)。

「わいふ」の選考基準ですが「人生の真実に触れるもの」ということです。しかし真実の幅は非常に広いです。できるだけ幅を広げた上で、悲劇も喜劇も、平凡な日常生活も、とり上げていきたいと考えています。

二五四号「或る母親の死(遁世)」を読んで

京都市伏見区 飯塚真里 (31歳)

「或る母親の死(遁世)」の主人公、倭文子さんを子どもの立場から見ると、柴田さんとは違う印象をもちました。

柴田さんは倭文子さんが、気の毒で彼女の結婚って一体、何だったのかと書いておられますが、私は息子の光二さんがかわいそうで、真の被害者のように感じました。

たしかに倭文子さんは努力家で常に前向き、りっぱな方なのですが、子育てにおいて、この信条が裏目に出たと思えます。倭文子さんは光二さんが勉強に興味を示さず、テレビばかりみている彼に「勉強しなさい」とうるさく言うばかりでした。彼が勉強以外に何に興味をもっているのだろうか、何か得意のものはないのだろうか、など知ろうともせずに……。

きっと、光二さんは倭文子さんと違って勉強のおもしろさに気づいていなかっただ

けだったかもしれないし、やろうと思っても「勉強しなさい」の一言でやる気もなくしてしまっていたのかもしれない。

自分の考える信条が正しいと信じて疑わず、息子に強制することしかできなかった倭文子さん。思い通りいかない息子を見放し仕事に逃げこんだ。そして息子はだんだんと非行に走り、ついには手のつけようがなくなつた。倭文子さんの後半の半生は警察に呼び出されたり、息子の悪行に悩み、苦しみました。

厳しいものいいですが、これも倭文子さんがご自分でまいた種がこのような結果になつたと思います。小学生の光二さんにもっとちがう接し方をしていれば、光二さんの人生も変わっていたでしょう。

なぜ、こんなにも光二さんの肩をもつかといえますと、かつて私も「勉強しなさい。ピアノの練習をしなさい」とさんざん言われたからです。私の母親は自分の価値観、かなえられなかつた自分の夢を押しつけるだけでした。大人になつた今でも母親の仕打ちを思い出しては、怒りがこみ上げるときがあります。それだけに子どもとき

わいふ文章講座のおすすめ

公民館、女性センター、社会教育課などのご依頼で、しばしば「わいふ文章講座」を開いています。

編集長田中、副編集長和田、わいふから巣立ったライター達を講師とし、五回から十回までのコースがあります。東京から遠いところ(大阪、新潟など)になると、田中か和田が一人で行って一回だけの講座ですが、初めて書く人にも分かるように、原稿用紙の使い方から自分史、インタビュー記事などのまとめ方までご説明しています。

お住まいの地域で開きたい方は、お電話をください。資料をさし上げますので、それを持って公民館、教育委員会の社会教育課などに開講を頼んでみてください。引き受けてくれるところも多いと思います。

に受けた傷は、根強く深いものだと思います。

生意気なことを書きましたが、私の子どもはまだ思春期には遠く（六歳と三歳）本当の意味での母親の苦勞を味わっていない未熟者です。今は、なるべく子どもいいところを見つけていこうと努力しています。

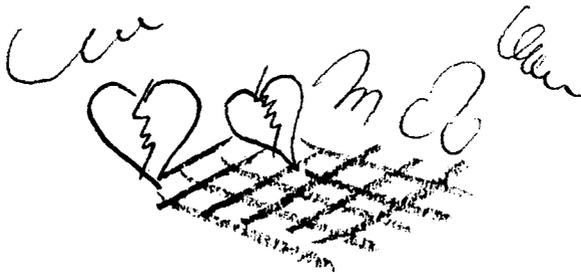
大人になった光二さんはまだ立ち直れていないようですが、一日も早く傷がいやされることを願っています。

今の生活にも 満足しているけれど

匿名

二五四号の井川さんの「ぜいたくな悩み」を興味深く読ませてもらった。なぜなら私も同じような悩みを抱えているから。

最近、井川さんや私のように、とりあえ



ず「目の前にいる相手（つまり配偶者のことである）に欲情しない」人が増えているらしい。

それが俗に言う「セックスストレス」というものの一現象と知った時はちょっと落ち込んでしまった。こんな風に感じたのはここ二年くらいのことだと思う。育児で疲れるからだろうなんて考えていたのだが、どうも違うかと気付いた時には「セックススレスタ」にすっかりはまっていたようだ。ショックだった。

あんなに大好きで結婚して、一緒にいるだけで幸せだったのになぜ？ 今でも私たちは自他共に認める仲のよい夫婦だし、もちろん夫のことは好きだし、今の生活にも充分満足している。なのにどうも体がついていかないのだ。私なりに出した答えは飽きたということだった。

井川さんと私は本当に似ている。「自分が一番大切やからや」「自分の都合を優先させている」という部分など、まるで私のことを言い当てられているようで耳が痛い。

ただ一つ違うのは、私がかたまたま他の人

とセックスする機会を持ってしまったことだ。つまり、試してみたのだ。井川さんは他の男性とならうまくいくかもしれないと心の中でだけ思われたようだが、私はそれを実際の行動に移したのだ。

相手は幸か不幸かずっと私のことを思っ



てくれていたし、結構私の好みのタイプだったの（四歳も年下のしかも三高ということも見逃せなかった。どうせなら素敵な人が相手のほうがいいに決まってる！）いい雰囲気だったはずだ。

が、結果を言うとなつまらなかった。不倫

という後ろめたさのせいか、好きで好きでたまらなくなってそう言ったと言いたいせいか、ともかく私自身味気なさだけが残った。夫とのセックスを解消する糸口を見つけたという下心があったからか、終わってみれば、「こんなこともうやめよう」という気持ちだった。

相手の男性にもそして自分自身の心にも無責任ないぐさだとは思うのだが。かと言って、急に夫とのセックスが充実したものになったわけではない。以前とちっとも変わらないのである。

セックスレスでも生きていけるだろうけど、やっぱりセックスアリのほうが楽しいに違いない。この問題って今までタブー視されていたようなところがあるが、実はとても深刻な重大な問題だと思っ。

私も未だ解決できないまま、手探り状態で悩んでいる。ただ、こうして悩んでいるうちはマシだと思っことにしている。なんとかしよう、なんとかしたい、と思わなくなってしまうたら、一歩も先に進めないはずだから。

同じような悩みを抱えている人に、「ほ

んとうにこのままでいいの？ セックスレスと夫婦の関係」（橋由子著 大和出版）をぜひお薦めします。

マンネリセックスのあなたへ

北海道旭川市 香山なおみ（33歳）

二五四号の井川さんへ。

突然ですが、イメージトレーニングをお勧めします。夫以外の男性と、思いっきりセックスするのはいい。想像の世界で。相手は誰でもいい。実在でも架空でも、テレビの中の有名人でも昔のボーイフレンドでも。台所に立ちながら、子どもと散歩しながら、日夜トレーニングに励むのです。そしていざ、夫との本番。静かに目を閉じ、想像の世界に身を投じてください。ああ、この腕はあの人の腕、この唇はあの人の……。

根本的な解決とは言えません。逃避しただけです。正攻法だけが解決策でしょうか。正面切ってぶつかれば、半年か一年か、もっとかかるかもしれませんが。その間、夫は待ってくれますか。

夫への裏切りだとか、昼間から卑猥な妄想に取りつかれるなんてとか、非難もあるでしょう。でも、きれいごとで済む悩みではないですよ。

現実から目をそらし、人に言えないような恥ずかしい逃げ道に走る。それでも取りあえず何とかなるならいいじゃないですか。がっぷり四つに組むには重すぎる問題です。楽観的に、時間が解決してくれるのを期待してみませんか。

この方法なしには夫とセックスできない私に比べれば、あなたははずっと軽症ですね。

夫が嫌いなわけではないが、夫とのセックスは嫌でしょうがない。第二子が欲しいというだけの理由で応じている。そんな心境を、わいふ、二五三号に掲載していただきました。今も同じ状況です。

交際五年、結婚八年。あなたとほぼ同じ

★わいふバックナンバー

- 241号 こうして夫を変えました
- 242号 私のマスコミ体験
- 243号 特集ナシ
- 245号 病気とのつきあい
- 247号 三十五歳はトシなのか？
- 248号 ウまい話にだまされた
- 249号 夫の職業と妻の生活
- 250号 女の友情
- 251号 集合住宅での子育て
- 252号 うちの子のおばあさん・おじいさん
- 253号 阪神大震災
- 254号 きょうだいとは他人のはじまり

老人ホーム／お金と介護 一〇〇〇円

核家族のための

子育てガイドブック 三〇〇円

変わる主婦・

変わらない主婦

一五〇〇円

お申し込みは電話でどうぞ。
☎〇三―三二六〇―四七七―

です。結局のところ、飽きてきたのではないでしょう。加えて、やっと幼児から解放される夜は、性欲より睡眠を満たしたい。義理で応じる時の、夫と自分、両方への嫌悪感が悪循環を作ります。



ではありませんか。本やワープロをやめたとしても、気持ちに戻るわけではないでしょう。

空想に浸り、夫を別人に見立てるなんて、風俗営業のコスチュームプレイのよう

覧になるかどうかは疑問ですが。

ひとつくちに性の話と言っても、下品なたわごと（この文章のこと？）から井川さんの真摯な悩みまで、千差万別です。「わいふ」の読者なら、それらを読み分けてくださるものと信じています。

だから、また書くかもしれませんが。性生活も、育児も、老親の介護も、みな対等に語られるべき価値があると思っていますから。

私の「女子学生会館物語」

神奈川県平塚市 中野 薫

二五四号香山なおみさんの「女子学生会館物語」はとてもおもしろく読ませていただきました。

というのも私自身も、学生会館で二年ほど生活したからです。私が入ったのは、横浜の郊外にある女子学生会館。総勢二十人

あなたの夫君の反論「あなたが自分の都合を優先しているから」は、本末転倒だと思いません。本を読んだりワープロを打ったりするのが楽しくて夫をないがしろにしているわけじゃない。夫への性欲が減退したころ、たまたまそれらに興味がいいた、の

ですが、こんな低俗な方法でも私は救われています。もしよろしければお試しください。

最後に「わいふ」で性の話を読みたくないうとおっしゃる方へ（以前そういう投稿が何度ありましたね。その方達がこれをこ

ほどのごちんまりしたところで、建物も築十年は経つ古いものでした。その小さい分、あつというまに全員の顔と名前を憶えることができ大家族の雰囲気になりました。逆にいえば、この親密さは裏目に出ることにもなり、けんかなどは日常茶飯事でした。

一年後、ここも経営難だったのでしようか、急に男子寮になることが決まり、近くへ移ることになりましたが、新しい会館でも一年ほど過こし、大学三年時に会館で親しくなった友人と部屋を借りることにして退館しました。

私の場合、この二年はいい思い出です。何といっても様々な（個性を持つ？）友人と知りあえたことが収穫だからです。某有名大学生が夕食時に一生懸命好きなおかずだけをよそうのに大笑いしたり、一見派手な化粧をして近寄りたがたい子が、実は会館の悩み相談室長みたいな人だったり、六本木で歌手デビューを目指す子や、デートでいつも門限破りをする子のために、在室の札をかかえている子などなど、一人一人を今だに思い出せるほどいろんな子

がいました。

もし、一人暮らしをしていたら、それなりにたくましさは身についたと思うのですが、ここまで人間関係を豊かにはできなかっただろうなあと思っっています。今となっては、毎日何かしら「事件」に巻き込まれていたあの日々が懐しくさえあります。

悔いのない人生を

東京都町田市 神戸利枝（34歳）

二三四号の特集「きょうだいは他人のはじまり」を読んで、ひとりっ子の私としては、とても羨ましいと思うと同時に、きょうだいに対して本当にたくさんの想いがあつたんだなあ感慨深かった。確かにきょうだいは、同じ親から生まれ、血はつながっている。だからといって考え、受け止め方まで理解できうる存在ではないのだ。

私の友達には、きょうだいのいる人が多いい。小さいころ、間近できょうだいゲンカも見た。その時、羨ましいというよりうとうしい存在なんだと思った。私はひとりっ子でよかったと実感していた。

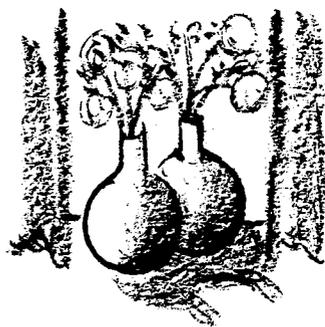
最近では、私の母が弟と、親の遺産の相続問題でもめているのを見ると、とてもつらく悲しくなる。

「どうして、血のつながったきょうだいなのに」

やはり他人のはじまり……なのだ。でももしかすると、他人なのだと考えてしまえば、腹の立つ事も抑えられ、あきらめもつき、優しくできるのかもしれない。

そんな事を考えながら、特集の投稿を読み終わると、なぜか淋しい気持ちになってしまった。私の頭の中には、きょうだいというやはり苦しみも悲しみも、そして喜びも誰よりも一番理解してくれる身近な人間ではないかと思っっているところがある。

それが、あのような様々な思いが交差するとは、やっぱり考えられなかった。きょうだいでも、異性同士や同性同士でもそのかわり方、そして何よりもそのきょうだ



いの親のかかわり方で違ってくるようにも
思える。

今、私にも同性のきょうだいの子供が
いる。まだまだ小さいけれど、ひとりっ子
だった私は、その子たちに日頃より時を見
ては話す事がある。それは、
「ママには、きょうだいがないんだよ。
あなたたちは幸せなのよ。そして、いつか
は親が先に天国へ行くの。そうするとこの

世にはあなたたち二人が、残るの。だから
お互いに思いやりを持って、いざという時
たすけ合って生きていくのよ」

そんな事今言っても、よくは理解しても
られないだろうけど、私の愛情をかけた
きょうだいたちが、人として悔いのない人
生を送ってほしいと願わずにはいられな
い。

「わいふ」『本音の本』

パプアニューギニア・ポートモレスビー市
岸田麗子

二五一号「わいふ」誌面について、大庭
さんの文章のなかに「特別な経験をしたこ
とのある素人だけの本」と「わいふ」の事
を書いていらしたが、私は、「本音の本」
「特別な経験をしなくて参加できる本」
だという思いは変わらない。

どうして「わいふ」を読みたいのか。

「わいふ」に投稿したいのか。今の私の場
合を書いてみる。

世の中には「いい事」や「悪い事」の基
準が存在している。その基準は、人や時代
や場所といったものに左右される。とても
あやふやなもので、本来は、あまり信頼で
きるものではない。

しかし、私たちは、その基準に惑わされ
る。「わいふ」には、基準がない。あるの
は「本当の事」「事実」だけだ。

だから私は、どんな事でも素直な気持ち
で読んでいられる。生きるヒントになる。

レイプという事を、私は体験したことは
ないが、淡々と書かれてある文章を読む
と、「世の中にはそんな事もあるんだ」と
きっちり認識できる。「うしろさうだ」
という興味本位のものや、「そういうこと
はいけないこと」という安っぽい道徳論の
ものとは違う。「特別な経験を——」とは
言い切れない。

また、「わいふ」では、「うんうん、あな
たと同じ」という感想によく出会う。自分
のまわりの人には受け入れてもらえなくて
も、「なんだ。私と同じような人、たく

さんいるじゃない」「こんな感じ方でも悪くないよね」と勇気が湧いてくる。

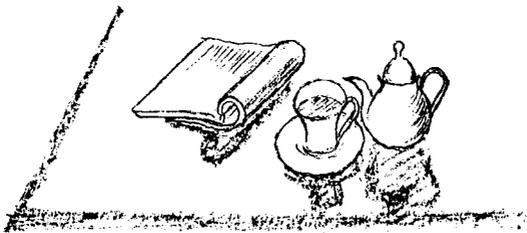
勇気が湧いてきたからといって、大きな声で他の人に言う必要はないが、少し自信が持て、落ちついて日々の暮らしができる。

「書く」という事は、あやふやな自分の意見や気持ちを整理される。人に読まれるという意識が、考えを深くする。自分を客観的に見ることが出来る。

事実を書いていくのだから、いい人ばかりはやっていられない。逆も真だ。そうすると、「へエー。こんな所あったんだ、結構私にもいい所あるじゃない」とか、「まるで鬼ババアだ、あたしゃ」などと、自分の姿がはつきりと浮かんでくる。

ああだ、こうだと人を批判したり、うわさ話なんかしていらなくなる。自分の行動を変えようということにもなる。他人のせいになくなり、潔さが出てくる。

また、本音を書いているのだから、きっと誰かの力になっているのだろう。何かで苦しんでいる人におせっかいな押し付けの慰めはいらない。真に苦しんだ人の「本



当に、辛くて、苦しいよね」という事実だけが、力になり得る。

主婦だの、日本人だの、お母さんだの、妻だの、特別な経験を持つ人だの、素人だのと、何かでくくられる事に、あきあきしてしまった私にとって、「わいふ」は、「私」がべちゃくちゃとおしゃべりすることのできる楽しい場所だ。

どの人も「特別な」経験を持っている。だから、どんどん書けばいい。そんなふう
に思っただけど。

三歳児神話は根拠なき「免罪符」

千葉県船橋市 比嘉ユカリ

動物と違い人が素晴らしいのは、生まれて三年の間に体のみならず、心と知性の基礎的部分が育つと言うことです。鈴木さんの言う「すりこみ」は、生まれたばかりの



動物が、生存していくための習性で、それを人の子どもに置き換えて言うのはあまりに乱暴です。

人間はそんなに単純な動物ではありません。幼い人は、自分を守り、要求をのみ、愛情を持って心通わせてくれる存在を求めます。そしてその存在と、愛情に満ちた時を重ねることで、情緒が安定し心が育って

いくのです。子どもの心の拠り所となる存在は多くの場合親ですが、どんな時でも親でなければならぬ、ということはありません。

親と保育者が互いに理解し合い、愛情を持って育児をする場合、たとえ1歳であっても親以外の人も心の絆を築いてゆけますし、環境に適応して健やかに成長していきます。

無論、親は子にとって一番の存在ですが、それは単純に接する時間の長さで計れるものではありません。接する時間の多さだけで自分の責任を果たしたと思うなら、それほど独善的で甘えた考えはないと思います。

三歳児神話の「期間」に対する考え方にしても、子どもの成長が期間で区切れるものでしょうか。そういう見方は、子育てを大人の側からしか考えていないことを象徴しています。第一、私は子どもへの愛情を「期間限定」にしたいとは思いません。

私は信念を持って仕事をする一方、子どもの心に寄り添い、子どもと共に日々自分も成長していきたいと考えています。私は妻であり母であり一人の人間です。人とし

て自己実現していくことは、むしろ健全な親子関係を築くのに必要だと考えています。「私は自分を犠牲にしてあなたを育ててきたのよ」などと思ひ、その報酬を「将来のよい子」として子に求めるとしたら、そんなおぞましい事はありません。

私には、三歳児神話は決して「根拠」などではなく、親としての有り方を問われた時の「免罪符」であるように思われます。

結木美砂江さん

新潟県中蒲原郡 小林智枝

「わいふが二五四号の「編集だより」で結木さんの訃報を知り、私はあつと息をのんだ。

ああ何という無情！

結木さんが書かれた連載「みんな悩んでママになる」は、痛快なヒットだった。あれほど自分に正直に、本音をぶちまけて書

けることが不思議で、興味深かった。

ガン闘病記の連載も、結木さんらしく生々しいもので、心の動きが手に取るように描かれていた。

結木さんは、本音を信条とする「わいふ」のひとつの時代を築いた人ではないだろうが。

「わいふ」紙面からしか、結木さんのことを知る機会がなかったが、心に残っている言葉がある。「自分は選ばれた人間だと思っていたのに、その自分がどうしてガンになったのだろう」と。選ばれた人間と考える人がいるということ、それを率直に吐露することに、私はたじろぎさえ感じ

た。
結木さんのの人生を、面白い恋愛小説を読むようだと言われた（と書かれていた）最愛のご主人と、息子さんたちの悲しみを思うにつけ、お伝えしたい。大勢の「わいふ」読者の心の中にも、結木さんは大輪のバラの花のように、真っ赤にさんさんと輝いているのです。

不謹慎だと吐られるでしょうが、結木さんが病氣と闘い、誰も知らないところへ旅

立たれたときの道程や、死後の世界を、あの生き生きとした文章で伝えて欲しいと切に思う。叶わぬことと知りながら、それは結木さんの名文しか考えられないからだ。結木さんには、やすらかに眠りくださいという言葉は似合わない。天国で、結木さんらしく生き生きと輝いて欲しい。「わいふ」で知ってから、私はずっと結木さんのことを考えている……。

「サーブレシーブ」も楽しみです

大阪府東大阪市 西尾ありか（31歳）

「わいふ」への投稿がポツになると、誰だって面白くないに決まってる。ポツになったとわかった瞬間、私の中で「わいふ」は「わいふ」でなくなり、他の雑誌と同化してしまふ。

ところが、自分の投稿がポツになっても

楽しめる欄があった。「サーブレシーブ」だ。

今回はポツでも前回の私の投稿を読んでも「西尾さんと同感」などご指名で頂くと、結構うれしかったりする。

「ああ、ちゃんと読んで、何かを感じて下さってる方がいるんだなあ」

と思うと、気持ちに張りが出るし、もっと人の心に響くものを書きたいと思う。

もちろん賛成意見ばかりではないだろう。「ちょっとそれは違うんじゃない？」って声も、そのうちきくとあるに違いない。それでも人の心に何かを訴えたり、問題提起できれば、何も反応がないよりはるかにうれしい。日記でないかぎり、やはり誰かの目にとまり心に食いつきたいと思う。

人はその人のそれぞれの立場によって、考え方も関心のあり方も違う。仕事をもつ人とそうでない人、子供のいる人いない人、年齢によっても変わってくる。

自分の書いたものをどんな立場の方が読み、その立場によって感じ方がどう違うのか。他の投稿も含めて、とりわけ年齢だけでも知りたいなと思う。

戦

後

50

年

記

念

連

載

3

私

英語

横浜市港北区

酒井智恵子

数の多さは、靴や洋服にとどまらない。バスタオルひとつとっても大小様々なパステルカラーのタオルが棚につまっているのだ。

奥様は薄着だった。真夏などは胸のかなりあいたサンドレスを着ては、ご主人のジープに乗って街中を疾走した。腕丸出しの洋服など当時の日本人は着ない。母などは他人には地肌を見せたことがなかったから、マダムのもう敢さに度胆をぬかれた。

そのころの日本の既婚女性はどちら

かと言うと黒っぽいものやイカの煮汁のような色を着ることが多かった。

台所も一遍ににぎやかになった。そこには花柄の鍋が光っている。当時、薪炭で煮炊きをしている我が家の鍋は煤で真っ黒けだったから、ここの鍋はまるで飾り物みたいに見えた。

しかし、感心出来ない物がひとつだけあった。それは薄っぺらで小さなチョッピングボードと呼ぶまないただった。黒くても我が家のほうがどっしりとして立派だった。これだけは褒

められない。どうしてだろうと思った謎はすぐ解けた。包丁の代わりにはさみを使うからだだった。

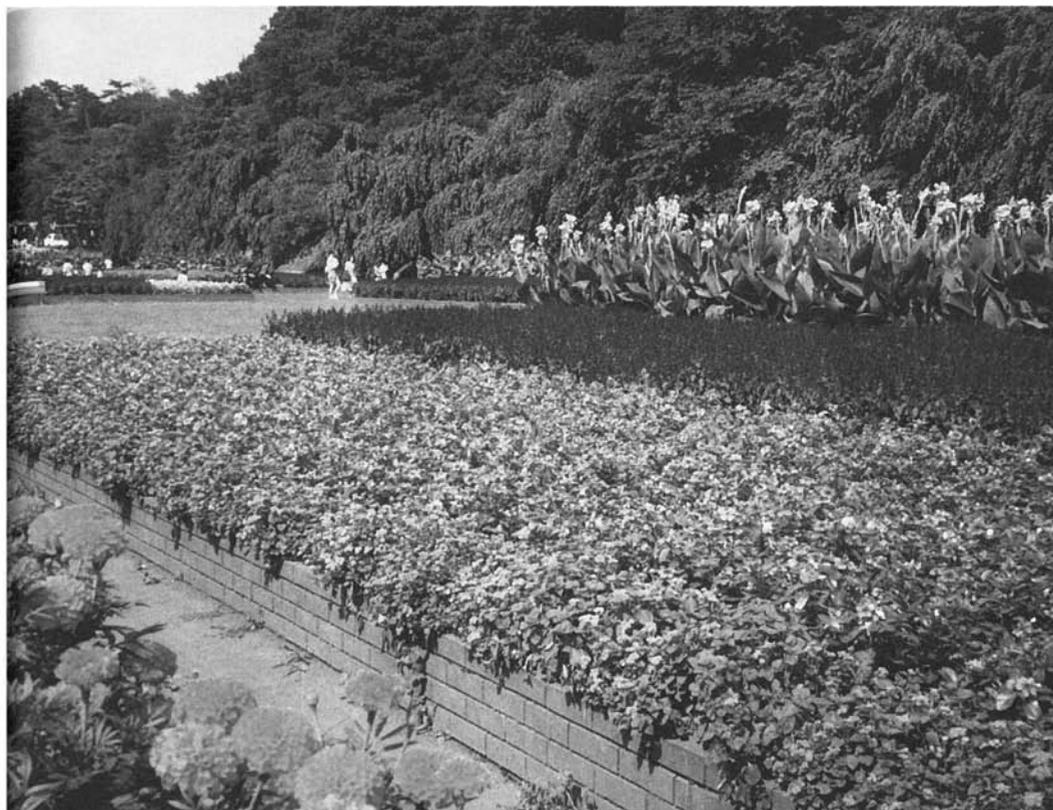
台所用品がそろったことから、本格的に料理を作ることになった。

それまでは昼になると、ご主人様が勤務先から一旦帰宅し、お二人で腕を組んで近くにある将校用メスホールに出かけていた。私はと言えば、片道二十分はかかるご主人の職場に昼食をとりに行かされていた。

第八米軍通信学校の基地内食堂で



母の一張羅の着物（お召し）を姉と二人で半分にして自分で作った一着。衿の分がないので白い布で衿を作った。袖丈どうしても長袖に仕立てられず七分袖でゴムを入れて工夫したなつかしの服



田奈部隊のあった所。今は横浜市の「こどもの国」

は、日本人従業員に昼食が出ていた。と言うと聞こえがいいが、実際にはアメリカ人が終わったあとの残り物が日本人にあてがわれるのだった。

GIがすむのを待って、日本人が四角いアルミのトレーを手にカウンターの前に並ぶ。レディファーストのお国なので女性が先になる。

一番先に並ぶのが斉藤さんなど年上の方。次は若い女性。一番若い私はいつもしんがり。私の後は男性、通訳や翻訳などをする重要な人が先頭になる。最後は若い男性である。

早い者勝ちの原則がまかり通るので、遠くから「あのソーセージ食べたいな」と眺めているうちに、誰かのトレーにのってしまふ。

それでも私は男の人たちよりもよかった。気の毒なのは列の最後になる若い男性だった。終わりの男の子のトレイには目ぼしいおかずもなく、スープとパンだけがのっていた。私たちのにぎやかなトレイを横目で見て「チェッ」と舌打ちしながら、離れて

座った。

言うなればお余りだから文句は言える義理ではないが、それでもパン一枚でも喜んで食べなくてはならない食糧事情であったのである。

ペシアック少佐宅で昼食を頂くようになってから後のメスホール風景はどう変わったか知らない。当時の食糧不足は「情けない」の一言につきた。

そのころ食べ物不足から痛ましい事件が起こった。それは後に小平事件と呼ばれた。

食糧の買い出しをエサに小平義雄という男が甘い言葉で若い女性に声をかけ、揚げ句の果てに、強姦し絞殺してしまった事件である。

驚いたことに、私がいつも母のおともで買い物に行った六角橋市場内の青果商の娘で、色の浅黒いお姉さん（中村光子さん）が毒牙にかかった一人だったことだった（小平は死刑の判決を受け、昭和二十四年（一九四九年）十月に処刑）。

食糧不足時代ならではの性的犯罪

で、女性たちを戦慄させた。

このころの主食の遅配は十五日に及んでいる。

カルチャーシヨック

全くの予備知識もないままにアメリカ人家庭に「ボン」と飛びこんだ私は、ずいぶん戸惑うことが多かった。私の苦勞よりも、無知な私を雇うご夫妻のほうが苦勞なさったことだろう。

言葉ひとつ取っても（例えばイエス、ノウ）日本のそれとは違う。

自分の意志ははっきりと示さなくてはいけない。日本人流の気恥ずかしさや遠慮なんて通用しない。言葉が通じないからと、ついついにやにやしてしまいがちだが、その手は気味悪がられてしまう。

私は一回、遠慮しすぎて失敗したことがある。奥様に残ったパンはすぐ持ち帰るように言われていた。

しかし、すぐでは悪いと遠慮した私は、次の新しいパンがきてもそのままにしていた。

奥様は「オー。マイグズネス」と言ったかと思うとタバコの吸殻も入っているトラッシュユ・キャン（ゴミ箱）につっこんでしまった。

「アッ」と思ったがもう遅い。ぴしゃんとふたは閉められ、奥様は「要らぬいでしょ」といいたげにつんとして奥へ行ってしまった。

言い訳を言いたくても言葉が出ない。日本人の目は口ほどに……とか、以心伝心なんて分かって欲しいと思うほうが愚かなのだ。

汲取り式のご不浄に代わって、さつと流れる水洗トイレの快適さ。落とし紙だって引っぱれば面白いようにカラカラと出でくる。

家ではちりめんじわのよった黒チリ紙を使っていた。まだ多くの家では新聞紙を手でもんで柔らかくして使った。

用足し中にトイレで使う新聞の尋ね人欄から、戦後外地から帰った人の消息が判明したという、知人からの話もきいた。

トイレと言えは、勤労働員で行って
いた、田奈（現在の横浜市にある「こ
どもの国」）の火薬工場のそれは原始
的だった。

地面に掘った穴の上に人が乗る二枚
の板があるだけ。時には、恐ろしいこ
とに中身がつもってとんがり、その先
端が板ずれすれになりそうになっている。
簡単な板囲いはあるものの、肝心の
ドアは人がちよっと寄りかかったり、
強い風でドアがひっぱられると開く代
物で安心ならない。仕方がないので用
足し中は、友だちと代わりばんこで押
さえあった。

鼻をかむのもティッシュという軟ら
かい紙を使っている。鼻紙もろくにな
い当時は、ハンカチで鼻をかんで、そ
れを洗濯しては使っていた。

生理用にナプキンもあってうらやま
しかった。女学校卒業と同じくらいに
生理を迎えた私は、耳学問はあったも
のの、手当に慣れなくて大変だった。
生理用のナプキンだってないし、脱脂
綿だって簡単に手に入らない。

手当には、さんざん洗ってラシャみ
たいに目のつまった毛糸のセーターを
カット綿ほどに切り、それを当て、吸
いこませた。

取り替えたそれは、家人のいない留
守にこっそり洗い、生け垣のマサキの
間に人目に付かぬように干し、翌月再
び使用した。これがずっと続くのかと
思うと、うんざりするのだった。

キッチンには身の丈ほどの白いリフ
リジレーター（電気冷蔵庫）がある。
驚くことにそこで水が出来るのだった。

私の抱く水のイメージは、自然の中
で張る水か、水屋の岩のような水しか
ない。夏、西瓜を冷やすために使うか、
発熱したとき頭を冷やすのに使うだけ。

水屋は求めにに応じて、大きなこぎ
りでじょりじょりと一貫目（約四キ
ロ）単位に切り分けてくれた。そんな
イメージしかない水がここでは庫内で
出来るのである。私にはまるで魔法使
いでもいるとしか思えなかった。

現在では日本人の食生活の中にしっ
かり根付いたコカ・コーラも、この冷

蔵庫の中で初めて出会った。

ある暑い日に私がフウフウ言いなが
ら、ご主人の勤務先の食堂で昼食を終
え帰ってくると、「暑かったでしょう」
と言いながら奥様が栓を抜いてくれた。
ゴクリと飲むとさわやかな味が口一杯
に広がった。以来、私は「コーク」と
呼ぶそれを好きになった。

ペシアックご夫妻は週に一回、軍隊
の酒保カムセリーに食料の買い出しに
行った。

ありとあらゆる食べ物をまとめ買い
にして、冷蔵庫に入れた。

わが家ではその日、その日の食べ物
を、母が毎日買いに行っていたから、
大量買いこみという方法を知ったのも
この時が最初であった。

洗濯物を干す時は、庭にロープを張
り、万国旗をはためかすように干した。
そのころの日本の家では、庭に二本柱
を立て竹竿を渡して、衣類をかみしも
のように竿に通して上段と下段に干し
ていたから、なにかも珍らしかった。
ペシアック夫妻にはお子さんがいな



米第八軍輸送司令部（日本郵船ビル）の屋上で。20歳の私

い。
隣家では一歳くらいの子がいた。その様子をかいま見ていると、子どもを一人、ベビーベッドに入れて外出しているようだった。日本人のメイドはいるものの、よくベッドで泣き叫んでいた。

お母さんにいつもおんぶしてもらって外出する日本の赤ちゃんを見ているだけに、なんだか可哀相な気がした。

アルバイト

私はこの家でアルバイトまでした。自分から見つけたわけではない。私

がいつも手作りの服を着ていることに目をつけた奥様が、近くに住むミセスを連れてきて、簡単な服を縫ってほしいと言ったのがきっかけだった。

働き口は見つかったものの、私には着て行く洋服がない。仕方がないので自分で作るしかなく、洋裁塾へは夜通って服を縫っていた。

同じように勤め出した姉も着る物がない。そのころポツポツヤミ市に出回り始めた生地は、庶民の買える値段ではない。

背広三つ揃いで五千円もする時代であった。背広を買いたければ何カ月も飲まず食わずでいなければならない。着る物に困っているのを見た母は、箆笥の中から大事にしていた一着のお召し（絹の着物）を出してきて、二人で分けて洋服にするようにと言ってくれた。この着物は、防空壕が長雨で水浸しになって、中に入れていた着物がだめになった時にも、食糧との物々交換から、運よく免れた一張羅だった。きつと、これだけにとって置きた

いとしてしまっていたのだろう。スパッと二つに分ける時は、さすがに申し訳なかった。

父のどてらもほどき、紺色の裏地は夏のワンピースに。

この外に、母が木綿がなくなるとのうわさに、唯一買いだめしていた父の木綿のふんどし（未使用）も、白のブラウスに変わった。

着物地もふんどしも幅が狭いため、そのままでは前身頃も後身頃もとれないので、脇で目立たぬように接いだ。

必要に迫られて作る手作りの服が、針をたどたどしくしか使えない（使う必要がなかったのだろう）奥様の目には、器用な女の子に映ったらしい。

洋服の仕立てを頼まれたといっても、裏のない夏服だったし、その人の体型に合うパターンという型紙を持ってきたから楽だった。私がパターンという便利な物を見たのは、この時が最初である。パターン付ききというものの、裁断の時だけは緊張した。

家のミシンも戦時中に防空壕に入れ、



田奈部隊の本部の建物があった所、今「こどもの国」の食堂になっています。当時の同級生や軍人と（後方左端が私）

水につかって動かなかったが、その後
の手入れで戦後は快調に動いていた。

ハウジングエリヤに住むご夫人方は、
大柄の人が多く、ふとんでも巻きつけ
ているかのように脂肪でもこもこして
いた。

肌もつやがあり、油っこそうで水を
かけるとボンポンははじけそう。バスト
といったら私の倍もあるようなグラ
マーばかり。

とにかく重宝がられ、あっちのミセ
ス、こっちのミセスと呼ばれては服を
縫った。一着仕上げる度に、二、三百
円はもらった記憶がある。

もう一つのアルバイトは、ペシアッ
ク家から出るウィスキーの空きびん
だった。空きびんを持って帰ると母が
それを廃品業者に売る。

そのころ、アメリカの物はなんでも
人気があったので、空きびんまで高く
売れたのである。こちらの収入は母の
ふところへ直行した。

アルバイトではないが、やはり、重
宝がられたことがもうひとつある。

この家には本国へのお土産にしよう
と思ったのか、ハッピーコートと呼ぶ
日本の羽織や、訪問着が持ち込まれた。
奥様は、畳紙たたしに丁寧たじんに包まれた着物
を広げると、身にまよって鏡の前に立
つ。さんさん吟味した後は私の登場と
なる。畳むためだった。

女学生時代、戦争のおおりでお裁縫
は中途半端で終わってしまったが、畳
み方だけはしっかり覚えていた。

目も覚めるような着物は、タケノコ
生活（着物を食料に換えること）のた
め持ち主が泣く泣く手放し、アメリカ
人の手に渡ろうとしているのだろう。

私の家でも敗戦直後、父の友人のす
すめで、姉と私のチョコレート色の矢
羽根模様の細の着物を、アメリカ人の
スーベニア用にと出したことがあった。

それは、ハーシィチョコレート数枚
にあつという間に変わって、残念な思
いだけ残ったことがあった。私は着物
を畳みながら、売り主の心情を思うの
だった。

ここでの勤めは、毎日が驚きの連続

で楽しかったが、嫌だったものがある。
リン、リンと鳴り出す電話だっ
た。電話のベルと同時に、私の心臓は
早鐘を打ちはじめた。ためらっている
と怒り狂わんばかり。

観念した私は「メイジャー・ペシ
アックス レシデンス（ペシアック少
佐の住いです）」と答えるのが精一杯
だった。

その後の早口英語は怖かった。
ペシアック家に勤めはじめたころの
私は、主食に食べているさつまいもの
せいではないだろうが、体型はさつま
いもを縦にした形になっていた。

しかし、勤め出して、三、四カ月で
スカートはブッカブッカになってし
まった。

この家では、わらじのような牛のス
テーキなどカロリーの高い食事を頂い
ていたのに。

多分、言葉の通じないせいで、栄養
が行き届いて、栄養失調で水ぶくれ気
味の体型がしまったのだろう。

—つづく—

夫婦別姓への招待

いま、民法改正を目前に〔新版〕



高橋 菊江・折井美耶子・二宮周平 著

夫婦別姓の考えは、ここ何年かの間に着実に市民権を得てきたかに見える。昨年七月には、民法改正要綱草案の中で夫婦が別々の姓を名乗ることのできる制度の具体案が提起された。

しかし一方で、今の日本ではまだまだ「夫婦は同一の姓を名乗るべき」という、家制度の名残を引きずった感覚が蔓延していることも否定できない。

本書は、女性問題研究者で夫

婦別姓を実践してきた高橋菊江さん、女性史研究者の折井美耶子さん、家族法の学者である二宮周平さんの共著である。

三人の著者はそれぞれの立場から、夫婦が同じ姓を名乗ることが、決して「当たり前」でないということを証明してみせている。現代の夫婦が対等のパートナーとして認識されつつあることから見ても、諸外国の制度から見ても、歴史的事実から見

ても、夫婦別姓は何ら特別なことではないのである。

現在、夫婦別姓を貫いている人たちが、今後夫婦別姓を目指す人たちにとって、本書は大きな励ましになることだろう。そしてまた、「夫婦は同姓であるべき」という考えを持つ人たちにも、本書を読むことで、本当にその考えが妥当であるかを、今一度考えてもらいたい。

有斐閣選書 一九五七円(横)

「在宅介護奮闘記」

お年寄りから学んだ医師の記録

—こころのゆとりを持つために—



宮坂圭一 著

政府が進めている高齢者の在宅介護は、在宅の介護者と訪問看護をしてくれる医療スタッフがいないでは成り立ちません。

本書は諏訪で地域医療を実践している開業医とその看護婦が、訪問医療、訪問看護をして見えてきた在宅介護の実態を、一人一人の事例をあげて紹介しています。老人性痴呆症、寝たきり、ガン患者など、在宅での介護を

希望する人が多くいますが、介護者にとっては大変な労働で、大きな負担がかかっています。

それらの介護者を支えながら、在宅での治療はむづかしいといわれる、ひどい床ずれの治療に成功した例や、終末のガン患者を看取った例、人恋しさに往診を依頼する高齢者の様子など、在宅の要介護者とその家族の様子がよくわかります。

介護する人とされる人を支えるには、福祉、保健、医療の多面的なネットワークの充実が必要であること。また質的な充実のためには、家族的介護から福祉社会的介護へ移行していくかなければいけないなど、現在の在宅介護は決して満足できる状況ではないことをあとがきで語っています。

保健同人社 一八〇〇円(水)



岡野厚子 著

三十代既婚女性の約四割が、「結婚生活に問題がある場合、離婚すべきだ」と考えているという調査報告がある。結婚後も仕事をもち続け、経済力のある女性が増えてきた今、離婚は以前ほど「大それた」ことではなくなっただけかもしれない。

しかし、世の中がいくら変わっても、離婚に莫大なエネルギーを必要とするのは今も昔も

同じこと。人生長くなったとはいえ、離婚などというイベントはそうそう何度もあるものではないのだから、腹をくくってかからねば、いい離婚なんて到底望めない。

本書は、自分自身を含め色々な離婚事情を目の当たりにしてきた筆者が、離婚に伴う数々の難問をチョー現実的に解決してゆく、離婚関係マニュアル本。

離婚の方法とその後の生活費、子供の養育、仕事、老後……。さらに「世間の目」や自身自身の敗北感といった精神的な側面まで、明るく前向きに取り組む様が、カラッと小気味いい。頭の中を離婚という言葉がちらりとよぎった時には、まず本書を手にとってご覧になることをお薦めする。

ビジネス社 二二〇〇円(中)



大津波悦子・柿沼瑛子 著

まず、題名がふるっている。我が意を得たりと思いつながら「まっ、男のほうが楽しい時もあるけど」とページをめくる。

本屋の書棚に並んでいる膨大な本の中から、理想の相手を見つけるために、いつも頭を悩ませる。そんな時に道標になるのが書評である。しかし大新聞の書評ともなると、普段軽妙なエッセイを書くこにできえ、わ

ざと難解な言葉を選んで、権威をつけているような場合がままあるようで、今一つ信用できないと私は常々思っていた。

この本は若い女性のための雑誌「HANKO」に連載された五百以上の書評を、本書と「本は男より役に立つ」の二冊に再編したもので、若い女性特有の瑞々しい感性で、話言葉に近い表現で書かれているため、その本の特性がダイレクトに伝

わる。

本の選択も編集部のお仕着せではなく、著者に一任されているというのが新鮮。ただし、著者一人がミステリー評論家なので、そちらの方面にかなり偏っているようだがそれも一興だ。午後のティータイムにパラパラとページをめくれば、きっとアナタの理想の相手に出会えて本屋に走りたくなるだろう。

社会思想社 一六〇〇円(豊)



「育時連」男も女も育児時間を！連絡会 編

「育児で会社を休む男たち」でなくて、「会社を休むような男たち」とあるところに注目してほしい。まったく、この「よくな」には実に大きな意味がこめられているからだ。

一九九二年、男女ともに取れる育児休業法が施行された。この本の名目的著者である「育時連」が発足してから実に十二年。当時はその主宰者の増野潔さん

だけが一枚看板だった。しかも彼は「会社員」ではなかった。それがジワジワかわって「育児で会社を休むような」男たちがチラホラと現われ始めた。

その彼らが育児に関わる姿を、関わった結果変化した姿を、会社のなかでどんな目にあっただかという姿を、自分の筆で、座談会で、聞き書きで描きだした一冊。ダントツに面白い。

女にとっては「やって当然」の家事・育児も、男がやれば摩擦だらけ、最初はもちろん肩力が入る。しかしどの人も、その結果、なんと柔軟で、なんと豊かな人々になっていることか。

彼らは今まで見えなかったものを見る術を学んだのである。夫を人間らしく育てたい女性は、ぜひこの一冊を読ませてほしい。

ユック舎 一六四八円(田)



アジア民衆法廷準備会 編

かつて西ドイツの大統領ヴァイツェッカーは、第二次世界大戦でドイツが犯した罪を「……私たちが過去を引き受けなければならぬ」と言った。

しかし日本では、教科書の太平洋戦争は侵略戦争であるという立場での記述を、文部省の検定が削除してきた。そのため大人でも、事実在即した歴史認識をできない人が多い。

本書は当時の貴重な写真を多

数使い、日本が辿ってきた侵略の、加害の歴史を子供たちに伝えようとしている。あなたが生きていかなかった過去をも、責任をもって見つめなければならぬ、という言葉添えて。

朝鮮、中国、台湾、南洋諸国、香港、インドシナ、タイなど、国別に紹介された侵略者日本の姿。そこで行なわれた皇民化教育、強制労働、虐殺、人体実験……。日本軍に食料を奪わ

れたことによる餓死。とくにこれまでもあまり紹介されなかった国々での、残酷な行為の写真は衝撃が大きい。しかし、どれも目を背けてはならない事実。

最後にある、日本人として同化を強要されたアイヌや沖繩の人々に対する、日本国内での差別の歴史も見逃ごせない。

ぜひ子供たちと一緒に見てほしい一冊である。

大月書店 四八〇〇円(久)

ボヘミア・ベートーヴェン紀行

《不滅の恋人》の謎を追って



青木やよひ 著

モーツアルトばやりの世の中ではあるけれど、ベートーヴェンを受する人にとって、この楽聖に代わり得る存在はない。そのひとりである青木やよひさんは、西欧で誰ひとり解き得なかった、彼の「不滅の恋人」は誰か、の謎を世界で最初に解いたベートーヴェン研究の第一人者。この著作は、その青木さんが、ベートーヴェンが百八十年前、

愛に悩みながら行なったウィーンからボヘミアへの旅行を、その足跡を辿りつつ、恋の謎解きを織りこみつつ繰り広げる、ボヘミア旅日記とでもいうユニークなスタイルの作品である。ところどころにカラー写真がちりばめられ、ボヘミアの自然と、ベートーヴェンの伝記と、著者の心象風景がないまぜになったこの作品を読み進むうち、

私たちは昔ながらの歴史的建造物が残るチェコの町々を、著者とともに辿る楽しさに陶然となる。いまも中世の文化が息づく東欧の古い町で、ベートーヴェンは、その恋文を誰に向けて書いていたのか……楽聖の悲恋の軌跡を辿るこの一冊を、音楽を愛するすべての人々にすすめたい。

東京書籍 一八〇〇円(野)

がんの再手術を拒否する時

全人的医療の
末期に
進む

患者が選んだ8年間のQOL延命作戦!



比屋神無座 患者・永田勝太郎 主診医・足立真啓 上司&友人

働き盛りの比屋さんは、がんの再発手術を拒否してガンとの共生を始めた。

玄米食、呼吸法、漢方薬、早朝の散歩などを取り入れ、人間を作る六十兆もの細胞の防衛力に働きかけようとする。

その彼を支える二人の友が現われる。彼の職場、短編映画会社の上司と、全人的医療を目指す、主治医となる男性だ。

現代医学の欠落点を補う全人

的医療とは、患者の心と身体、生活環境、性格、実存性などを一体としてとらえ、治療の指針とする個体重視の治療という。

この三人の対談が随所に折り込まれていて、患者が求めている本当の医療の姿が浮き彫りにされていく。

これまで、現代医学、病院、医師の在り方などに、様々な疑問や不満を抱えていた人々に、はっきりした方向を指し示して

くれる、必読の一冊と言えるだろう。

また、がんの再手術を勧められている人や望んでいる人、戸惑っている人たちには、今一度クオリティオブライフ(生命の質)を問い直す、絶好のチャンスとなるに違いない。

比屋さんの、ユーモア溢れる洒落な文が光り、笑いながら、軽く読ませて哲学させてくれる。

三省堂 一五〇〇円(倉)



時事放談

私にとつての宗教

出席者 神楽玲子
神谷紫津子
酒井智恵子
時尾松子
匿名
牟礼麻衣子
編集部 田中喜美子
司会 和田好子

司会 今回のタイトルは「私にとつての宗教」ですが、このところオウム真理教の騒ぎで世の中もちきりです。これがいったい日本人の宗教観にどんな影響を与えるのか、今の段階ではわかりませんが、あらためて宗教について考えるきっかけになったのではないかと思います。『わいふ』でも、みなさんのお話を伺って議論してみたいということで企画しました。

今日はという理由でお出でになった

か、まず自己紹介からお願いします。

宗教とは？ 信仰とは？

牟礼 オウム以前に、宗教についてはいろいろ考えることができました。人間は宗教を持たないで存在しうるのかどうか。日本人の宗教観、みたいなものが学校のいじめやいろんな問題につながっているんじゃないかと、ちょうど思っていた時だったので

参加しました。

酒井 私は、みなさんがどんなふうを考えていらっしゃるのか、知りたくて……。私はクリスチャンですけど、自分にとって信仰はすごく大事なものだと思っています。神楽 普通の人がどんなふうに関心を持っているのか、『わいふ』の会員のみなさんと率直にお話できたらと思つて参加させていただきました。

私は父が天理教の教会長の息子だった関

係で、幼いときから自然に月に一度は教会のお祀りへ行く、という生活をしてきました。とくに、この宗教でなきゃ、という気は全然ないんですが、日々の暮らしのなかで、神さまはつねに見ていてくださる存在だということは固く信じています。

匿名 自分にとって信仰、宗教とは何だったんだろうか、人間にとって宗教は本当に必要なものなんだろうか、自分自身に問い直す意味でここへ出させていただきました。神谷 私は中学、高校、大学と、カトリックの学校へ通っておりました。中学のときはまっさらな状態でしたから、かなり影響されましたけど、結論としては、現在はほとんど影響を受けていません。

ただ、長年の友人が二年ほどまえに洗礼を受けたんですね。洗礼を受けてから、私との関係が微妙に違ってきてしまった。そのこともひっくり返って、みなさんがどんなふうに関係をとらえていらっしゃるのか。宗教っていったい何なのか。私自身も見直してみたいと思って参加させていただきました。

時尾 私は若いときに京都で三年間、仏教

系の学校へ入っていました。別に仏教にひかれて、というのではなく、入学してそういう学校だと知ったのですが、当時、私は自分はどう生きたらよいのかが全くわからなくて、何かに縋る思いであちこちのお寺のハシゴをして法話を聞きに通っていたのです。

結局 満たされなくて悶々としているときに「歎異抄」に出会って、教団という組織は信仰の対象にはならないと自分流に思ったんですね。いまも自分なりの信仰で生きていくつもりですけど、宗教は教団に入らなきゃ目的を達せられないのか、疑問があるんです。個人的な信仰で生きられるんじゃないか。そのあたりをみなさんに伺いたくて……。

組織にはお金が必要

司会 具体的に、どういう宗教を信じていらっしゃるか伺ってもいいですか。

匿名 真如苑です。教えが開かれたのは昭和十一年、開いた方は真言密教の大阿闍梨です。世間、社会からは新興宗教という目

でとらえられていると思いますけれど、真如苑では伝統仏教だと言っています。

さきほど言われたように、団体が大きくなればなるほど機能が硬直してくるというか、管理する部分が出てくる。個人の心の問題をいかに吸い上げるか。個人が求める信仰との調和、バランスは、やはり教団にとって非常に難しいことだろうと私は感じています。

司会 なるほどね。

匿名 修行の方法は、在家仏教ですから出家している人は一人もいません。家庭、職場にありながら修行をする。それも坊さんがするような修行ではないわけです。修行という面だけをとらえれば、出家したほうがずっと楽なんじゃないかと思えますね。誘惑も少ないし、日常の喜怒哀楽がずっと少なくなるんじゃないか。

世間では信仰は弱い人間がするのととらえられがちですけど、弱かったら決して信仰はできないんじゃないかと思えます。在家にあって修行していくことがいかに大変か……。

今回、オウム真理教が問い質されるよう



神楽玲子さん

になって、いろんな人が新聞や雑誌に書いてるのを読んで、自分のなかの信仰を再認識させるという意味では一つの契機になりました。なぜ戦後信仰する人が嫌われ者みたいにとらえられるようになってしまったのか、不思議な気がしていたんです。戦後、哲学と宗教の教育がされないままにきた、と書いてあったのを読んで、アッ、そこなんだな”と思いました。信仰していると言うと、みんなが避けて通るような雰囲気がある。

神楽 オウム真理教は信仰ではない、宗教ではないと思えてならないんですね。神の存在がどこにも見当たらず、麻原彰晃という現実の人間を崇めている。貪欲にお金を集めているし、真相がわかってくるに

したがって、疑問が多くなっています。時尾さんがおっしゃったように、私も宗教の組織に対してすごく疑問を持っています

す。私は横浜で育ちましたけど、父の転勤で栃木へ引っ越しました。近くの、とてもいい教会長さんがいらっしゃる教会へ足を運んでいたんですが、そこへは行っちゃいけないと言われた。もとの(祖父のつくった)教会へ通わなくちゃいけない、「理が違ふ」と。だから今でも月に一度、栃木の益子から中野坂上まで出て来ている。

これは、どうもお金が絡んでいると思っています。お布施とかお賽銭とか、天理教ではお供えと言っていますが、神さまは直接そんなことは言っていないと思うけれども、組織をつくると費用がかかる。お金やお米、野菜を納める。それがどんどん膨れ上がっていくような気がする。教会を新しくするから何百万とか、私はどうも理解できないんです。組織だ、何だっというゴタゴタはうっとうしくて、組織はなくてもいいんじゃないか、と。ほかの天理教の人はどう言うか知りませんが。

私は、個人的な信仰の概念で暮らしてもいいんじゃないかと思えます。神さまの教えを自分流に消化して、自分流に日々暮らすというのがあって、もいいように思いま

す。ただ私自身は、毎月のお供えはしています。自分のできる範囲で、一カ月無事に働かせていただいで有り難うございます、という感謝の気持ちで。

酒井 私は日本キリスト教団に入っていますけど、牧師さんの生活をみんまで支えなきゃいけないから献金があります。月定献金げんぎんといって、自分にできるぶんだけさげます。

私たちは年金生活をしていますけど、主人にいつも言うのね。「あなたの年金で公に返せる部分があって幸せね」って。だから喜んで献金してるの。

**宗教がなければ安らかに
生きられないのか**

酒井 私はね、自分の信じてる神さまがいるから、とっても楽しく暮らしてる。私はガンですけど、健康だから有り難いというより、いまを生かしていただいでいる。どんな場合でも、たとえベッドにいても感謝していられるようにしたいと思っていますの。

転移したかもわからない、再発したかも

わからないと去年の暮れから言われて、心は動揺しますけれども、聖書の中にいろいろな言葉を見つけては自分に語りかけることによって自分を支えて、毎日を喜んで生きているって感じ。私の時はあなたの御手のなかにあります。って、すべては神さまが掌握している。自分で寿命を一日でも延ばそうだったって、とてもそんなことはできない。

死ぬときはいくら愛していても、主人も子供も誰もついてきてくれない。一人よね。だけど、自分の信じる神さまが手を添えて一緒に連れてってくれると思うと、ナンカ安心しちゃって、嬉しくてしようがない。ガンでも嬉しいなんてヘンかもわかんないけど、信仰ってすごい役に立ってる。

オウムはね、宗教の仮面をかぶりながら麻原彰晃が自分の目的を達成する道具にしちゃって、本当の宗教は他人も幸せにしなきゃいけないわけでしょ。初心を外れちゃったんじゃないかしら。

匿名 信仰は何年ぐらい前から？

酒井 五十一歳から、十四年。

匿名 きっかけは何だったんですか。

酒井 更年期と子育て後の空の巣症候群。自分の道がわかんなくなっちゃったの。

牟礼 私は、神楽さんと同じように、母が浄土真宗のお寺の娘なんです。いつも仏壇に手を合わせて、お経を読んで、お花をあげるという生活環境だったんですね。母は、身内の悪口みたいな感じで、「葬式仏教だ」っていつも言ってたんですけど、幼稚園くらいのころからキリスト教の日曜学校へ行かされていました。いまから考えれば、神はつねに自分のそばにあるもの、というふうにとらえていたんじゃないかと思っています。

私と同じように特定の宗教を持たない友人がガンになって、最後のときに自分一人で一生を終える自信がない、いろんな宗教を勉強したけれども、どれも駄目だったと言っただけです。一年くらい会ってないのでまだ模索しているのか、諦めがついたのかわからないんですが、その話を聞いたときに、人間は宗教を持たなければ安らかに死ねないのかと思いましたが、安らかに生きられないのか、と。

信じる者は救われる。信じない人は救わ

れないのかなと。これが不安といえ不安です。私の父は仏教徒で、特別に信仰が深いわけじゃないけれど、九十二歳になったら毎日が幸せだというわけです。父の姿を見ると、宗教がなくても一生を終えられるのかなという気もする。

この間毎日新聞に、戦後の日本人の宗教観が書いてあって、家にたとえると土台の部分がなくった、とあったんですね。戦後、宗教について教育されなかったこともあるんですけど、人間の土台というのは教団とか宗派じゃなくて何か他にないのかしらって、ずっと考えていたんです。

そんなことを思っていたら、ある日、小学校六年のときに読んだヘレン・ケラーの本にあった、愛とは何か、誠実とは何か、努力とは何か、という言葉を突然思い出しました。子供心にすごく感銘を受けたんですが、この言葉を持ち続けることによって、



牟礼麻子さん

人を愛していけば宗教がなくても生きていけるんじゃないかと、最近感じています。特定の教団に入られている方と、自分との違いもこれから考えてみたいと思っています。

現実的な生き方を

神谷 二年前にイギリスでプロテスタントに入信した友だちは、私と同じようにカトリックの学校へ通っていたんです。

長いこと文通しあってたんですが、手紙の内容が「あなたのために祈ってます」「〜で感謝です」とか、御言葉の葉が入ってきたりして、根底のところですごくわかりあっていたかと思っていたのに、わからなくなっちゃった。こんなに簡単にわからなくなっちゃうんだらうかと、いますごく切ない、苛立つというか、いい気分じゃないんです。下世話な言い方をすると、ムカムカする。

結局彼女は、絶対的な神に自分のすべてを託してしまったわけですね。子供がどうしたとか、ご主人がどうしたとか、誰

だってつらいものはありますよ。それを信仰という名でオブラートのように包んでしまって、隠したとは言いませんけれど、うやむやにしてみました。どうしてもそういう気持ちを禁じえないですね。

現実とバァンとぶつかって、努力して、自分自身でいろんな解決の方法を探る。それが正当な道じゃないか。私自身、十年間カトリックの学校へ通っていたにもかかわらず、「ちょっとあなた、ズルインじゃない?」って、「もうちょっと現実的な生き方をしたほうがいいんじゃない?」という気持ちです。

さっき、信仰を持つと嫌われるとおっしゃいましたが、私、それがグサッと胸にささって……。彼女が信仰の世界へ入ったことで、私自身が彼女を批判的な目で見、ネガティブなイメージを持ってしまったんじゃないか。彼女を嫌った原因は、戦後の日本の土壌からもきているのだから、いまそんな気持ちです。

時尾 お話を伺っていると、私の持っている信仰はみなさんとちょっと違うみたいです。私の学校は西本願寺系だったものです

から、無常観と罪悪感を徹底して押しつけるんです。

寮に入っていたので、朝晩お仏参して、お経をあげるのですが、あの雰囲気が好きで、真面目に通ってました。そのうちにある上級生が入信したという話を聞いたのです。「入信って、どういうこと?」「悟りの境地だ」って。「悟りを開くとどういうことになるの?」「すごく体が楽になって、世の中がバァーツと明るくなるのよ」

私、それにひかれちゃったんですよ。私もなってみたくて、熱心にお寺へ通ったけれども、ある所では講釈まがいの調子で地獄極楽の話聞かされ、別の所では理詰めに「あなた、虫ケラを殺したでしょ。肉を食べてるでしょ」と、責め立ててくる。

それが「歎異抄」を読むと全然違うんです、お寺で言われている言葉と。どうして



時尾松子さん

こんなに違うのか。これはどうも営業だなどと(笑)。お寺の信者になるとこういうことになるんだなと思って、それからプツツり止めました。

ただ無常観と罪悪感は今も心のなかに住みついて、現在の私の死生観を形づくっていると思います。何かを殺さなきゃ生きていけないのが人間だ、死んだら無になって灰になるんだ、こういう死に方をしてもいいという覚悟をつくりたいという気持ちです。

いまでも折につけ「歎異抄」を開いてますけど、これは悩み苦しんでいる最中に読んで、全然助けにならないのね。心の葛藤が終わって開くと、何となく沁みこんでくる。それでいいと思っています。

人が媒介

司会 みなさんに一通り伺いましたが、教団という組織と信仰心との問題、教団のなかで指導的な人、宗教家と一般信徒との信頼関係の問題が出てきました。

教団と信仰の問題というのは、やはり教

団がなければ宗教を広めることができない。私と神さまだけの関係でいたいと思っても、初めに神さまのことを教える人はいたわけです。広めるためには専門の宗教家がいなければ駄目だし、その人たちがどうやって食べていくかという問題が出てくる。そのへんところが、宗教がいろいろ難しい問題を抱えるものになっていくと思います。匿名 それは事実だと思えます。自分だけの神さままでよければ誰も組織なんかつくりたいと思うけど、同じ神さまを共有するから組織ができてくる。

司会 宗教活動をしなきゃ宗教は広まらないし、みんなも触れられない。

きつと昔の人は現代人みたいに考えなかったと思うんですよ。いまの人は本やテレビやいろんな情報があるから、組織を否定しても神はあると思うけれども、昔は教団がなかったら絶対に情報は伝わらない。一人だけの神というのは成り立ちにくかったんじゃないか。現代はともかくそれが成り立つようになったんで、みんな、そういうことを言うんじゃないかと思いましたけどね。

でも、どうなんでしょう。みなさんが宗教を大切にお思いになるのは、何か縁があったからじゃないか。ことに現代のように親も学校も教えない、お仏壇もないという世の中じゃ、きっかけ、つまり縁がないと宗教には触れられないんじゃないか。酒井さんはどういう縁だったの。

酒井 さっきも言いましたけど、子育てが終わって、家のローンも終わって、ボーイとしていたときに息子が、「お母さんは英語が好きだからFENでも聞いてブラッシュアップしたら」って言ったの。FENをかけたなら、たまたまキリスト教の時間で、昔通っていた進駐軍の教会の牧師さんを思い出した。ああ、あの時はよかったなあ。

うちの姉がクリスチャンなのよ。聖書の勉強会に誘われて、何となく行ったの。お祈りの時間になったら、一人の方が涙を流して病気のお友だちのために一生懸命祈ってるの。それまで私はじぶんちが安泰ならいいって考えだったから、ビックリした。その姿を見て、この聖書ってのはいいんじゃないかと思ったのね。

匿名 原体験で、やっぱり人だと思えますよ。書物よりも何よりも人が媒介という感じ。

司会 なか(宗教団体の)へ入ってしまおうと同じ考えの人がいて、仲間がいる。誰が敵になるかわからないような昨今の人間関係より、いい人間関係があるんじゃないかしら。

酒井 いい感じよ。

匿名 リラックスできますね。競争する必要がないし、精神的にはすごく安らか。

牟礼 それが本当の信仰じゃないかと思いません。ただ私の性格として、自虐的かなと思ったりもするんですけど、逆にいろんなストレスの間で生きていくことが人間の面白さというか、人生の面白さじゃないかと思う部分があります。

匿名 でもそれは自分の信仰のごく一部なんです。普段は仕事とか、他の団体のかかわりとか、PTAの役とか、大変なことがいっぱいある。信仰と秤にかける問題ではないけれど、信仰は生活の延長線上ではまったくない。別の世界だから。司会 別の世界があるってことが、またい

いんじゃないですか。

匿名 そうだと思えます。

宗教も文化の一つ

神楽 私の場合は、とても好きな教会があるんです。その教会長さんは人格的にもすばらしいし、説教もすばらしい。ところが祖父のつくった教会というのは、いま父の従兄弟がついでいるんですが、暗いんですね。サラリーマン教会長みたいで布教もしないし、新しい信徒さんなんか全然入ってこない。

父母に「あそこの教会へ行くと気が重くなるから、行きたくない」と言うと、「人を見ちゃいけない、神さまを見なさい」って言うんです。「神さまから借りている体だから、心だけが自分なんだから。教会へ行っても神さまだけを見なさい」って。とにかく心だけ。

だけど私には理解できないんですね。やっぱり原宿にある大教会、その神殿を見ると涙が出ちゃうくらい神聖さを感じるんですけど、そういう教会へ行きたいんで

す。

酒井 変われば、宗教は自由でなくっちゃ。神楽 そうですよ。そこが、いまいち

天理教が発展しない理由じゃないかと思えます。宗教は、結局、人間がつくっているんですよ。

司会 人間の文化の一つですよ。

神さまというものは、信仰する人間がいる間は神さまでいられる。ところが信仰する人間がいなくなっちゃうと、エジプトの神々みたいに美術品の像になって博物館行きになる。日本の場合、昔信仰されていた小さな神々が忘れ去られると、怖かったという記憶だけが残ってオバケになっちゃうと民俗学では言う。一つ目小僧、河童がそうです。

江戸時代の山伏の旅日記を読んだらすごく面白かったんだけど、禅宗は奥さんを持っちゃいけないのに祈禱に行ったら、美人の奥さんがいた。戒律を破っても、みんなナアナアで平気な顔をしていて、いい加減なんですよ。

匿名 日本の宗教って、キリスト教的な考えよりずっとフレキシブルですね。

田中 そういうふうには社会的に宗教を見ちゃうと、信仰が薄れるような感じがしません？

酒井 深い意味はわからないけど、私はキリスト教が好きなの。

田中 性が合う、それはあるわね。

神谷 さっき、信仰に入るきっかけとしていい出会いがあるとおっしゃってましたけど、逆の立場もあります。

例えば私自身の体験でいえば、十年間カトリックの学校にいて、冷静な目で神父さんや先生方の行動見ると、「エーッ!?」と思うようなことがいろいろあったわけです。とくに高校生ぐらいの論理的のものを考える時期には。

十二時に教会の鐘が鳴ると、保健体育の先生は「じゃあ、お祈りしましょう」と言う。宗教の時間でもあるまいし、何でお祈



神谷業津子さん

りしなきゃいけないのと私たちは反発する。数学の先生は、ガンガン鐘が鳴ると「ウルサイわねえ。これ、止められないの」と言う。結局、どっちの言葉が自分に入ってきたかというと、「ウルサイわねえ」のほうがです。これが宗教なのか、宗教って私とは合わないわ、と思っちゃった。

私は、どんなにつらい事があっても信仰に頼らないで、自分で頑張っちゃっていいと思うているんですけど、何なんでしょう？ 信仰している方とのこの違いは。

田中 私もカトリックの学校だったから、「あなたのために祈ります」とかね、ムカツク気持ち、すぐわかるんだよねえ。神谷 嫉妬もあると思うんです。友達を絶対的なものに取り上げてしまった、同じ土俵じゃない、という……。

生きる拠りどころ

牟礼 主人の姉がクリスチャンなんです。彼女もいろんな宗教をあさりまくって、ある日キリスト教の牧師さんと話をしたとき

入った。やっぱり彼女も、「私は幸せ」とか言う。それを聞くと、すぐうとうといんですよ。

父が病気だったときに、姉は牧師さんと友達を連れてきて、枕辺で祈ったというのね。私、とっても不愉快だったんですよ。父自身が求めていないのに、押しつけのよう

に祈っていたあの、とっても嫌だった。神谷 止めてちょうだいと言うの、ためらいますよね。

司会 「求めよ、さらば与えられん」で、求めている場合にはスツと入ってくるけど、ものになってくるんじゃないか。自発性がないと駄目だったことでしょうね、宗教は。

田中 そしたら人間は、濟度しがたい縁なき衆生と、求める人間との二つに分けられるんだらうか。私はそうじゃないと思う。というのは、みんな死ぬんだし、条件は同じですよ、人間は全部。

司会 とところが、昔と今を考えると、条件が同じとは思えない。私は宗教は全然否定しないし、人間がいつの世の中でも真剣に宗教を求めてきた、ということ

わかるわけよ。

昔は今よりも簡単に人が死んだ。疫病もあるし、戦争もあって目の前で人が殺された。人間の信仰心が発動されやすい状況があったと思う。昔は暇もあるし、そういうことを考える環境があったらと思うの。

田中 私、そうは思わないア。

牟礼 日本の場合、やちよんちす八百万の神々がつねに人々のそばにあったのが、戦後なくなっちゃって、求める人たちは新興宗教へ走るのがなあと思えます。私たちは八百万にかわる、家の土台になるものをナントカしなきゃいけないんじゃないか。

教団とか教派じゃなくて、親として子供にそういうものを伝えていかなきゃいけないんじゃないか。いじめとか、学校の問題にしても、それがないからあそこまでできるんだと思う。

司会 生と死の問題をどうやって解決するか。いままでは宗教によって解決しようとしてきたけど、このごろはそうじゃないものも出てきているのかも知れませんか。牟礼 私は、人を愛するとか、人間を愛す

るとか、そういうところに拠りどころを求めていけば生きていけるんじゃないかと思うんです。

漠然としているんですけど、神という言葉は使わないけれど自分が正しいと思うこと、っていうか……。

田中 そこがすごい問題なんです。何が正しいのかってことが。

匿名 信仰のある人は、聖書なり、おんせん大般涅槃經はんぜんぎょうなりを判断規準の根底に置きますですよ。そこから慈悲とか、相手の仏性をみていく。愛もそこからスタートする。そこにもいつも照らしあわせて自分を正していくとする。それがない人が愛だとか何とか言っても、ただの自己満足に過ぎないんじゃないか。

田中 あるいはエゴイズムの変形であるかも知れない。

牟礼 これは自分の人生観とか生き方の問題でしょうけど、私は一つの宗教を信じることができないうんだと思っんです。

田中 うん、うん。

牟礼 そしたら私は、一生救われないままに生きていかなきゃいけないのか。何もな

いとところからスタートしていると言われれば、確かにそうだけど、でも何かがあるんじゃないか。私の根底には自分でも気がついていない宗教があるかもわかんないんですよ。漠然とした宗教というか。

酒井 人間愛じゃない？

人知を超えたところにあるもの

司会 一つの世の中でも悪いことをする宗教家はいるわけですよ。オウムほどひどいのはめったにいないとしても、人間は非常に弱いもので、高い精神的なものにふれていても逸脱する。現実の利害がからみ、お金に困れば何をするかわかんないという面がある。そういう弱さも容認して、自分の悪さを後悔しながらよいものを求めていく宗教心というのは、人間が昔から持っていたんじゃないかって感じがする。

田中 私はね、特定の宗教じゃないけど信仰を持っていると思っんですよ。

十七、八歳のときに結核で寝てたから、すごい暇があって、本ばかり読んで音楽ばかり聴いていた。青春期って、自我の

目覚める時代じゃないですか。そのころから、人間てのは何だろうって、絶えず考えていた。

私、本当の意味で人間が信じられるようになるのに二十年ぐらいかかっている。三十代後半から四十歳ぐらいになって、ようやく人間はよくなるうとしている存在だと思えるようになった。私の場合、それを信じさせてくれたのは芸術、音楽なの。

ベートーベンのクワルテットとかソナタは、もう崇高としか言いようのないすばらしい作品なわけ。人間の心の高みをベートーベンほどすばらしい形で表現した人はいない。私はやっぱり、音楽によって人間を信じることができるようになったんだなあと思う。ああいうものに一度ふれると、人間はただの動物だなんて、到底思えなくなる。弱肉強食だけじゃない。やっぱり精神を持って。まあ、愛ですけどね。いまは異常な世の中だけど、電車のなかでグズグズに足を組んでふんぞりかえっている若者でも、ふれる機縁がないだけで、そういう精神は持っていると思うのね。○×式の試験勉強はしっかりして、偏差値だけ



酒井智恵子さん

で生きてきて……、本当に可哀相。ひどい話ですよ。

酒井 だから、オウムに入ったんじゃない。いまの世の中に失望して。

三〜四人 絶対にそうよ。

匿名 うちの夫は理科系の研究職ですけど、私と同じ信仰を、そんなに一生懸命じゃないけどしています。理科系の人がああいう（オウムの）行動に走るの、私は不思議じゃないんです。というのは、理科系の間はものが有限であるとか、人知の及ばないことがあるのを知っているから、逆に精神世界へ入る。

田中 なるほど。それはすごくいい視点ね。

匿名 文科系の人の方がわりといい加減というか、考えがパラパラ、パラパラしていて現実的。理科系の間は、科学が進めば進むほど、そっちを求めないと救いがない

ということがわかると思うんですよ。物理学者とか科学者で、信仰をしている人はいっぱいいます。

田中 それは全然出てこなかった、新しい論だね。

司会 でもね、理科系でも極端な人は神秘主義に走るかも知れないけど、極端じゃない人は走らないと思う。文科系の人への考えは理科系の人と全然違って、人知の及ばないというところに、何もなかったことを知っているんですよ。

私はカソリックの洗礼を受けた人に、「キリストの奇跡とかマリアの処女懐胎を信じるんでしよう？」と聞いたら、「そんなの、信じられねえよな」って言うのよ。要するに、それは信仰によって存在するものになるのであって、信じることによって生じるんだ、と文科系は思う。そこが私には、理科系と文科系の宗教に対する考え方の大きな違いじゃないかと思う。

まとめ・宮前 和

（次回の時事放談のお知らせは、一四九ページをこらしてください）



フリースペース



恐怖のプレゼント

山口県下関市 深田加奈

リスのみな子が、この話の主役である。去年の夏、みな子がオスのリスの耳をかじって以来、二匹は別々のかごに入れていた。四月初め、みな子があまりにもオスを恋しがって鳴くので、久しぶりに一緒にしてやった。二、三日は仲がよかったが、またもやみな子がオスの耳をかじったため、別々にした。今、オスの右耳は、あわれにもパンチの入った切符のように、はじっこが切れている。みな子の性格がきついのか、はたまただまってかじらせるオスがまぬけなのか。

交尾後一カ月もたないうちに、みな子のお腹は大きくふくれ、ジャンプもできなくなった。高い位置にあった巣を降ろしてやったその晩、みな子が赤ん坊を生んだ。真夜中だった。みな子の巢からチーチーと小さな産声が聞こえた。赤ん坊の頼りない

鳴き声はしばらく続いた。

翌朝、私がかごにリングを入れると、みな子は大急ぎで巢から出てきてリングをかじり、またそそくさと巣に戻った。巢の中には小さなピンク色の子リスが一匹ちらりと見えた。それ以上は何もせず、みな子と子リスはそっとしておいてやった。

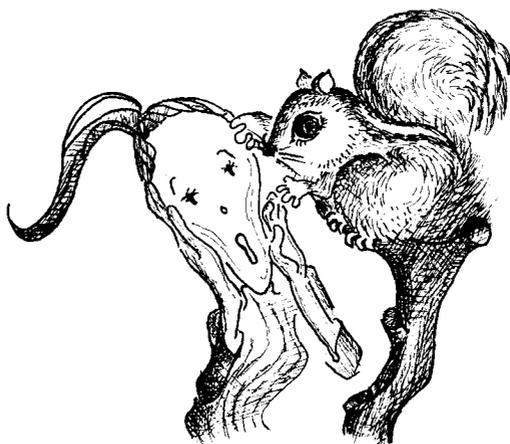
その日は一晩、私は家を留守にした。リスのエサは夫にまかせておいた。

翌日の夕刻、家に戻った私は、子リスはどうなっただろうとワクワクしながらドアを開けた。しんと静まりかえった家の中には、リスがかごの中をとびはねる音が聞こえる。見ると、みな子がとびはねて遊んでいる。巢に見向きもしない。みな子は子リスを温めるのを止めていた。

やはりだめだったのだろうか。飼われているリスの出産の難しさは本で知っていた。みな子の巢には、ちぎった新聞紙がぎゅうぎゅうに詰めこまれていた。子リスがどうなってしまったのか確かめようと、私は巢の新聞紙をどけてみた。しかし、いるはずの子リスがいない。冷たくなった死骸さえない。私は巢の周りの新聞紙もどけてみ

る。どこにも子リスはいない。私の心臓はすでに高鳴っていた。

そうだ、きつとそうだ。みな子が子リスを食べたのだ。そう気づいて、ワラがわり



にかごに敷き詰めた新聞紙を見る。赤茶けた血痕がいくつもついているのが分かる。私はおそろおそろ新聞紙を取り除いていく。突然、私の手に湿った何かがふれた。少し肉片のついた、子リスの小さなあばら骨

だった。

「うわあ、うわあ、うわあー!」

私の心臓は破裂寸前だ。この日ほど、母リスが恐ろしく見えたことはない。

退屈な毎日の中にも、たくさんの恐怖が潜んでいる。彼らは時々ひまっこり顔を出して、私を死ぬほど怖がらせる。いつもは一本三百五十円ナリのサスペンス映画のレンタルビデオで買う恐怖だが、今回の恐怖は只であった。只なのに、すさまじい恐怖感を私にプレセントしてくれた。怖かった。本当に怖かった。

子リスを食べたみな子のことを生物学的に理解しようと試みる。でもそれは恐ろしさを消す手伝いなどなりはしない。私は子リスの、あわれだが無気味なあばら骨のイメージを消せずにいる。私はくり返し、恐ろしいなことはかり考えている。

みな子はいったい子リスのどこからかじっていったのだろうか。子リスのつまようじほどの細い手足か。あるいは頭からガリリとやったのか。考えるたびにうわーと声を出しておののく。

子リス殺しのあった晩、私はこのせつかくの恐怖の体験をもとに、娘にこわいこわい詩を創ってやった。創っているうちにますます怖くなって、

「怖いねえ、怖いねえ」

と言いながら創った。

只でもらった恐怖だが、私は十分に堪能させていただいた。

お古

千葉県市川市 荒木裕子

娘の衣類を整理した。トレーナー、キョロトスカート、Tシャツ……かなりの数である。娘一人がおとなしく身につけただけなので、ほとんど傷んでいない。しかし、中学生になった彼女の好みにはもはや合いそうにないものばかり。

ふと、地方に住む弟の子供たちを思い出した。小学生の女の子が二人いる。送って

あげたら喜ばれないかしら。

「せっかちな私は、さっそく弟の家に長距離電話をかけた。いきなりR子さん(弟の妻)が出たので、ちょっとどきまきしながら用件を話した。

「お好みがあるでしょうから、もし気に入らなかつたら処分して頂いていいんですけど」
「ありがたいです。うちは近所からいらだいたりして着せてますから、子供たちも嫌がりませんし」と言ってくれた。

半分社交辞令だとしても断られなくてよかった——、義理の姉の申し出を断れるわけもないか——、と胸をなで下ろしたその数分後、追いかけるようにまた電話がかかってきた。第一家と同居している母からだった。公衆電話からかけていると言う。

「洋服を送ってくれる話だけど、実はR子さんは結構ファッションにこだわってね、せっかく送ってくれても無駄になるんじゃないかと思うの。そうするとR子さんにも気を遣わせることになるし。もったいないからほんの少しにして。それよりK子(私の妹)に送ってやってちょうだい」

「K子のところにはいつも送っているし、

今回はサイズがちょっと大きいからたまにはR子さんのところにも、と思っただけだ。お母さんがそういうなら少しにするわ」

贈る側としては無駄になるのを承知の上でもらってもらうのである。だから右から左に捨て去られてしまっても別に構わない。一枚でも気に入ったものがあって着てもらえれば、贈ったほうの気持ちとしては満足なのだ。

だが、もう側にしてみれば単なる有難迷惑、むしろ大きな負担になってしまう場合が多いのかもしれないと、母からの電話を切った後しばらく考え込んでしまった。

そういえば娘がまだ小学校低学年のころ、こんなことがあった。近所に住む年配の奥さんが、娘にと言ってたくさんのパジャマやワンピースをくださったことがある。昔お孫さんが着ていたもので、品物は上等だし、まだきれいだし、ありがたく頂戴した。

ところが如何せんデザインが古めかしい。娘の嫌いなレースやフリルがふんだんに使っている。とうとうただの一度も娘がそでを通すこともなく、ガラス拭き用のウエスとなる運命をたどってしまった。

損保年金のごあんない

私達のこれから先は
自助努力ばかり強いられそうな予感です。
今からでも間に合うつなぎ年金は
6年積んで5年で戻る、その名も
「東京海上6.5プラン」です。
積立部分の運用利回りは3.75%です。
詳しくは、お問い合わせ下さい。



■ 親切・丁寧・シツコくない、わいふ指定代理店杉本保険事務所です ☎ 03-3260-4771

困ったことに、その奥さんは会う度に「どう？ やすこちゃん気になってくれたかしら」とお尋ねになる。冷や汗をかきながら「ええおかげさまで」と答えるのにはとほとほたびれてしまった。

そうそう、こんなこともあったっけ。隣家の奥さんが「うちでいらなくなったらオルガンがあるんだけど、お嬢さん使ってくれないかしら」と声をかけてくださった。娘が幼稚園のころのことだ。断る理由も見つからず、いただくことにした。ところが半年もしないうちに娘がピアノを習いたいと言いつい出、ピアノを買うことになった。当然オルガンがはみ出してしまふ。どうしたか。夜のやみに乗じて夫と二人、遠くの粗大ゴミ置き場へとこっそり運んだのだった。

のどもと過ぎれば何とやら、今度は私が
お古を押しつける側に回って、相手を当惑
させてしまふところだった。よほど親しい
間柄ならともかく、お古をお譲りするの
は控えたほうがよさそう。娘の洋服を気に
いって、いつも心待ちにしてくれる妹の所
くらいにとどめておくのが無難かな。

趣味人でいこう……かな？

千葉県柏市 さいたまゆみ(32歳)

専業主婦生活も一年が過ぎた。同じころ

職を辞したKさんと「あーまさに『定年後のオヤジ状態』よねー」などと話していたが、彼女は塾の講師となつて、純然たる無職は目下のところ私だけである。

今度は、じっくりと職探しをしよう決めていたので、今のところ焦りはない。でも、他の人と比べて自分の無趣味さが気になりだした。

正直言つて、趣味なんて結局暇つぶしよ、と思つていた。学生時代は部活に勉強、会社員時代は仕事に飲み会……、スキー以外の趣味の入る余地はなかった。それでも一シーズンに四、五回出かける程度である。

結婚後はすぐ子供ができたせいもあって、唯一の趣味のスキーもできなくなった。家

自然食通信65

特集 輸入農産物にも有機登壇

原料はアメリカや中国産「有機・無農薬」大豆の納豆が店頭
に続々。ファミリーレストランでも「有機」の輸入素材を売
り物にした店が。国内産にあくまでこだわることか、それとも
……。「私達の選択」の答を探して、USAの有機農業を現地取
材しました。

隔月刊／定価六五〇円
送料二四〇円

七月三十一日発売

寝たきり少女の 喘鳴が 聞こえろ



「母親である著者は14年間にわたって、いつも天音という命を両腕に抱き続けてきたのだ。(中略) それでいて彼女の手記が、ある種の明るさをたたえて読者を放さないのは、天音という存在を憐れすることなく学校へ地域へ社会へと押し出していくことで、天音のまわりによりゆたかな人間関係が紡ぎあげられていくさまが、いきいきとそして正直に伝えられるからだ。」(松下竜一氏評・熊本日日新聞)

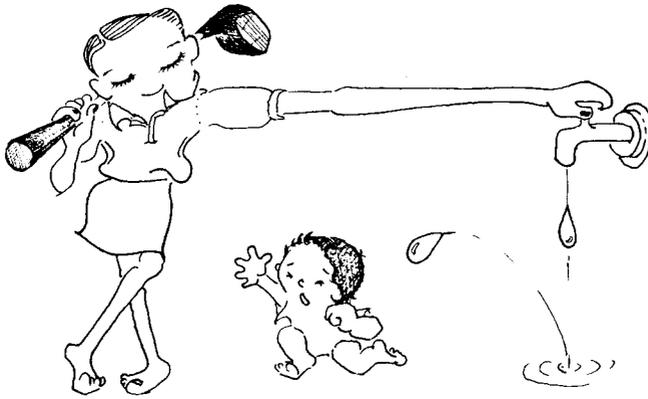
自然食通信社

東京都文京区本郷2-12-9-202
☎03-3816-3857 FAX03-3816-3879

族スキーという手もあるが、わが連れ合いはパチンコ・競馬(それも電話投票)が趣味。典型的な出無精と見た。それが伝染してか、当初は雪不足のニュースに「へーんだ、私がスキーに行かない時は雪なんかなくていいんだよーん」と悪態ついてたけれど、最近は何とも思わない。

そんな折、知人のSさんがご自分の趣味について書いた文章を拝見した。彼女はエレクトーンやピアノ、フォークダンスと実に多彩な趣味をもつ。どれも公共の施設のサークルなのでそんなに費用はかからない。子供のころ、一度は遠ざかった音楽から、結婚後十年近く経って、「心のビタミン」を得ての生き生きとしたゆとりある生活の様子がうかがえた。いいなーと素直に心に残った。

仕事を離れた今、再び痛切に感じる。「せねばならない」家事中心の生活を続けていると、自分が薄っぺらに感じられる。折しも周りの母親たちの間では、託児つきで安上がりなカルチャースクールの情報交換が盛んだ。チラシもいっぱい入ってくる。これは何かやらなくちゃなー、という気に



なる。

でもまず手芸関係一切ダメ。中学の家庭科で一回も作品を提出できなかった私。布や糸の無駄になるだけだ。音楽関係も一切ダメ。カラオケは踊ってごまかしていたほうだし。かといってダンスもリズム感がいいまいち。スポーツ……昔はともかく腰痛が……団体競技は責任が……。そんなこんなでカルチャースクールのチラシの講座名はほとんど消されていく。

やっぱり趣味人にはなれないとあきらめかけたころ、夫がついにゴルフを始めた。数年前から会社の人に勧められていたが、管理職になって「半分仕事のうちで仕方なく」やることになったらしい。でも道具を揃えて練習場に通ううち、だんだんハマっていく。先日河川敷のコースに出たが、他人の二倍は叩いて「恥ずかしいを通りこした状態」だったとかで、帰ってくるなり練習場へ出掛けた。

ゴルフか……おもしろそうだがこれほど「見るとやるのじゃ大違い」のスポーツもない。腰にも負担が掛かるというし。でも何だか面白そうだ。結婚前に打ちっ放しに

行っただけだけど、もうちょっとちゃんとやってみようという気になってきた。

夫が人並みに打てるようになったら、教えてくれるよう頼んでおいた。夫婦でゴルフなんて、ふぶん何だかオシヤレだぞー。もしかしたら「向いてない」のを思い知らされるだけかも知れないけど。

それにしてもたどりついた先がゴルフとは……さすがに元祖オヤジギャルの成れの果てである。せいぜい「オヤジくさいオバサン」にならないよう気をつけよう。

夫の告白

神奈川県中部 石井しのぶ (36歳)

また夫婦げんかをした。

夫が二年前の自分の秘密を今になって急に告白したのだ。

何度かドライブに誘っていたその女性とは、もう二度と会わない約束をしてくれて

いたはずなのに、その後も何度か会い続けていたというのである。

「もう会っていないよね」と何度も聞いた時、そのつどきっぱりと否定していたのに。全く、男って大ウソツキだ。夫の釈明を聞けば聞くほど、まじめな「恋」だったことがわかってよけい自分かみじめになってきた。

相手の子は遊び半分だったことは話を聞けば誰でもわかる。でも夫はそんな子に本気でひかれていった。関係があったわけではないけれど、やっぱり許せなかった。こ

の何日か最悪の精神状態が続いた。一日二〜三時間しかねむれないし、子供の前で突然大声をあげて泣き出してしまうこともあった。

「相手はからかっているだけだとわからなかったの」という私の言葉に夫は「からかわれていたとしても会いたかったんだ」と答えた。もうこれでおしまいだと思った。アパートを探して子供と三人で住もうと決心した。でも……、

「オレは昔からもてないでふられてばかりだった。だからうそでも好きだと言ってく



る子がいてうれしかったんだ。学生時代、誰ともつきあえなかった空白を、今しか埋められないと思っただんだ」

という言葉を聞いているうち、何となく夫の気持ちも理解できるような気がしてきた。

約束破りは悪いけれど、何もかも私に告白することで完全にふっきろうとしているのがわかった。私にだって全く秘密がなかったわけでもない。これまで、夫が過去にあまりにこだわる人間だから言い出せなかった、昔の彼についてちょっと言ってみた。私の中にも夫と彼をどこかで比べる気持ちがあったことに気づいた時、急に夫を許せる気がした。

お互いにすべての秘密を言ってしまったら、何だかすっきりしてきた。秘密がないとは何とせいでいいことか。そしてこれから何でも言えるもつといい関係になれそうな気になってきた。過ぎてしまったことを今さら何を言ってもしょうがない。

今は、夫も私のことをきらいではないよなので、もう少し夫婦でいようと思いはじめている。別れるのはいつでもできる。その前に、何かもっとわかりあえる方法が

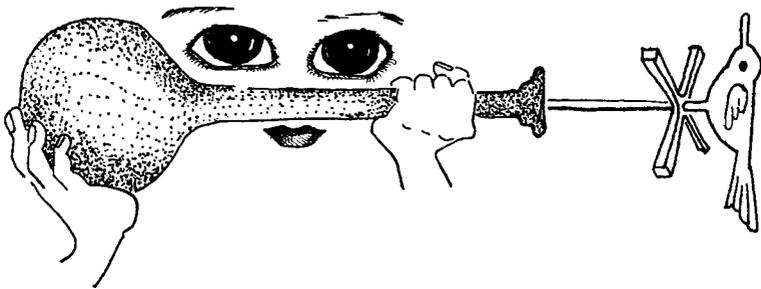
あるはずだ。この次、約束を破った時は許せる自信がないけれど、今度だけ、夫のウソを許そうと思った。

マイホビー

大阪府東大阪市 西尾ありか(31歳)

私は履歴書や身上書の類の「趣味」の欄が大の苦手だった。

学生のころはそれこそ「音楽鑑賞」か、「ドライブ」としか書きようがなかった。これではいかにも「趣味がありましえん」と豪語してようだし、ベートベンやモーツァルトを聴いているわけでもないの、ただの遊び人といった風。「スキー」と書けるほど上手くもないうえに、たいてい「スポーツ」の欄があるのでスキーはそちらにまわる。「読書」なんて書いた日にゃえらい目にあいそうだし、実際、友達と連れだって遊ぶ以外の楽しみはもっていない



かった。

ところが、結婚してしまおうとそうそう友達と会うこともままならないし、第一、好きなことがないっていうのは人生味気ない。『幸せとはなんぞや?』とつきつめられるとハッキリした答えは出せないが、好きなこととして暮らしてゆけたら……、もっと現実的に言えば、少しでも長い時間を好きなことをして一日を過ごせたら、幸せに近づけるように思えた。何でもお金で買える時代、かえて好きなことを探すこと、見つけ出すことは意外にむずかしいことだった。

何気なく目についた「陶芸教室」の宣伝。映画の「ゴースト」でデミ・ムーアがまわしていたろくろを見て少し憧れていたのだった。すぐに電話をして、一日教室に申し込んだのは、私にしては、なかなか早い対応だった。

こぢんまりした工房は、先生のさり気ない気配りのある、明るく落ち着いた空間で、私はすっかり気に入ってしまった。

初めて土を触り、形にしていこうという作業は、想像以上に面白くむずかしい。見て

いるといとも簡単そうに見えるのだが、土はなかなか思う形になてくれない。一日ですっかりはまってしまった私は、毎週この工房に通うことになったのだ。

自分の作れそうなものを好きに作ればよく、強制が何もないのがよかった。人の作品を見て、今度、あんなの作ってみたいな」とか、ごんなお皿が一枚あると便利よね」と、思いがどんどん広がってゆく。無心に一つのモノを作る楽しさというのを初めて味わったのだ。

一つの作品ができるまでには、土を成形し、少し乾してから削り、形をまず完成させる。それを八〇〇度程度で素焼きにして、その上に釉薬をぬり色つけをして、最後に一二〇〇から二三〇〇度で本焼きにして出来上がりだ。乾燥させたり、順番待ちなどで完成まで一カ月近くかかってしまうが、その分気に入ったモノが出来上がった時の喜びは大きい。少々形がアンバランスでも、自分で一生懸命作ったモノはかわい

い。何より楽しいのは、窯から出てくるまでどんなモノができるか、本当にわからない

ということだ。思った色が出なかったなんてことはザラにあるが、逆に思いもよらずなんとも味わいいのあるいい色合いに仕上がってることがある。これがやめられない。競馬で何年かに一度万馬券を当てて、あとはすってばかりいるくせに、どうしてもやめられない競馬ファンと同じかもしれない(たとえが悪いが……)。

いいのでできるとお仲間から絶賛される。素人だから所詮しれているといえはしれるのだが、それがかえって素朴であたたかみのある作品になることは多い。

出来上がって教室で見ると、家に持ち帰って食卓で使い始めるのとは、また作品の味が違ってくる。あまり、パツとしなかったのが使ってるうちに妙に愛着がわいてきたり、使い心地がよかったりする。料理にも力が入る(ときもある)。

陶芸を始めてからいろいろなものに目が止まるようになった。食器や花器はもちろんのこと、それらを彩る料理や花、インテリアやポプリにまで気を引かれる。ポプリを入れる器を考えてみたり、そこらへんに生えてる草花でも生けようによっては、と

ても自然であたたかみのある空間を作ることが出来る。市販の高いインテリアグズよりはるかに素朴で素敵なものになり得る。

好きなことを見つけて出すことはとてもむずかしいことだったけど、いざ見つけてしまふと案外身近なものだったりする。時間をかけてゆっくり長く続けてゆきたいと思うものに出逢えたことは、きっと私の心の中の貴重な財産になることだろう。

作文から見えてくる お年寄り事情

東京都中野区 早乙女光子

所属する同人誌（児童文学）の関係で、都の、敬老の日にもけた小学生の作文の、末端の選考をするようになって今年で五回目。

表向きには名のある人が選者なのだが、なにせ学校ぐるみの参加で、全校生徒に書

かせている所もあり、その数は膨大だから、こうして末端のわたしにまでダンボール箱一杯の作文が送られてくるわけだ。採点はABCで分け数人がAとしたものが選者に送られる。

最終的に高学年五人、低学年五人が選ばれて、この入賞者たちの全文掲載誌が発行されるのだが、作文にみるかぎり学校間格差というものを年ごとに思い知らされている。

公立校はかなりばらつきがあるものの、ときにずば抜けて光るのがあったものだから、「私立小学校の粒ぞろいでお行儀のよい作文はどうもねえ……」と、批判的だった仲間たちも、ここ二、三年公立校の現状を残念がる。

めくれどめくれど、お年寄りはおこずかいをくれるから好き、なになにを買ってくれるから好き、やさしいから好き、そんな内容の作文ばかり。そしてこども達は、そうしてくれる事を済まながっているのだ。

一方、毎年参加するミッシヨン系の女学院二校は、一年生からかなりの文章力なのだが、お年寄りの捉え方が違う。学校の指

導なのか家庭が常にそうなのか、敬語の使い方があまりに立派でちよっと面食うが、それはさておき登場する祖父母がいずれも、孫たちにたいして、自分の姿勢をきちんと示している。

たとえば二年生の或る子は、母親がやらせてくれない料理や菓子作りを、祖母の家と一緒に作らせてもらえらる事を喜び、またミシンかけを教えてもらった子は、手塚げや人形の服と一緒に作ったりして祖母と過ごす時間を楽しむ。六十五歳で生徒にバレエを教えるおばあさんから、レッスンで厭しい吐責を矢のようにあびせられながら、キリリとした姿に憧れ、自分もそういうおばあさんになりたいという子。

また或る子はお年玉もお小遣いもぜったいくれない祖母が、クリスマスと誕生日だけは必ず素晴らしいプレゼントをくれる。だけどそれがただではくれない、なにかの約束を守らないともらえない、「おばあちゃんまはきつとわたしに、約束をまもることや努力することを教えてくれているのだと思います」とこの子は結んでいる。

また、「中学生のとき戦争で英語を学べ

なかったおじいちゃんまたは、六十歳からラジ
オの英語講座で勉強をはじめました」と祖
父を尊敬している子、また夜中の往診に何
度もかけ「必要とされることがおじい
ちゃんよろこび」と孫に話してきかせて
いる祖父もいる。



さらに他人に向ける目もまた素直なの
だ。通学の途中、一時停車中の電車を乗ろ
うか降りようかと友達とドアを出たり入っ

たりしていて、ベンチにいたみすばらしい
おばあさんから厳しく叱られた時、自分た
ちが危ない目に会わないように注意してく
れたと、「ゆうきあるおばあさん」という
題で書いている。

公立校の中でも、かつては祖父母の働く
姿を生き生き描写したのがあって入賞して
いたのに、塾通いや学力本位の指導で祖父
母との関係が希薄になっているのだろうか。

そういえばこんのがあった。重病の祖
母を見舞っていて「もうじきあなたの息子
さんがきますよとお母さんがいいました」
と書いている三年生の男児。そして今年の特
徴は、祖父母ではまだピンピンしていて敬
老の日に似合わないからと、ひいおばあ
ちゃんを書く子がふえてきた事だ。そのひ
いおばあちゃんを老人ホームに見舞いにい
く描写はやはり私立校に多い。

考えてみれば、公立校のおおかたを占め
ている、すぐに小遣いをわたす年寄りたち
は、若いころに生活のためにのみ働き、自
分がきをするゆとりにも恵まれていなかっ
た人達なのだ。年金をもらって、小遣いに

は不自由ないけれど、自分に自信の持て
ないお年寄りが存在価値を示すには、こう
したやり方しか思い浮かばないのかも知れ
ない。

こうした年寄りを当たり前のようにして
育つ子供は、やはりそのような大人に成長
していつてしまうのだろうか。

年々、格差の開いてくる作文を見るた
び、思いやられる事である。

私の再就職物語

東京都品川区 潮田京生子(33歳)

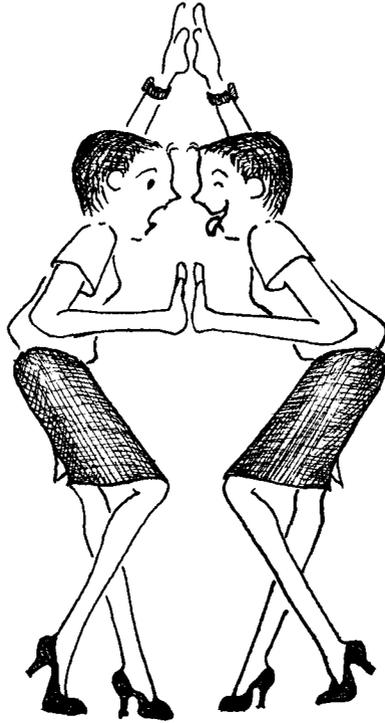
「いやー、たいへんだっ」

これが、再就職活動を終えた今の私の心
境だ。

「子どもが二歳になったら働くんだ」と固
く心に誓って、そのためにこの二月、消費
生活アドバイザーという資格を取得した。

その資格試験の主催協会に登録しておく

と、仕事の紹介が得られるというので、私は合格通知を受け取ってすぐにその書類を作成し提出しておいた。そのころは、「きつとすぐ仕事が決まる」と有頂天だったが、実はそうなるには、その後三カ月の時間が必要だったのである。



で、早速、その協会を訪ねることにした。久しぶりにスーツを着て、その事務局長に会ったのは三月中旬だった。
「今は不況ですしね。あなたのように就職希望の人が二百人くらいいるんですよ。あまり期待しないで下さい」という彼の言葉

子どもは四月から保育園に行っていて、それを続けるためには、四月中に仕事を決めなければならぬ。それでとりあえず、その紹介を受けるまでの間、パートをしようということになった。と同時に、資格を生かす仕事に早く就きたいと望んでいたの

に、一瞬、目の前が暗くなった。が、明るく「よろしくおねがいします」とやる気を示して帰ってきた。

さあ、次はパート探した。新聞の求人欄、求人誌をくまなくチェックして、履歴書を送る。某大企業の事務、結婚情報社

のカウンセラ―、電話での幼児教材のセールスなど、興味のあるものは臆せずアタックしてみた。

しかし問い合わせの段階で「幼い子どもがいる」というだけで、「保育園に行っている」と説明しても冷たく断わられたり、あらかじめ約束していた面接の日時に担当者不在といううさんくさい会社や、担当者の態度が横柄で、とても勤める気になれず失意のまま帰ってきたりもした。

パートも決まらず、紹介もまったくないこのつらい時に、私は一冊の本を思い出した。

それは、主婦の再就職を著者の体験をまじえて書かれたものだった。現在は、女性の職業相談を主な仕事とされているその先生に相談ののってもらおうと、勇気を出して電話をかけてみた。すると、簡単に面接の日時が決まってしまったのである。

先生は、私に営業の経験があるということとをたいへん気に入られ、「うちへいらっしやいよ」と強く誘って下さった。はじめて自分を認めてくれる人に出会えた喜びで、私はその誘いを即受け入れ、その日に

入社してしまふ。仕事は、先生が開発した女性のライフプランニングのノウハウを売ることである。それを女性の多い企業へ売り込みに行くのだ。

私は、その仕事自体は決していやではなかった。

むしろ、また社会の風にあたれるといううれしさでときめいていた。仕事のために、クレジットカードを二着も購入したほどだ。

しかし、私のやる気はしだいにしぼんでいく。それは、先生の主婦観があまりにも断定的で偏っていることに反感を覚えてしまったためである。「使いものになる主婦は三割ね。あとはぜんぜんだめよ」と、企業の男性に自嘲気味に話す態度も気に入らなかった。

主婦はそんなにだめなのか。あなたも主婦ではないか。私もだめな主婦なのか。いや、ちがう。私自身もまわりの主婦も、みんな一生懸命生きている。決して、現状の生活にあぐらをかいて、だからだしているわけではない。子育てに悩み、自身の生き方にも悩んでいるのだ。そして、どうにか

よりよい人生を歩めるよう努力している。その実態を先生は知らない。見ようとしていない。世の中は動いている。主婦だっただんどん変化しているのだ。

だんだん「やめたい」という気持ちが大きくなってきた。そして、それを決定的にしたのが、先生の会社の私物化だった。それは、若く社会経験が乏しい我が子を、次長として迎えようとしている事実だった。

結局、一週間でそこをやめてしまふ。やめたあとの落ち込みは激しかった。いったい自分は何がしたいのか、わからなくなりつつあった。

区の保育課にこの事情を説明すると、五月いっぱいまでに新しい仕事を見つければよいと言われ、安心をとりもどし、活動を再開した。

子どもが病気をすると園を休ませなければならず、その面倒は私がみるしかないことや、いつ協会から連絡があるかもしれないため、今度は在宅の仕事をした。そして、五月の初めに、高校生の小論文の添削という仕事を得たのである。

それを始めたところで、某メーカーから

仕事の案内書が送られてきた。

これこそ私か待ち望んでいた協会を通しての仕事だった。それから面接を受け、採用され、七月から週に二日、通うことになった。

仕事の内容は、家庭用品の商品開発である。

保育園の規定（週に三日以上、一日に五時間以上の勤務）があるので、七月からはこの仕事と添削を組み合わせていくことになる。

これで一安心ではあるが、先のことはわからない。そろそろ二人目を生んでもいいと思っているので、もしそうになったら、果たして仕事は続けられるかどうか不安ではある。しかし、「なるようになる」のだ。そう思うしかない。

この再就職活動を通して私は、久々に自分自身と真正面から向きあった。そして、やはり仕事をしたいと確信した。さらに、「運命の流れに逆らわず、しかし何事にも前向きに努力を重ねていくこと」という人生訓を得たように思う。

（え・橋本美智子）

うおつか流 生活リストラ術
生き活き人生シンプルライフ

うおつかじんのすけ
魚柄仁之助 著

東京都大田区 佐藤ゆかり

最近、普通の人が登場する「やりくり

上手」の雑誌記事や節約術を披露するテレビ番組が大人気で、その名人たちがマスコミの間でひっぱりだこらしい。

一回の使用でトイレの水を流さない一家や、新聞は取らずに隣人からチラシだけをもらう強者も現われ、感心をとおりこし、たまげていた。

だが、やはり上には上がいるものだ。

九州で過ごす十歳の夏、母の命令で扇風機の代わりに壁に風穴を開けたという、血統書付きリストラ名人の生活費は一月六万円。同居人と家賃を折半しているとはいえ、東京都内に住みながらのこの金額は「お見事」の一言に尽きる。

家具の多くは不用品を再活用したもの。

風呂の残り湯でモヤシを発芽させたり、電気釜一つでご飯とおかずを同時進行、

時間とお金のリストラに励んだり。アルコールと紅茶、キャラメルで「オールド風ウイスキー」を開発したこともあったとか。夏は水風呂が原則、体からの放熱で洗濯用のぬるま湯ができると喜んでいるのは、日本中でもこの人くらいだろう。

だが、だからといって、著者は「アリートキリギリス」のアリではない。

節約した時間は地ビール開発やギター演奏、ペーパーナイフ作りなど、儲からない趣味（失礼！）ちなみに著者は、ペーパーナイフ作家で古楽器屋のおやじ



さん）に費やし、お金は使う分しか稼ぐ気なし。要はやりたいたいことをやるため、経費のかからない生活を工夫し、工夫そのものを楽しみながら実践しているだけなのだ。

だから、彼のリストラ術はあくまでも明るく、「粋」とさえも感じる。で、読み終えて思うのは、「こんな生き方もあるんだ」。

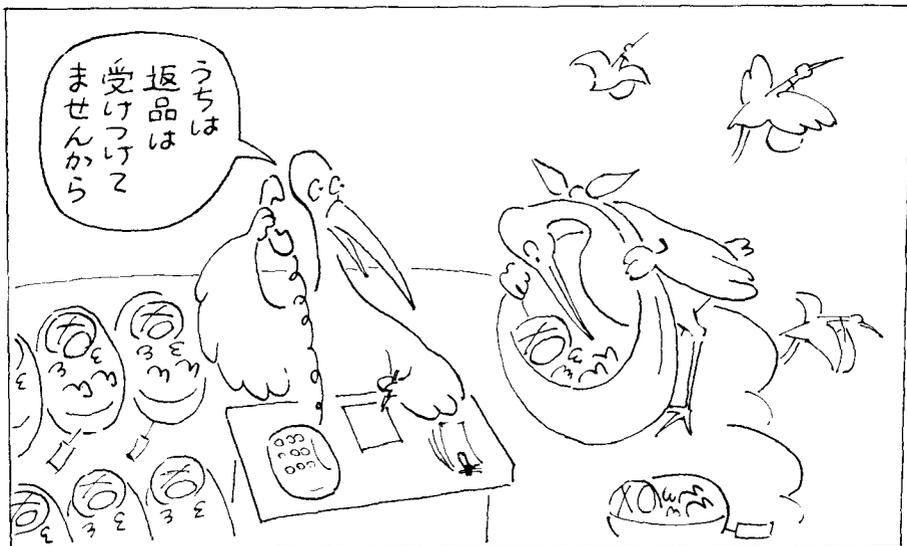
生活リストラ情報本としてはもちろん、人生読本としてもおもしろい、不思議な一冊だ。

農山漁村文化協会 一三〇〇円

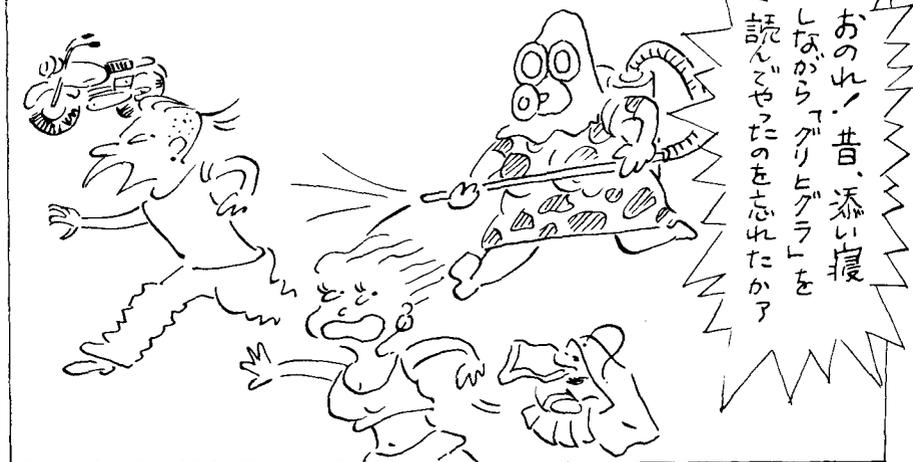
平成
おたまたげ-ジョン

アトピー、お受験、いじめ、登校拒否...
かしこきゃオウロ、アホなら就職難
— かつて、子供を育てるコトが、これ程
難しかった時代があったらうか! —

(2)



戦後50年 今繁栄の時代に母親達の逆襲



えいごゆめおいびとたち

英語夢追い人たち ①

語学喫茶物語



COME AND SEE MY FRIENDS AND I!

兵庫県川西市

タケ タニ
竹谷 セツ

語学喫茶というのは、たいていの人には耳慣れないことばだと思う。英語または他の外国語で雑談する喫茶店のことだ。喫茶店だから気が向いた時に行けばよい。コーヒー代で、いつまでもねばれる。語学校のようなおもしろくもないテキストを開く必要もない。好きなことを話していればよい。

その好きなことを話しているうちに、相手の生き方がみえてくる。

語学喫茶の共通語は英語だった。英語には敬語も、男女のことばの区別も、方言もない。少なくとも日本人が話すていどの英語にはない。だから日本語のように、ことば違いが違うということで、話しづらくない。誰とでも友達になれた。

それに英語だというせいで、日本語で話す社会から抜け出たようにも感じた。ふだんの自分とは違ったことをしゃべってしまふ。いつもは表にださない本音や夢がでてくる。日常生活を忘れさせてくれる語学喫茶は、現実の向こうの世界だった。

語学喫茶の魅力にとりつかれ、人生で

もっともかかわり、愛したものの一つになった。

語学喫茶店または英会話喫茶と聞けば、大阪ではたいてい行った。東京に行った時は、まさきに恵比寿の「コムイン」に駆けつけた。神戸三宮の「サンミハル」も三度も場所が変わったがどれも訪れた。

「プラスアルファ」にて

初めて英会話喫茶に足を踏み入れたのは、今から十七年前の一九七八年だ。主人の転勤で行ったニューヨークから帰り、大阪近郊の自宅で近所の子供たちに英語を教え始めていた。

好きな英語でいくらかの収入もあり、主婦グループのつきあいもできた。けれど狭い地域での主婦と子供だけの世界に物足りなく、また英語も上達したかった。

そんな時、新聞に英会話喫茶「プラスアルファ」の広告を見つけた。千円で時間制限なしの文句は、自分の趣味などに

高い費用をかけたくない主婦には魅力的だった。

「プラスアルファ」は大阪梅田のアーケードの通りにあった。ごちゃごちゃした飲食店などと並ぶ古ぼけた建物の二階だった。ミッシェン・オブ・ダ・ユースというキリスト教の団体の外人たちが、毎日交替で相手をしてくれた。私は毎週一回、午後をここで過ごすようになった。

楽しかったのは、男性ともゆっくり話できたことだ。最初はそれさえも、主婦なのにと罪悪感を抱いた。なにしろ日常接する異性は八百屋のおじさんくらいだったから。

語学喫茶でたくさんのお客さんにお目にかかったが、英語の世界でも一流になるには並なことをやっつけては駄目だ。一心不乱な努力が必要なことを、その人々から学んだ。

もう一つ学んだのは、社会の枠にとらわれずに好きなように生きるということだ。それまでの私は、周りの目はかり気にして生きてきた。主婦らしいことが

ら、はみだしてはいけなと自分を規制していた。一流大学を出て一流企業に入るのが人生だと世間を見ていた。ところが語学喫茶に入りにして、自分のやりたことに情熱をかけている人たちに出会った。人生の喜びはさまざまであると分かった。

「プラスアルファ」に通い出して一年もしたところ、大阪のその辺りは高層ビルが建つことになった。店を任されていたマネージャーは、そんなことをおくびにも出さず、内容を充実させるからと言って会費の値上げをした。

「プラスアルファ」が閉じたあと、そのマネージャーは心齋橋に英会話喫茶を作ったが、すぐ潰れてしまった。

「アメリカン」

「アメリカン」のことは「プラスアルファ」の仲間から聞いていた。新聞に取り上げられた記事を見た。「日本の中の外国」という見出しがついていた。大学の英語科を卒業して商社に勤めた女性

が、英語力の不足を痛感し、外国にしばらく滞在したあと、語学喫茶を開いたと紹介してあった。

けれど、私は行かなかった。外人スタッフが居ないと聞いたからだ。日本人だけで英会話をして、どこが楽しいのかと思った。

けれどしばらくすると、日常の刺激の無さにやり切れなくなった。主婦の世界だけでは物足りなかった。「プラスアルファ」で知った英会話喫茶の味も忘れら



頭の上げた外人のとなりに座っているのが私。「アメリカン」で

れなかった。

一度、行ってみようかと私は「アメリカン」の電話番号を回した。

南森町駅から五分ほど歩き、表通りから少し入った古いビルに「アメリカン」はあった。地下に通じる階段の手すりに、小さな案内板がくくりつけてある。しゃれたランプに照らされ、「語学喫茶『アメリカン』、英語、中国語、フランス語、スペイン語その他OK。ただし日本語禁止」と、マジックで書いてあった。しゃれたランプシェードと思っただけ、近くに寄ってよく見ると使い古しに英字新聞を張っただけのしろものだった。

階段を降りると、まるでほらあなの入り口のような、上部を丸く切り取った小さな重い木のドアがあった。思い切ってそれを押すと中は薄暗かった。古びた黄土色の壁のせいかな本当の洞窟のように見えた。カウンターの向こうの奥に、五、六人が一つテーブルを囲んでいるのが目に入った。カウンターの女性が戸口に私のほうにやってきた。

「グッドアフタヌーン！ プリーズ カムイン」

ただでさえどきまぎしているのに、初めから英語であいさつされ、すっかりた

じろいだ。

ポニーテールにした小さな顔の中の、あまり大きくはない生き生きした目が微笑みかけていた。冬だというのにTシャツにミニスカートといういでたちだった。その雰囲気とつやつやした顔は二十一二三にも見えた。

それにくらべてズボンにオーバーを着込んだ自分はいかにもオバンくさかった。

この人が新聞に出ていたオーナーの町田夢子さんなのかしら？ 年齢は三十三歳と書いてあったから、私とは二つしか違わないはずなのに。

「あの、新聞で見ただんですけど……」

おやおすと日本語で言いかけると、みなまで言わないうちに快活でなめらかな英語が返ってきた。

「お電話いただいた方ですね。どうぞ皆



さんの仲間にお入りください」

私を他の客たちに紹介するために、彼女は踊るような足取りで歩き出した。ミニスカートがひらひらし、くびれたウエストが魅力的だった。

みんなに彼女は夢さんと呼ばれていた。

テーブルを囲んでいた連中はまるで前からの知り合いのように私を迎え入れた。私が座ったとき、連中の一人の家に皆で遊びに行く相談をしていた。そして、私も招かれたのだ。私はうれしいというよるびびくりした。

でも「アメリカン」ではこれが当たり前なのだった。一步、足をふみ入れた瞬間から、だれもが仲間になるのだ。

「アメリカン」に来る前は男性と二人っきりで話し込むことなど、主婦の立場上、考えただけでもいけないことのように思い込んで来た。ところが、それにもだんだん慣れて平気になった。図ののって、飲み屋で二次会もするようになった。

梅田まで歩くと、二十分はかかる。普通なら相手にしてもらえないハンサムな

大学生と暗い道を駅まで話しながら行ける。英語のお陰で人生を楽しませてもらっていると、考える時がある。

「アメリカン」はディスコ

月一回、第三金曜日の夜、「アメリカン」はディスコに変身する。前から来たかと思っていたこの日にやっと来れた私は、立ったまま店内を見回した。いつもと違う雰囲気自分が場違いでないかとまどう。

テーブルは全部、廊下に出されている。店の奥が一段あがった舞台のようになっている、かっこうのダンスフロアだった。

夢さんが、うっとりトリズムにひたりまいった表情で踊っている。

「今日はセクシーだね」

「ミッキーと呼ばれている小柄な警察官が踊りながら話しかける。

「いつもでしょ」

夢さんはそのグラマーな肢体をゆすりながら、当然だというふうに答える。

カウンターに、緑の格子縞シャツに

ベージュのズボンをはき、黒ぶちめがねをかけた中年近い男が腰かけている。どこことなくキザで自由人と知識人の雰囲気を持ちあわせて、いつも大声で議論している男だった。前から一度話してみたかったので、その横におすおすと座った。

その男は、愛想よく話しかけてきた。

「僕はヒロ。よろしく」

「こちらも調子にのって仕事を聞くと、新聞の配達だよ」

一瞬、この男が冗談を言っているのではないかと、顔をつつめた。どこかの大学の助教授ぐらいかしらと思っていた。私の驚きを楽しむように、にやにやしながら男はつけ加えた。

「午後は日仏学院で、フランス語を習っている」

「それで、新聞の配達で生活をささえているの？」

「ぼくは、両親や税理士の兄貴にたかって生きているんだ」

意味が分からず私は目を見張ったままだった。

「僕は元全共闘だったんだ」

デモで機動隊ともみあった時、逃げ遅れて捕まったぞうだ。それから、保釈中に海外に逃亡し、向こうで見つかって強制送還された。その後、六年間独房に入れられたらしい。

「独房で……六年間も！」

「独房でできるのは、本を読むことと文を書くことくらいさ。叫び声をあげたいくらい人としゃべりたかった。叫ぶ代わりに書いた。毎日書かずにはいられなかった」

私は話の重みに黙りこんでしまった。話しているうちに怒りがこみあげてきたのか、声を張り上げて、まるで演説のように話し続けた。搾取、権力、支配、自由、権利、不平等、犠牲、歴史、死、愛など大時代があった言葉が機関銃のようにとびだす。上手とは言えない英語で、時々日本語が混じったりする。

あまりに大きな声に辟易したのか、夢さんが、ませかえす。

「まあ、大演説ねえ。だけど他の人にもしゃべらせてあげなさいよ。あんたの声



はもうたくさんだわ」

男はしゅんとして、それでも弱々しく反撃に出る。

「ぼくは彼女に英語を教えているんだ。特別に無料でね」

夢さんの舌先はますます鋭く、痛快にとどめをさす。

「あんたは、女性と話せるのがうれしくてしかたないでしょ。払わなくちゃならないのは、あんたのほうよ。ほら、彼女はここに英語を勉強しに来たんだから、少しは、しゃべらせてあげなさい」

それを聞いて私のほうに向きなおり、素直にひとこと言っ。

「じゃあ、ぼくの意見についてどう思う？」

高く響いたそのまじめな質問にみんなどっと笑い声をあげる。私もおもわず笑いながら、ちらっと心の底に痛みが走った。世の中にはテンポがずれていて、ドジばかり踏む奴がいる。

「踊ろうよ」

きまずい沈黙を破ろうとするかのよう
にヒロが言った。フロアーには誰もいな



い。踊りが上手でもない私は、ためらった。

「だいじょうぶ。誰か踊ったら、みんな踊りだすから」

ヒロのディスコダンスは上手だった。リズムにうまくのっている。ディスコになど行ったことのない私は見られるほどの自信がない。クリスやデイジーに「レッツ、ダンス」と誘うが、誰も立た

ない。見かねたのか夢さんが来るとフロアーは急に華やかになった。他の人たちも加わりだす。

スローテンポの曲がかかったとき、男と私の目が吸いつけられるように合った。二人の手が重ねられ、体を寄せあって、静かに動きだす。彼はスローダンスもうまかった。

男性たちは入れかわり立ちかわり夢さ

んにダンスを申し込む。胸が形よく盛りあがった夢さんに皆、恥ずかしげもなく体をびったりくっつけて踊りたがる。夢さんはどの男にもいやな顔はみせない。薄暗いフロアーにだんだん人数も増えてきて、私の気持ちもいくらか、はずんできた。狭いフロアーなので隣のカップルと肩がふれあったりする。

ヒロは私と踊りながら顔を横に向けて、隣で踊っている夢さんに話しかける。「今度、僕のうちでバーベキューパーティーをするんだけど、来ない?」

「誰が来るの?」

「フランス人のプロフェッサーだ」

最近、ラジオ講座でフランス語の勉強も始めた夢さんの気をひくつもりだろう。

「そうね、おもしろそうだけど……」
と、言葉がとぎれる。

「だけど……ねえ。いつも夢さんの答には、だけど……がつくんだ」

彼はためいきをついた。

なんだ、この人も夢さんファンの一人だったのか。あんなに夢さんにやつつけ

られたのに、まだこりないでお熱をあげているんだ。私のことはパーティーに招いてもくれないくせにと、急にしられた。

早い曲に戻ったので相手と体を離し、のどが渴いているふりをしてカウンタ―に戻った。そんな私を、ヒロは全く気にするふうもなく、いやがる若い女の子をさかんにひっぱり出している。

ディスプレイスコダンスなんて、どこがおもしろいんだろう。一人で一生懸命、体を動かしているなんて、滑稽で、むなししい気持ちになるだけだ。もっともヒロがこちらのほうを向き、向こうが伸び上がればこちらが縮まり、ほほ笑みをかわしあったときは、楽しいと感じた。でもヒロはすぐ夢さんや他の女の子のほうに向きを変えてしまった。

英語のタモリ

閉店が近い九時ごろだった。何かおもしろいことが起こらないかという気分が残っていた数人と話題をつないでいた。

そこへ欧米人といっしょに中年の背の

低い男性が入ってきた。たちまち、興味がこの二人に集中した。

欧米人のほうは、連れに気をつかっている様子で、あまり口を開かなかった。

藪沢と名のるもう一人はおしゃべりで、おまけに英語がとてつもなくうまくいった。皆がその英語に感心すると、興にのったのか、イギリス英語、アメリカ英語、オーストラリア英語と、器用に真似てみせた。アメリカ英語は、南部の黒人英語、東部のワースプ英語と、方言まで使い分けた。おまけに「これがフランス人の英語」と、フレンチ訛りの英語まで、やってのけた。まるでタレントのタモリが四か国語でマジヤンをするような英語の物真似に、圧倒された。おまけに話術がうまい。しわがれてはいるが、笑みを含ませた声でしゃべると、物事すべてが魅力的になる。

「僕の事務所は」と藪沢さんは言った。

「白い壁に真っ白な絨毯が敷いてあって、ソファが二つ置いてある。仕事で遅くなった時には、そこで眠れる。キッチンもついているから、コーヒーも入れられる。

秘書もコーヒーを入れてくれるが、まずくて飲めないよ。コーヒーも料理も、僕の腕は天下一品だ。僕のドレッシングを食べさせてあげたいな。ガーリックを効かせて、オニオンも入れる。そんなよそこのレストランの物とは、較べものにならないよ」

事務所を持っているなんて、職業はなんだろうと思った。

その事務所で年の暮れにポットラックパーティーがあるからと、電話がかかってきた。「ポットラックパーティーって何ですか」と聞くと、持ち寄りパーティーのことだと教えてくれた。

「だけど、僕は途中で、失礼しなくちゃならない。恋人に会いに行くんだ。秘書に鍵を預けておくから、君たちはそのまま楽しんでいいよ」

藪沢さんは、その恋人が大学で英語を教えている有能な女性で、十歳も年下である事、どんなにお互いに夢中であるかなどを並べたてた。わざわざ電話をもたうって、こちらも女性として多少なりとも胸がときめいたのが、興ざめた。何

のためにこんな話を聞かせられるのかと思つたが、なかなか刺激的な話だった。「彼女とはお互いの才能を認めあい、尊敬しあっているんだ」

「ベッドの中でも、英語で話すんですか」
「その時によるよ。でも夢中になつてるとは日本語になる」

「藪沢さんは、何もかも開けっ広げに話した。」

私は期待に胸を膨らませてパーティーの日の来るのを待ち、あれこれと着て行く服を考えた。白い絨毯で、天井には、きつとシャンデリアがあるだろう。テーブルには花が飾つてあって、持ち寄りとはいへ、藪沢さんお得意の料理も並べてあるに違いない。ゲストは外人と日本人と半々くらいの華やかな雰囲気の中で、ダンスも踊れるだろう。

京都の河原町駅から五分という便利な所にある藪沢さんの事務所は古いビルの二階で、表から階段で上がるようになっていた。多少すり切れているとはいへ、ソファもあったし、絨毯も白かベージュか定かではないが敷いてあった。客はほ

とんどが年配の日本人の男性で、来る予定だった外人は全員、都合が悪くなつていた。持ち寄りの品物は甘い物が多く、ビールには合わなかつた。秘書がつくつたサンドイッチだけが、どうにか食べられそうなものだった。期待はずれだったが、それでも、ゲームなどもし、人数も増え、藪沢さんの話術のお陰もあって雰囲気も盛り上がってきた。藪沢さんがいると、その場が楽しくなるのは、魔法のようだ。

このパーティーで、藪沢さんの正体が分かつた。通訳や翻訳、英会話教師といつた英語で食べている人間の一人だったのである。日曜日に外人を呼んで講演をさせ、それについて話し合うといった会員制のスピーク・インというサロンも主催していた。

スピーク・インをやる前は、商社員だったということだ。会社勤めと現在の仕事と、どちらが楽しいかという質問に、「そりゃあ、今のほうさ」と、断言した。「今は、毎日がエキサイティングで、やりがいがある。人生がずっと楽しい」

けれど、その楽しい人生も並外れた努力をしているから、ついてくるといふところが藪沢さんの話の端々から分かる。



「僕は、この辞書の中の単語で知らないのはない」

と、分厚い辞書を手に持って豪語した。「オーストラリア人が、今、僕に英語を習いに来てるんだ。貿易英語が分からないからね。もっとも、僕も会話の練習になるからと思って、レッスン料は取らないけど」

専門用語とはいえ、英語が母国語の人に、日本人が英語を教えるなんて凄いと、私は舌を巻いた。

やがて、藪沢さんは用意してあった真紅のバラの花束をかかえて、彼女のアパートに行くために立ち上がった。みんなが冷やかす中を、踊るような足取りで出ていった。

翌日の昼ごろ、電話が鳴った。笑いを含んだしわがれ声は藪沢さんだった。

一応の挨拶の後、「胃が痛い」と訴えるので、思わず「どうしたんですか」と聞いた。

「昨日は、一睡もしていない」

それが言いたかったのか。ままと策略にかかってしまった感じである。

「さぞ、楽しかった事でしょう」

私がおつきあいして答えると、

「朝、早く、手をつなぎあって、コーヒーを飲みに出たんだ」

と、さも、うれしそうに言う。四十過ぎの男が不倫の恋をあまりに無邪気に喜んでいるので、こちらも映画のシーンを見るように、社会的常識を脱ぎ捨てて、微笑ましく思った。

彼女のアカデミックな世界に感化されたのか、僕はこれから論文を書いて博士号を取ろうと思うなどとも、言い出した。

その後、藪沢さんのサロンに出かけると、顔が腫れあがり、片方の目の周りは青く痣ができ、右手に包帯をしている。例の彼女とパーティーに出たところが、その昔の恋人に出くわし、表でやりあったらしい。彼女と手をつないで仲睦まじくパーティーに出席するところから始まり、けんかの様子など微に入り細に入り、まるで目の前に見ているように再現して、楽しませてくれた。

その話し上手の藪沢さんが「僕のトーキング・ビジネスも傾きかけてきた。何でかわからない」と、ぼろっとこぼし

たことがあった。藪沢さんが年を取ってきて、若い人を引きつけられなくなったのか、それとも日本人がいくら頑張っても、外人じゃないといけなくなってきた時代なのかも知れない。

その後のある日、藪沢さんから貿易に転向して株式会社を設立し、記念パーティーをする案内状が舞い込んだ。風の便りに聞く会社は、うまくいっているぞうだ。

「世の中には何をやってもうまくいかない人間と、何をやってもうまくいく人間がいる。藪沢さんは後者のタイプだ」と、その会社に入入りしている人が感想を述べた。

最近、久しぶりに電話をかけたら、受話器を取ったのは奥さんだった。彼女との仲は壊れたが、オーストラリア人の恋人ができたこと藪沢さんが打ち明けた事があった。最後は奥さんの懐に戻ったらしい。

—つづく—

(文中の人物はすべて仮名です)

(写真提供・筆者)

(エ・カステラネコ)



アイムパーソナルカレッジ

「マスコミ就職講座」

開講(夜間)

「主婦のためのビジネススクール」アイムパーソナルカレッジが、働く女性や女子大生を対象に「マスコミ就職講座」をオープンします。

内容はライターを中心に、エディター、プランナーといったカタカナ職業に就職・転職するための道のつけ方、ノウハウなど。講師陣は山谷えり子氏(キャスター)、サンケイリビング編集長、岡本螢氏(シナリオ作家)をはじめ、講談社編集長、電通ディレクター、それに着物デザイナーきよ彦氏なども

予定しています。

▼期間 九月二十七日～十二月十三日 毎水曜日午後六時四十分～八時四十五分

▼場所 渋谷フォーラムエイト

▼受講料 全十二回三万八千円
くわしいお問い合わせはアイムパーソナルカレッジ(☎〇三―五四一〇―五四六四)まで。

「東京の女性議員調査」

を行いました

衆議院の女性議員比率は、世界で一四九位とお粗末なもの。

女性議員を増やすためには、まず女性議員への認識を深めようと、私達は東京女性財団の九四年度研究助成を受け「東京における女性議員の議会活動に関する調査・研究」を行ない、冊子にまとめました。

今回の調査では、女性議員だからといって、必ずしも女性の立場に立っているとは限らない

という事も分かりました。



女性が女性を支えてゆくのに必要な共通項は何か、何をしていけばいいのかわかて考えるために、一人でも多くの方に読んでいただきたいと願っています。

▼問い合わせは「女性と地方自治を考える会」まで
☎〇四二六―三六―八六三―

FAX〇四二六―三六―八六四〇
▼定価 八百円 送料二七〇円

矢崎泰久の伝習所

「泰久塾」開校

矢崎泰久「話の特集」元編集

長が、現在マスメディアで活躍している人やこれからプロを目指す人に向けて、ライティング講座を開きます。名付けて「泰久塾」。いずれも九月より開校します。

▼文章講座 毎月第三土曜日午後〇時～三時

▼ジャーナリスト講座 毎月第三土曜日午後三時～六時

▼読書講座 毎月一回日未定 それぞれ定員十名、期間は十カ月です。レポート提出+講評は随時行ないます。月謝は一講座一万五千元、二講座では二万五千元、三講座三万円。

▼マンツーマン講座 月一回三時間、予約制の個人授業です。月謝二万五千元。

ほかに作品を添削、講評する通信教育のコースも実施します。
▼応募資格 ジャーナリズムメディアで本気で仕事をしたい人なら誰でも。

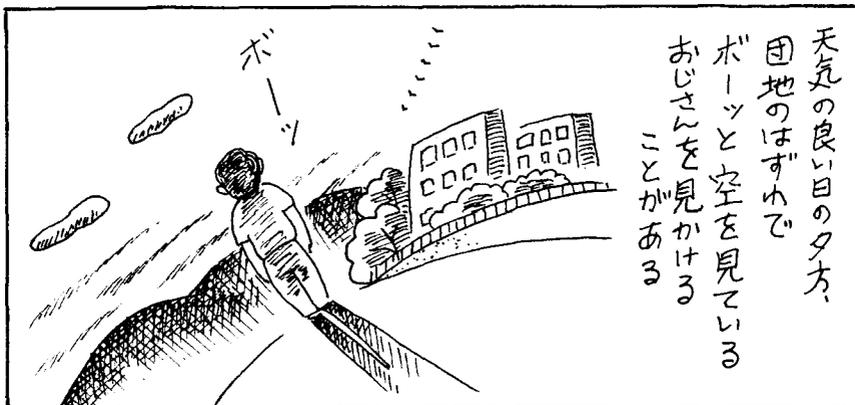
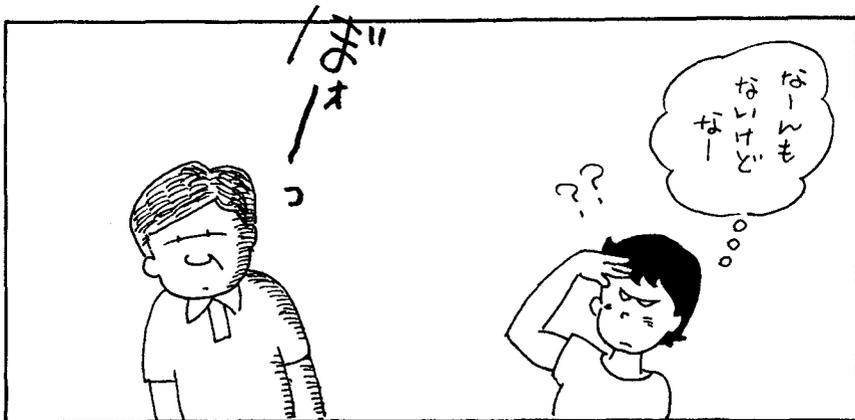
▼募集期間 七月一日～八月三十日。定員になり次第、締め切ります。お問い合わせは、

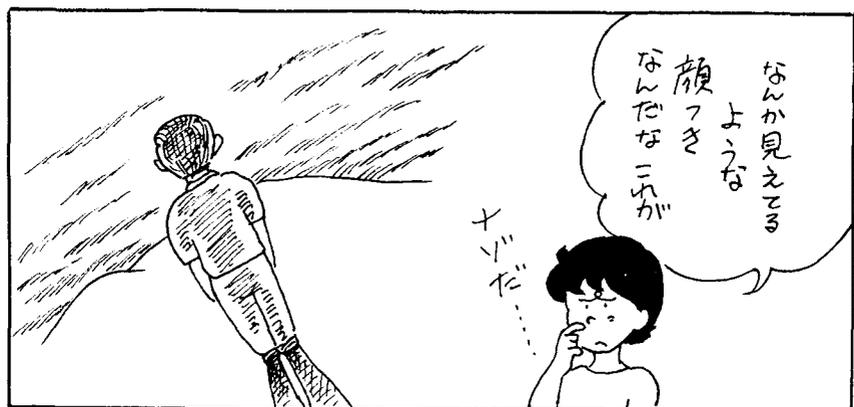
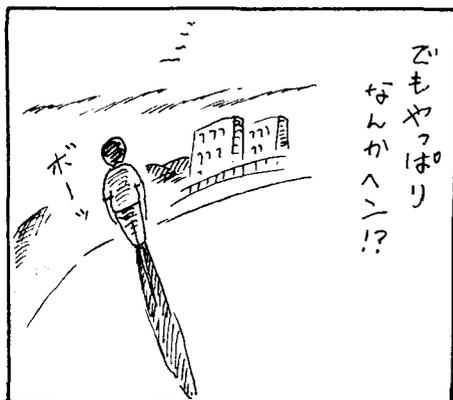
▼〒107東京都港区南青山五―四一六―三〇六 花林舎 鈴木まで
☎〇三―三四〇六―〇七〇―一

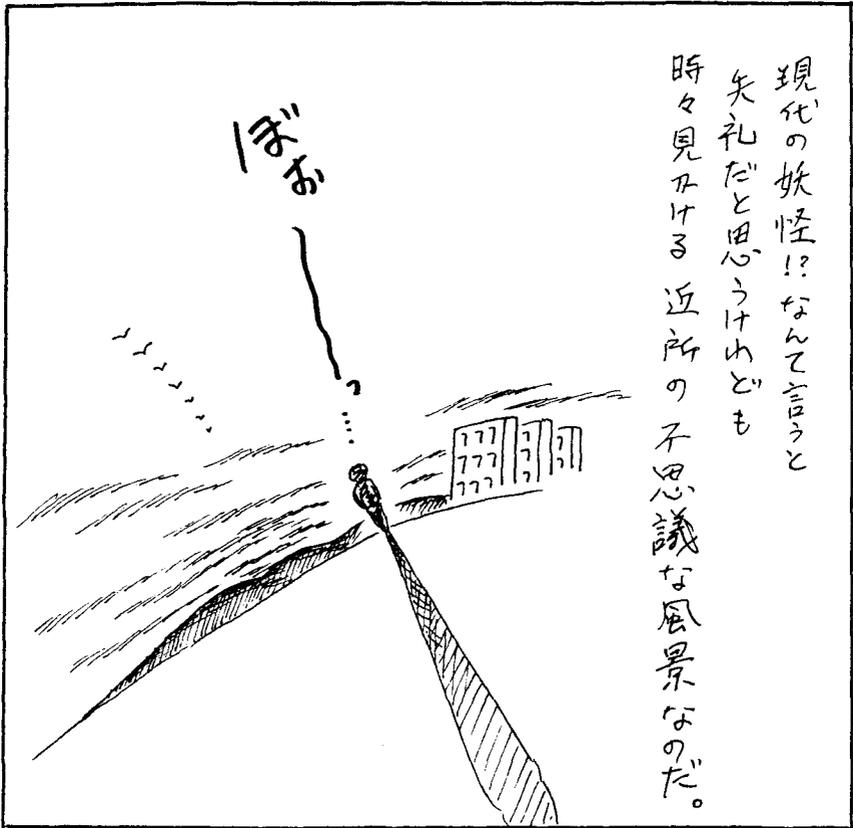
痛快! 解丸

栗田 ^{ひなみ} 冠









Femme

ファミ Politik

Politique

編集室より

どんなことにも「よさ」はある、が……

田中喜美子

「戦後五〇年不戦決議」で大もめにもめた国会の騒ぎ、まだ覚えていらっしやるでしょうね。結局のところ、太平洋戦争は何であったか、という評価の問題なのですが、

私たち戦後教育を受けた人間にはどうしてもわからなかった「あれは侵略ではない」と言い張る人々の気持ち、ファミ・ポリテイクで五月二十五日に行なってみた座談会でようやくのみこめた気がします。

あの戦争は「侵略」ではなかった、と言いたがる政治家の背後には、遺族会、戦友会など、たくさんの人々の支持があるので。政治家にとっては、選挙で落ちることほど怖いことではないのですし、自分たち自身も戦争に行った人たちもいて、やはりあれを「侵略」と思いたくないのです。

座談会に来てくださったのは、衛生兵として、インドネシアなどを転戦した当時二十歳そこそこだった方。中国・朝鮮で日本はほんとうにひどいことをしてきたのですが、東南アジアでは、植民地解放軍として、日本の進出を歓迎した現地の人々がいた、という状況が実際に存在していたことが、よく分かりました（マスコミの表面にはまったく出てこない話なので、興味のある方は読んでみてください）。

実際、「紳士的にふるまえ」と上官から言ってきたせられ、「これは植民地解放の

戦いなんだ」と教えられ、命をかけて戦った兵士たちがいた。私たちはそのことを理解しなければいけない、と思います。でも、それは全体として「あの戦争が何であったか」という評価の問題とは別だと思っております。

戦争が結果として、何をもたらしたか、ということになれば、私たち女性が、あの戦争から受けた恩恵ははかり知れません。

戦争がなければ、私たちが現在のように、法的な男女同権や、昔からみれば夢のような経済繁栄を楽しむこともできなかったでしょう。でも、かといって、アジアの人々に向かって、「あれは侵略ではなかった」などと言えるものではありません。

人生のさまざまな局面で、おんなじようなことがたくさんあるなあ……と思います。「主婦」とは何か、ということ巡って、昭和三十年代から、さまざまな論争がくり広げられているのですが、主婦という身分に付随する女性にとつての「よいこと」を中心に考えれば、どんなプラスの評価をしてもすぎることはありません。しかし家事・育児だけの専従者である「主婦」とは何か、という定義づけの問題を厳密に考え

れば、話は完全に別ものになるのです。でも、どうしてもそれを認めたくない、という多くの女性たちの気持ちは、太平洋戦争が「侵略」ではない、と考えたがる兵士たちの気持ちと共通しているのではないのでしょうか。

ともかく、実に意義深い座談会でした。

☆

田中を世話人のひとりとして「政策を提言する女性の会」が発足、ファムの編集室を拠点に、「国政選挙での女性の選挙行動」についてのアンケートを取ってみました。ものすごく面白い結果が出ていますが、回答者のバランスの取れた反応には驚きです。ちよつと気になるのは「千代の政治はなれ。よくよくわかったのは、「支持政党なし」の人々は、決して政治無関心派ではなく、実にまじめな、まっとうな人々である、ということ。その人々の意見を生かせない現在の政治というものには、ほんとうにやりきれなくなります。そうは言っても、私たちの関わり方がまだまだ受け身であることもたしかです。積極的な政治への関わり方を、みんなで見つけていきましょう！

高齢になったとき どこで生活しますか

高齢者はヤングオールド、オールド、オールドオールド、と三段階に分けて考えられています。ヤングオールドは、自分の身の回りのことができるだけではなく、他の人のことも援助できます。オールドは自分のことは自分でできる段階。オールドオールドは毎日の生活に、他の人の手を借りなくては生活できない段階です。

オールドオールドになったとき、どこに住みますか。体力と気力のあるヤングオールドの時期までに、このことを決めておく必要を感じます。

有料老人ホームの入居理由の一つに、家の管理ができなくなった、というのがあります。塀の修理、屋根の修理などの手配、庭の草取りなど、手に負えなくなるようです。

また高齢者のみの住宅の火災発生率が高いと、消防署が注意を呼びかけています。やかんや鍋をうっかり焦がした話を聞きますが、高齢の場合はうっかりという段階で

はなく、火を使っていることを完全に忘れてしまつて、家の火災にまで至ります。

有料老人ホームでは定期的に個人の居室の清掃をします。専用居室は基本的に入居者の責任で管理しますが、この定期的な清掃は欠かせない大切な仕事です。

押入の中に清涼飲料水の空き容器が山のように入っていたり、冷蔵庫の中に何時のものかわからない、おかずの残りが入っており、これらを食べては食中毒の危険があるからです。「もったいない」と取っておきますが、そのことを忘れてしまつのです。

老いを迎える前に、なにを準備しなければいけないか、考えてみましょう。

人間としての尊厳を保ち、毅然として生きていくには、精神的にも金銭的にも早い時期からの準備が必要です。

▼情報センターにお便りをください。また高齢者の受け皿としての施設について情報の欲しい方は、ぜひ老人ホーム情報センターまでお電話をください。担当 水落

父母と子の立場から教育・学校を考える

母と子 八月号 五〇〇円・千七十六円

今月の視点 (見本誌(旧号)進呈)

高校進学で知りたい点

母と子 二月臨時増刊 一〇三〇円・千八十四円

いじめの迷宮

私の意見

いじめ、いじめられる体験者、その母親や教師などからの手記、意見16通。

「いじめ」という迷宮 佐々木 光明

追いつめられる子どもといま必要なこと

いじめの再生産システム 前田 功

娘をいじめで自殺させられたことよって、いじめられていく親からのメッセージ

いじめとわが国の社会文化構造 福田 雅章

いじめ事件への弁護士の間わり 児玉 勇二

いじめ事件裁判の見方 山岸 秀

裁判所の判断と教育の論理

資料

いじめ自殺への社会的対応

新聞報道で読む岡山県総社市での事件とその後

お申し込みは書店か母と子社へ

〒203 東京留米市中央町五四一八
☎〇四二四一七四一九一二五

母と子社

わたしたちの情報紙

ふえみん

f e m i n

婦 人 民 主 新 聞

WOMEN'S DEMOCRATIC JOURNAL

ご希望があれば見本紙を送ります。

申し込み先 婦人民主クラブ 週刊1ヵ月 750円(送料込)。

東京都渋谷区神宮前3-31-18 電話03(3402)3244, 3238

大阪市北区中崎西3-1-5 電話06(371)2429

あさべつ・おんな・はたらく・がつこう
アジア・たべもの・せつけん・げんぱつ

わいわい がやがや

母と洗濯板

神奈川県大和市●浅田節子（63歳）

明治生まれの母は八十五歳。

未だにタライと洗濯板を愛用し、ブラウスその他をデコボコの板の上に広げて、昔ながらの固形石けんをつけて、ゴシゴシと両手でもんで洗っている。

数年前里帰りした時も、八十八歳を過ぎていたのに、腰をかがめての行動は大変だろうと、洗濯機を勧めたが、明治の女には一つの信念があるらしく、洗濯機は汚れた部分だけに力を入れて洗ってくれないし、第一布地が早く弱るといって、耳をかそうともしない。

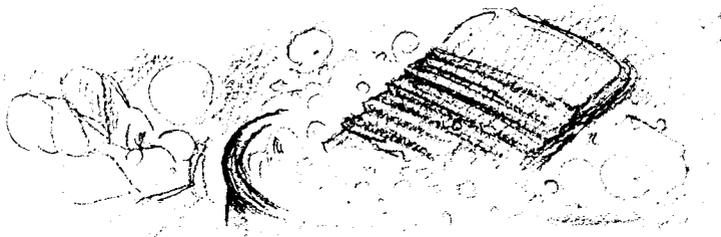
折角求めた洗濯機は、物を置くのに調法されている。せめて脱水機だけでも使用すれば冬でも乾きは早いのには、それもイヤ

がって、昔の生活には多くの思い出があるという母に、私は降参するしかない。

ところが——面白いことになった。近くに住む息子が立ち寄り「全自動で洗ったら楽なのに」と、しきりに勧めるが、私は今まで使い馴れた洗濯機には愛着があり、一回の水槽の水で二回洗えるし、全自動はお風呂の残り湯も利用できない上に、すすぎも不安で水道代もグリーンと高くなりそうだとモンクをならべてしまった。

考えてみると、明治の母に洗濯機のおよさをどれほど説明してもダメなように、昭和一ヶ月生まれの私に、息子が全自動をほめちぎって、使わせようとしてもダメなわけである。

変なところで、母と私は古い女の意地を通していうようで、やはり親子だと思っておかしくなった。



追っかけ、再び

香川県高松市 ● 一色京子 (27歳)

私の中でしばらく眠っていた「追っかけムシ」が、久しぶりに目を覚まそうとしている。

中学二年だった時、大好きだったアイドルのコンサートの初めて行った日の夜は、極度の興奮状態で、身体中が震え一睡もできなかった。

それ以来、なけなしのおこづかいをはたいてレコードを買い、コンサートに通い、とにかく彼を追っかけた。いつか、彼の目にとまり、そして彼女にしてみらう日を夢見て。

しかし、私も年ごろになると、さすがにアイドルの彼女を夢見るよりも、追っかけの対象はそのへんの人となり、けっこう追っかけ、少し追っかけられ



アイドル顔の夫と結婚した。

ほぼ専業主婦という地位を手に入れ、テレビのお守時間がすっかり長くなった私は、彼に釘づけになった。久しぶりにポーツとした。「カッコイイ」彼は今、人気絶頂のアイドルグループのひとりである。年下だろうが何だろうが、そんなの関係ない。「追っかけムシ」が、ムクムクと目を覚ました。

「コンサートに行きたい」、「ビデオがほしい」、「彼に会いたい」、「あんたと結婚したの早まった」。夫は、「アホか」という感じで「ハイハイ好きにしてちょうだい」と、半ばあきれかえって笑っている。

今は、将来自立した素敵な女性を目指して、あらゆる方向性をさぐる大切な時だと思ってるけど、ちょっと彼に夢中でそれどころではない。まあ、それもいいか、追っかけをしている時

の自分ってパワフルで、やたらとキラキラしてて結構好きだから。

本屋で、一生懸命アイドル誌をめくる私の背中越しに、「あんたは一生そのままだ。きっと明るいオバサンになるわ」と夫に言われ、ちょっとドキッとした。

チック症

愛知県岡崎市 ●大石泰子

次男は、二歳の時から現在まで、春と秋に必ずといていいくらい、チック症状が現われます。自然に発生して、いつの間にか治ります。夏と冬は全く消えています。

現在、小五になる次男は、昨年と比べて、ずいぶん気にする

ようになりました。友達も、だんだん気にして、「どうなの？」

と何人も聞いて来るのです。成長とともに、気にするのがひどくなるのだらうと思うと、中学生になったらもっと心配、と思わずにはいられません。

チック症状のある時は、いわ



ゆる花粉症と同時期ですし、アトピーとは違うようですが、やはり、顔以外全部、かゆいという状態です。アレルギーもチック症状になる事があるのでしようか。対策がそろそろ必要と考え始めた私に、情報をいただければ嬉しく思います。

(え・田村幹代)

お友達に「わいふ」をおすすめください

新しい定期購読者をご紹介くださった方には、次のように購読期間を延長させていただきます。

●定期購読者をお一人ご紹介くださったことに誌代プラス送料とも一号延長。

「わいふ」をプレゼントにお使いください

●ご結婚、赤ちゃんご誕生のお祝い、遠方のお友達とのコミュニケーションにどうぞ。お申し込みいただければ、まず新読者にきれいなプレゼント・カードをお送りしてお知らせし、以後一年間、毎回送本いたします。

●その場合も定期購読者のご紹介と同様に、お一人につき一冊分延長させていただけます。

次号投稿募集

●特集テーマ原稿

二五六号の特集テーマは、「私が離婚を考^わける理由」です。

出生率がようやく上がった、と厚生省などは喜んでいようですが、これに反し離婚率は上がる一方。若い女性記者などのグループで会をやると、見渡せば、あれバツイチばかり、などという状況まであるそうです。

アメリカ人は「結婚している理由がなくなれば別れる」のに反し、日本人は「離婚する理由がなければ結婚している」といわれますが、たしかに日本人の結婚生活はそこそこ平穩無事。しかしアメリカ的価値観からみれば、なぜ結婚しているの？と思われるほど意味なくつながっている夫婦も多いと思われま^す。「家庭内離婚」などは欧米の結婚生活では考えられないことでしょう。

しかしそんな日本人とて、とくに女は、「離婚したい！」と思うときがないではありません。

実行するか、しないかは別として、女はどんなときに離婚を考えるのか、次回はこのテーマでぜひご投稿をお寄せください。分量四百字詰原稿用紙十五枚前後。

締め切り八月二十五日。

●時事放談

今回は「私の出会ったこんな医者」です。あまり嬉しいことではありませんが、どんな人でもほとんど一生に一度は、医者との深い関わりを持つ運命に遭遇します。

教師の場合と同じことで、ほんとうにいい「先生」にめぐりあった場合は、一生感謝の念を持ち続けるのですが、これが反対の場合であつたら、命を預ける相手であるだけに、教師の場合より深刻な不信感を持つことにもなりかねません。

巡り会ったお医者さまとのさまざまなきえすを、腹藏なく語り合いたいと思ひます。

日時 八月九日(水)二時より。

ところ「わいふ分室」

場所は電話でお教えます。八月七日までにお申し込みください。

ご要望がしばしばあるので、原稿の添削をすることにしました。添削して欲しい方は、左記の要領でお送りください。

●添削のみ希望の方は、原稿の最初に「添削のみ希望」と赤字で書くこと。

●「わいふ」に投稿して、さらに添削希望の方は、「投稿、添削も希望」と原稿の最初に赤字で書くこと。

●投稿して、ポツになった場合のみ添削して欲しい方は、「ポツのときは添削希望」と、原稿の最初に赤字で書くこと。

添削料は四百字詰原稿用紙一枚につき(ワープロ原稿は20字×20行で打つこと)二千円いただきます。返送の際振替用紙を入れて、返送料共にご請求します。

誤字、仮名違い、文法、文脈などの誤りを正したうえ、編集長か副編集長が講評をいたします。

編集長の著書「書きたい女たちへ」も、基礎を勉強したい方にはおすす^めです。ご注文ください。

わいふ 投稿規定

●定期購読者はどなたでも(男性でも)投稿できます。原稿には住所(郵便番号、都道府県名から)、氏名、会員番号を明記のこと。誌上匿名・ペンネーム可。

次のコラムを設けています。

●エッセイスト・クラブ
(二六〇〇字まで)

びたりとキマった文章、豊かな内容を持った随筆をお寄せください。

●ズバリ一言(二六〇〇字まで)

オピニオン、評論、改善策の提案などの欄。政治、事件、芸術から身近の商品サービス、その他細かいことまで何でも遠慮なく言ってください。ただしなるべくあなた独自の考えを。

●マイジヨブ・マイホビー
(二六〇〇字まで)

本格的な職業生活から、パート、アルバイト、内職までの仕事について、また楽しみ、生きがいとしての趣味について、いずれにせよあなたの活動報告をお待ちします。

●家族と私(二六〇〇字まで)

一つ屋根の下にいる夫や子供はもとより、別居している親(舅・姑も含み)、成人して離れた子供、他人の始まりといわれる兄弟姉妹など、とにかく「身内」とあなたの関係レポートをどうぞ。

●おさない子を育てる
(二六〇〇字まで)

子育てはやはり、女性にとっての最大の関心事です。おさない子はかわいい、けど子育てはホントにしんどい！

現実のなかから、あなたと子供のありのままの関係を浮きぼりにしてください。

●大人になりかかった子供たち
(二六〇〇字まで)

反抗期、思春期、青年期の子供と親の関係についてお書きください。大きくなった子供の問題は、これまであまり言い立てられなかったと思いますが、若いお母さんにも将来の参考になるはず。体験談をお待ちします。

●忘れ得ぬ人々(二六〇〇字まで)

印象の深かった人の姿を描写してください。想い出の中にある人、現在関わっている人どちらでもけっこうです。いやな奴、すばらしい人、奇人変人、あなたの詳しい観察を。

●フリースペース(二六〇〇字まで)

どんなテーマでも書けます。思想・信条にかかわらず、一〇〇パーセント言論の自由のある「わいふ」ならではのコラム。

●わいわいがやがや(八〇〇字まで)

誰でも気軽に書けるコラム。

●サーブレシーブ(八〇〇字まで)

本誌の投稿や記事についての反響をお載せします。感想、反論、何でもどうぞ。

●ペンポイントニュース (四〇〇字まで)

ねえみなさん聞いて聞いて!と言いたいほんのちょっととした話のページ。こうやったら簡単に天井の掃除ができた、でもよし、安い旅館をうまく見付けた、でもよし、安い買い物、すてきな商品、何でもみなさんの役に立つごくごく小さいニュースを集めたいのです。

●おすすめの一冊(八〇〇字まで)

書評のコラム。女性問題にかぎらず、視野の広い読書体験を。

●情報コーナー(四〇〇字まで)

お知らせ、募集、お願い、探しもの、交換、相談、何でも。なるべく短く、要点をまとめてください。

●コラム以外の投稿募集

●特集テーマ原稿

毎回テーマを設定して募集しています。

●特別寄稿

ルポルタージュ、自分史、伝記、旅行記、その他の体験記、評論、小説、どんなジャンルのものでもけっこうです。枚数も

自由。本誌に適當と思われるものは掲載します。長編なら連載になります。

本誌には合わないが、価値ありと思われるものは、出版社に紹介、推薦します。

●カット・イラスト・写真・コミックも募集しています。ご自分の投稿にイラストや写真が用意できる方は、あわせてお送りください。

注意

●投稿は一人一篇に限ります。

●ただし次のコラムへのご投稿とは違ってかまいません。サブレシーブ・ピンポイントニュース・情報コーナー。

●投稿は原稿用紙に。本誌はタテ組みでするので、ヨコ書きはご遠慮ください(書き直すことになるので)。

●ワープロ打ち原稿は、字詰め二十字、二十行を一枚に、行間をあまり詰めないよう、また禁則処理をしないで打ってください。

●ファックスでの投稿は受け付けません。

●投稿は多少添削することがありますのでご了承ください。

●締め切りは原則として偶数月の二十五日

(当日必着)。それ以後に着いたものは次号まわしとなります。規定枚数はきっちりではなくともよく、長くても内容がよければお載せします。

●他誌との二重投稿はお断わりします。

●原稿はお返しできませんので、必要な方はコピーをとってからお送りください。

●匿名、ペンネームは原稿の最初に。住所、本名は、そのすぐあとに併記してください。

また整理の都合上、住所には郵便番号を付記し、本名には会員番号(本誌送付封筒の宛名の下と、振替用紙にあります)を付記してください。

●ペンネームをいくつも使い分けるのは、ご遠慮ください。居住地もとくに理由がなければ記載したいのでよろしく。ただし匿名・ペンネームは原則として自由であり、書くことの自由を守るためであれば、むしろ積極的に評価します。濫用は困る、ということです。

●年齢をお書きをえになりたい方は、名前の下に算用数字で。

●おたよりで掲載ご希望でない場合は、必ず私信とお断わりください。

編集だより

●前回呼びかけをした結木美砂江さんの追悼文集への寄稿とお手伝い、十八人のかたがたが応じてくださいました。寄稿をしてくださる方は、さっそく編集部まで原稿をお寄せください。長さは自由。締め切りは八月十五日です。編集を手伝ってくださる方には、原稿が集まってからお声をかけさせていただきます。どうぞよろしくお願いいたします。

●今回の投稿数は、前回よりさらに減って六十通だけでした。特別寄稿の長いものはいくつかあり、また内容のよいものが多かったので十分にページが埋まったのですが、どうしてこんなに投稿が少なくなったのか、これらもまだオウムのせいなのか、と首をひねっています。八月はまたいつも投稿が少ない月なので、この調子で減っては困るなあ、と心配です。投稿なさりたい方にはよいチャンスです。どうか奮ってご投稿ください。

●七月四日のわいふ主催の文章講座は、新

聞のお知らせ欄がどこもとりあげてくれず、わいふの会員だけのあつまりになりました。でもとてもリラックスした楽しい会でした。

●地方の会員の方で、わいふの文章講座が開けたらなあ、と思っていらっしゃる方、開催してほしい、と地元自治体に頼んでみてはいかがでしょうか。遠隔地の場合は何度も行けないので、編集長と副編集長がそれぞれ一回、ということになると思いますが、伺ったところではいつもとても喜ばれています。

●二五四号の二三四ページの下端六行めの発言、「右翼です」というのを「保守です」としたいと発言者から訂正の申し入れがありました（ミスプリの訂正ではありません。念のため）。

●投稿したくても、なかなか気軽にペンがもてない……というお声が時々聞かれます。そういう方のために、「私もひとこと」というコラムを新設しました。どんなにささやかなことでも、どんなに短い感想でも結構ですから、気軽に声を寄せてください。ただし二百字まで。お待ちしております。

購読申込は……

ハガキか電話でどうぞ。すぐ本に振替用紙を添えてお送りしますので、折り返しご送金ください。バックナンバーのご注文も同様。

WIFE・255

(隔月刊)

1995年9月1日発行

編集・わいふ編集部

定価550円(本体533円)

(年間購読料送料共4500円)

印刷・平河工業社

発行所・機グループわいふ

東京都新宿区矢来町115

東海神楽坂マンション406

〒162 TEL (03)3260-4771・4773

郵便振替00150-3-110430

加入者名 わいふ編集部

購読中止は……

必ずお申し出ください。送金をお忘れになる方が多いので、誌代が切れても引き続き送本しています。お申し出がないとお送りしてしまうので、ぜひハガキか電話を。

●北欧に学ぶ日本女性の未来●

行ってらっしゃい 北欧留学 フォルケホイスコーレ
女性40代からの 北欧留学 を知っていますか？

遙 ゆう編著 定価2500円

これから北欧留学を目指す女性に最適の案内書。北欧全土に広がる独特の成人教育機関、フォルケホイスコーレ紹介をしながら説く北欧留学のすすめ。

スカンジナビアン・インスピレーション③ 95年8月刊

子連れ女のセカンド・ラブは、トラに喰われるよりむずかしい

ゲルゴン・ビネバル著 北欧の福祉・文化研究会編

A5版ブックレット・64P・定価1000円

一人親家庭でも生きやすいデンマーク。まず、社会サービスが違い、意識が違う。子供は社会で育てる、という考え方は揺るぎがない。著者の日本での講演の他デンマークの家族に対する社会サービスのあましを掲載。

スカンジナビアン・インスピレーション①

キーワードはノーマリゼーション

オーセ・オーレセン/ヨン・ボーエ・ニールセン 共著

A5版ブックレット・52P・定価1000円

高度な福祉社会はどのようにして発展してきたのか。デンマーク元社会大臣と国民高等学校教師が明快にとく。デンマーク福祉の本質と歴史が2時間でわかる好著。

スカンジナビアン・インスピレーション②

日本人って何考えてるの？ 3人のスカンジナビアの若者が見た
現代ニッポン

K・アーレンバック/S・ラーセン/K・メリーン 北欧の福祉・文化研究会編

A5版ブックレット・40P・定価1000円

終末感ただよう日本に滞在するデンマーク、ノルウェー、スウェーデンの若者がそれぞれの感性で語る日本と日本人へのメッセージ。愛するがゆえのきびしい意見も。

アンデルセンの国から来た風変わりな竜と少女の物語

レーネとドロムレ

カレン・ヴィーゼボク著 トーモズ・キッセ絵 村井誠人訳

A5版・84P・上製・定価1450円

レーネは竜と話ができる。だから一人の時も大丈夫。少女の心の成長を描いた傑作童話。

冬生まれの子ども 一産婦人科病棟 0号室

ディア・トリア・メアク著 田辺 欧訳 (大阪外国語大学講師)

A5版・350P・定価2884円(税込)

産んでから読むか、産む前に読むか、産まずに読むか。女達の「連帯」とは何か？女達の真の解放とはなにか？冬の産婦人科病棟を舞台に描かれる女たちの様々な人生。

デンマークの歴史 95年10月刊

ヘリエ・サイゼリン・ヤコブセン著 高藤直樹訳 村井誠人監修

A5版・220P・定価4326円

デンマークの歴史の入門書。デンマークは、今日でこそ小国にすぎないが、王国としてはヨーロッパ最古であると考えられておりその歴史は古く、しかも多彩である。本書の執筆に際しては、歴史上の出来事のできるだけ正確に、年代順に追って行くことを心がけたが同時に周辺の国際情勢や諸外国との関係にとりわけ注意を払った。(著者「まえがき」より)

福祉が生きる国デンマーク・スウェーデン

素顔のノーマリゼーション

木下安子(白梅学園短大教授)・バンク=ミケルセン他著

B5版 定価1545円 80P 写真多数

「基本が違う、基本が」日本の福祉現場で働く24人が活写するデンマーク、スウェーデンの福祉視察レポート。ノーマリゼーション思想の提唱者バンク=ミケルセン死去直前の貴重な講演を収録している。福祉大国理解への入門書。

有限会社 **ビネバル出版** 東京都新宿区水道町4-28村上ビル
03-5261-8899 FAX 03-5261-0025

ビネバル出版<発売元(株)星雲社>の本は全国の書店で購入することができます。書店にない場合は小社(03-5261-8899)までお申込み下さい。4-7日でお手元に届きます。

死なないで!

1945年異国郵便局「九人の乙女」
川藤康史文・大宮隆雄絵

●小学上級以上向
*13500円

敗戦5日後、ソ連軍上陸の中で自決した電話交換手の乙女たち。
アメリカは父さんの敵だった

大橋祥宏著
●小学上級以上向
*15000円

軍港横須賀の一国民学校生の目で、疎開、敗戦、米軍進駐を再現、伝える。

海に墓標を

伊藤伸文・田中道子絵 発見された油絵の船の運命は... *12000円

あまとんさん

赤田美津子著・高田真木絵 奔放な少女の成長を描く... *10000円

海図にない島へ

赤田美津子著・吉本京絵 船カス島で働いた少女は... *11000円

海を渡ったタヌキたち

海野澄江文・高田真木絵 戦中タヌキと人間の交流... *12000円

おじいさんの戦争は終わったか

近藤兼太郎著 中国人捕虜設置におじいさんが... *12000円

本 森に帰る

吉田洋子著 「あなたの本と云海の森を交換しますと集めた本が35万冊。人を引きつけ行動が本の方でユークな町づくり。」 *16000円

いなかに移り住むとどうなるか

寺田英子著 「何十年も離れていた家に帰ってきたらどんな気分ですか。1ターンの熟年夫婦の新鮮ふるさと探しと驚きを描く。」 *17000円

もつと自由に母乳育児

山田みゆ子著 ちよつとした工夫でおいしいおっぱいが続けられる。赤ちゃんにも母乳にもやさしいコツをイラスト付で。 *13000円

図集 幕末・明治の生活風景

須藤勉著 幕末・明治にかけてのニッポンを外国人はどみかたか... 6百余枚の貴重な写真や素描を集成し解説。●A判・増頁 *1万7千円

●だれでもできるおいしいパンのつくり方 ●
はじめのパンづくり



サクッ
あつちにバターやジャムをたっぷりぬって食べましょう!

●天然酵母菓子 3つの基本生地だけで応用は40以上。道具は極力少なく袖か計画もなし。ヘルシーパンからお菓子パンまでの作り方。●イラスト多量 カラー100枚付 *13000円

●パンの本 大好評! 大好評! 大好評!

●カンタン流手づくりパン 坂本眞子 *14000円

●天然酵母で国産小麦パン 矢野さき子 *12000円

●天然酵母で国産小麦の和風パン 矢野さき子 *13000円

●素材の持ち味を生かし切る料理集 / ●

簡素な食事の本 ●四季の味、いつもの味

千葉道子著 *15000円
シンプル(簡単に)おしやれ(楽勝)！ 簡素とはちがう、洗練された簡素なおいしい食事の基本と応用百六〇のレシピ / ●農文協の好評クッキングブック

●だしの本 千葉道子著 ●毎日のだしから濃縮だしも *13000円

●時短料理の本 段取りスミス、仕上がりヒトナリ。 *16000円

●自然流「乾物」読本 用乾物百科、読んで楽しい実用乾物辞典 *16000円

●旬を食べる 読者アンケートから四季と野菜の四季 *12400円



最新刊!

生活世界の環境学 ●琵琶湖からのメッセージ

山田由紀子著 大都市の水ガメを超えて、その地に暮らす人と水をとらえるしなやかな視座！ 生活環境主義を提言。46冊。増頁 *28000円

山間地産直革命

小泉隆一・小笠原隆著 若手の山村と首都圏大地を守る会との産直提携から、脱産業主戦時代への都市と農村関係を構想。 *17000円